

水田上町遺跡

福岡県筑後市大字水田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第63集

2005

筑後市教育委員会

みずたかみまちいせき
水田上町遺跡

2005

筑後市教育委員会

序

当遺跡が所在します水田地区は、筑後市の南西部、標高6m位の扇状地性低地にあり、現在は米・麦・い草・苺栽培を中心とした田園地帯がひろがっています。当地区は、過去の発掘調査によって縄文時代から中世までの遺跡が点在していることが明らかにされていますが、当地区が活気となるのは、安樂寺領水田荘が成立して「老松宮（現在の水田天満宮）」が創建された以後のことです。また、近世には往還（柳川一福島間）沿いに水田天満宮を中心とした在郷町が栄え、近代には和傘産地として全国でも有数の生産量を誇っていました。

さて、本報告書は専用住宅建設に伴い、平成15年度に筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の記録です。発掘調査の結果、予想以上の遺構や遺物が多数確認され、新たに貴重な資料を加えることができました。本報告書が地域における文化財保護思想普及の一助として、また、学術研究の資料としてひろく活用されることになれば幸いと存じます。

おわりに、本報告書の刊行にあたり、発掘調査から整理報告に至るまで、多大なご協力を頂きました関係者並びに作業参加者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

筑後市教育委員会
教育長 城戸一男

例　言

- 本書は、専用住宅建設に伴い、筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 発掘調査から報告書作成に至るまでの諸作業は、すべて筑後市教育委員会が行い、出土遺物・図面・写真等は、筑後市教育委員会において所蔵・保管を行っている。なお、発掘調査並びに整理作業の関係者は「I.調査経過と組織」に記したとおりである。
- 調査に用いた測量座標は從来使用していた国土調査法第II座標系（日本測地系）を基準としている。よって、本書に示される方位はG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度はこれを基準としたもので、水準はT.P.を基準としている。
- 本書に使用した図面のうち、遺構実測図は永見秀徳、上村英士、立石真二、小林勇作が作成し、遺物実測図及び図版清書は佐々木寿代が作成した。
- 本書に使用した写真のうち、遺構は永見、上村、立石、小林が撮影し、遺物は小林が撮影した。
- 本書に使用した遺構番号で、遺構の種別記号を「SE-井戸」「SD-溝」「SK-土坑」「SP-ピット」「SX-不明遺構」で表示した。なお、種別記号の前に記した数字は調査次数を表わす。
- 本書の執筆と編集は小林が行った。

目　次

I.調査経過と組織	1
II.位置と環境	2
III.調査成果	7
(1)はじめに	7
(2)基本土層	8
(3)検出遺構	8
(4)出土遺物	17
IV.まとめ	67

I. 調査経過と組織

今回の発掘調査は、筑後市大字水田字上町53、54の2筆に専用住宅建設を予定する岡邦彦氏から埋蔵文化財の取り扱いについて筑後市教育委員会へ照会があったことに始まる。平成15年3月4日に試掘・確認調査依頼書が提出され、同年4月2日に重機による試掘調査を実施したところ現地表面から約70cm程のレベルで複数の遺構を確認し、ここから中近世の遺物が多く認められた。この結果を基に岡邦彦氏並びに関係者で協議を重ねたところ、掘削及び削平を受ける建設予定範囲において、筑後市の主体において発掘調査を実施することとなり、平成15年度に実施した発掘調査費用は国（50%）・県（20%）・市（30%）、平成16年度に実施した整理作業及び報告書作成費用は国（50%）・県（15%）・市（35%）の割合で負担した。発掘調査は平成15年5月6日から同年6月30日の間実施し、整理作業及び報告書作成作業は平成16年度に行なった。なお、発掘調査の概要は以下のとおりである。

【発掘調査日誌】

平成15年5月	6日 現場境界フェンスの設置	平成15年6月	6日 遺構写真撮影
	9日 重機による表土剥ぎ開始（南西部）		10日 重機による表土剥ぎ開始（北東部）
	19日 現場テント設営		16日 反転後の遺構検出作業
	20日 遺構の検出・掘削作業開始		17日 測量・遺構掘削及び実測作業開始
	21日 測量及び実測作業開始		29日 遺構写真撮影・現場撤収
			30日 重機による埋め戻し

【調査組織】

1. 平成15年度体制（発掘調査）

総括 教育長	牟田口和良（～9.30）・城戸 一男（10.1～）
教育部長	菰原 修
庶務 社会教育課長	松永盛四郎
文化スポーツ係長	成清 平和
主査	大島 靖彦
係	田中 純彦・永見 秀徳・上村 英士・小林 勇作（調査担当）
	立石 真二（嘱託）

発掘調査参加者（順不同、敬称略）

発掘作業員 加藤 札子・下川 義文・角 里子・田島ヤス子・田島 好江

2. 平成16年度体制（報告書作成）

総括 教育長	城戸 一男
教育部長	菰原 修
庶務 社会教育課長	田中 優一
文化スポーツ係長	成清 平和
主査	綾部 純
係	田中 純彦・永見 秀徳・上村 英士・小林 勇作（報告書担当）
	立石 真二（嘱託）・阿比留士朗（嘱託）

整理作業参加者（順不同、敬称略）

整理補助員 平塚あけみ・仲 文恵

整理作業員 佐々木寿代・野間口靖子・野口 晴香・横井 理絵

なお、発掘調査及び報告書作成に際しては以下の方々にご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

宮原恭盛（水田天満宮）、古賀康文（株式会社古賀建設）、東坂弘（財団法人文化財建造物保存美術協会）、小川泰樹（福岡県教育庁）、大石昇・古賀正美（以上、久留米市教育委員会）、山村信榮・井上信正（以上、太宰府市教育委員会）、松尾寛政・古賀毅（以上、筑後市役所）

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中央部にある。市域をJR鹿児島本線と国道209号線が縦断し、国道442号線が横断する。また、市南西部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には倉目川が西流する。市北部には耳納山地から派生する八女丘陵が西に延び、灌漑用の溜池が点在する。低位扇状地である東部や、低地である南西部には農業水路が発達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や南西部では米麦を中心の田園地帯が広がる。市街地は、国道に沿って市の中心部に形成されている。

当遺跡が所在する水田地区は、市の南西部、標高6m位の扇状地性低地に立地する。古くから水稻栽培に適した地域であり、現在もなお米・麦・イ草・蕎麥の栽培が盛んに行われている。水田地区的象徴ともいえる水田天満宮は、13世紀に安楽寺領水田荘として成立した鎮守社として、嘉禄二年（1226）普原為長によって創建された由緒ある神社（当時は老松宮）で、昭和36年に県指定文化財に登録されている。この水田天満宮を中心に展開する水田町は、近世に栄えた在郷町の名残りであり、当時の主要道路であった往還道（柳川市・柳川市～福島：八女市間）沿いに形成された町である。現在は当時の面影を僅かに残す程度であるが、かつては油屋・醤油屋などが軒を並べ、土器の「水田焼」特産地としても有名であった。また、近代では全国有数の和傘産地として発展したが、戦後、洋傘の普及により和傘生産は途絶えることとなる。

さて、次に当地周辺に分布する遺跡について概観する。Fig.1に示すように、周辺では各期における遺跡が広く分布していることが窺える。まず縄文時代では、当遺跡の南西に位置する「水田正吹遺跡」で落とし穴状遺構が確認されている。残念ながら、当該期の遺構はこの1基に止まっているところであるが、弥生時代になると一転する。当地区的南隣に位置する常用地区では、弥生時代前期後半の集落が形成されており、中期になるとその集落が徐々に周辺へと展開する。当遺跡周辺では南東部に点在する「水田杉ノ元遺跡」や「水田山伏遺跡」、「水田上平雲石遺跡」があり、掘立柱建物や土坑などの他に祭祀的要素をもつ周溝状遺構、更には地元で「いば観音」と呼称され奉られている巨石付近から中期初頭に比定される甕棺墓なども確認されている。更に後の弥生時代後期では、当遺跡の北西部にあたる「古島複崎遺跡」「下北島複崎遺跡」「下北島久清遺跡」で大規模な集落が形成されたが、この期を境に次第に集落は衰退していくこととなる。時代は下り、次に画期を迎えるのは安楽寺領水田荘が成立した中世以降である。中世の主要な遺跡としては、井戸4基と鍛冶遺構にみられる鉄滓や鉱滓が確認された「水田下桜町遺跡」や16世紀代の遺構や遺物が出土した「上北島篠島遺跡」などが点在する。

【参考文献】

- 『筑後市史第一巻』 筑後市（平成9年）
- 『筑後西部地区遺跡群Ⅰ』 筑後市文化財調査報告書第29集 筑後市教育委員会（2000）
- 『筑後市内遺跡群Ⅱ』 筑後市文化財調査報告書第31集 筑後市教育委員会（2001）
- 『上北島篠島遺跡』 筑後市文化財調査報告書第39集 筑後市教育委員会（2002）
- 『筑後市内遺跡群Ⅲ』 筑後市文化財調査報告書第44集 筑後市教育委員会（2002）
- 『福岡県指定文化財』 水田天満宮本殿保有修理工作報告書 筑後市文化財調査報告書第53集 筑後市教育委員会（1999）
- 『筑後西部第2地区遺跡群（Ⅲ）』 筑後市文化財調査報告書第57集 筑後市教育委員会（2004）

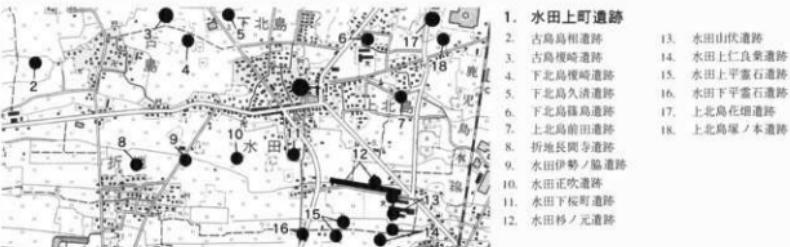


Fig.1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig.2 遺構略測図 (1/100)

番号	遺構番号	地	地	地	遺構の位置(1. (北-東))
1	1320001	H2	地	2-1-28 40-50	
2	13P002	H3	1'×3'	2-1	
3	13P003	G2	+	50-53	
4	13P004	F2	+	41-44	
5	13P005	F2	+	55-58	
6	13P006	F2	+	138140m 50-58	
7	13P007	F2	+	138140m 50-57	
8	13P008	E3	1'×3'	138140m 50-56	
9	13P009	F2	+	138140m 50-57	
10	13P010	F2	地	50-51	
11	13P011	E3	1'×3'	50-51	
12	13P012	E3	+		
13	13P013	E3	+	110-13	
14	13P014	E3	+	50-54	
15	13P015	F4	1'×3'	60-77-15	
16	13P016	E3	1'×3'	+	
17	13P017	E3	+		
18	13P018	E3	+	138140m 69-71-16	
19	13P019	E3	+	138140m	
20	13P020	F4	1'×3'	103-105-134-130	
21	13P021	E3	1'×3'	69-21	
22	13P022	F4	1'×3'	134-23	
23	13P023	E3	1'×3'	+	
24	13P024	F3	+	50-64-24	
25	13P025	F4	1'×3'	80 (103-25-20)	
26	13P026	F4	1'×3'	60-27-20	
27	13P027	F4	1'×3'	40-27-20	
28	13P028	G3	1'×3'	91-29-20	
29	13P029	F4	1'×3'	40-29-20	
30	13P030	F4	1'×3'	60-20-25	
31	13P031	H4	1'×3'	40-19-21	
32	13P032	H4	1'×3'	40-22	
33	13P033	H3	1'×3'	40-23	
34	13P034	H3	1'×3'	35-34	
35	13P035	H3	1'×3'	35-34	
36	13P036	H4	1'×3'	+	
37	13P037	H4	1'×3'	30-37	
38	13P038	H3	1'×3'	10-10	
39	13P039	H3	1'×3'	10-10	
40	13P040	H4	1'×3'	10-10 (10-10-10-10)	
41	13P041	F2	1'×3'	50-41-44	
42	13P042	F3	1'×3'	60-42	
43	13P043	G4	1'×3'	+	
44	13P044	G4	1'×3'	+	
45	13P045	H5	1'×3'	60-85-45	
46	13P046	H3	1'×3'	50-40-32	
47	13P047	H3	1'×3'	+	
48	13P048	H4	1'×3'	64-43	
49	13P049	H5	1'×3'	60-67-49	
50	13P050	H5	1'×3'	60-67-49	
51	13P051	H5	1'×3'	60-67-49	
52	13P052	H5	1'×3'	60-67-49	
53	13P053	H5	1'×3'	60-67-49	
54	13P054	G5	1'×3'	60-67-49	
55	13P055	L5	1'×3'	50-50-50	
56	13P056	G5	1'×3'	50-50-50	
57	13P057	G5	1'×3'	50-50-50	
58	13P058	G5	1'×3'	50-50-50	
59	13P059	G5	1'×3'	50-50-50	
60	13P060	R5	1'×3'	50-50-50	
61	13P061	C5	1'×3'	73-61	
62	13P062	G3	1'×3'	+	
63	13P063	G3	1'×3'	43-5	
64	13P064	F3	1'×3'	50-62-64-24	
65	13P065	G4	1'×3'	110-65	
66	13P066	F3	1'×3'	138140m 66-62-17-07	
67	13P067	F3	1'×3'	60-67	
68	13P068	E3	1'×3'	95-68	
69	13P069	E3	1'×3'	77-81-18-21	
70	13P070	E3	1'×3'	70-150	
71	13P071	F3	1'×3'	70-150	
72	13P072	F3	1'×3'	72-90	
73	13P073	G3	1'×3'	74-73-61	
74	13P074	G3	1'×3'	74-73-61	
75	13P075	G3	1'×3'	+	
76	13P076	G5	+	106-76	
77	13P077	G4	1'×3'	77-78	
78	13P078	G4	1'×3'	77-78	
79	13P079	F2	1'×3'	74	
80	13P080	G3	1'×3'	50-60	
81	13P081	G3	1'×3'	50-60	
82	13P082	G3	1'×3'	50-60	
83	13P083	G3	1'×3'	50-60	
84	13P084	G3	1'×3'	50-60	
85	13P085	G3	1'×3'	50-60	
86	13P086	G3	1'×3'	50-60	
87	13P087	G3	1'×3'	50-60	
88	13P088	H4	1'×3'	+	
89	13P089	H4	1'×3'	60-60	
90	13P090	H4	1'×3'	60-60	
91	13P091	H4	1'×3'	60-60	
92	13P092	H5	1'×3'	60-60	
93	13P093	H5	1'×3'	60-60	
94	13P094	H5	1'×3'	60-60	
95	13P095	H5	1'×3'	60-60	
96	13P096	H5	1'×3'	60-60	
97	13P097	H5	1'×3'	60-60	
98	13P098	H5	1'×3'	60-60	
99	13P099	H4	1'×3'	60-60	
100	13P100	H3	1'×3'	60-60-100-93	
101	13P101	G3	1'×3'	60-60-100	
102	13P102	G3	1'×3'	60-60-100	
103	13P103	G3	1'×3'	60-60-100-29-34	
104	13P104	G3	1'×3'	60-60-100-101	
105	13P105	F4	1'×3'	100-104	
106	13P106	H4	1'×3'	100-104	
107	13P107	G3	1'×3'	100-107	
108	13P108	G3	1'×3'	100-107	
109	13P109	G3	1'×3'	100-107	
110	13P110	G4	1'×3'	100-107	
111	13P111	G4	1'×3'	100-107	
112	13P112	G4	1'×3'	100-107	
113	13P113	G4	1'×3'	100-107	
114	13P114	G4	1'×3'	100-107	
115	13P115	G4	1'×3'	100-107	
116	13P116	G4	1'×3'	100-107	
117	13P117	G4	1'×3'	100-107	
118	13P118	G4	1'×3'	100-107	
119	13P119	G4	1'×3'	100-107	
120	13P120	G5	1'×3'	100-107	
121	13P121	F2	1'×3'	121-141-50	
122	13P122	G3	1'×3'	122-120	
123	13P123	G4	1'×3'	110-123	
124	13P124	G4	1'×3'	100-124	
125	13P125	G4	1'×3'	100-125	
126	13P126	G3	1'×3'	100-126	
127	13P127	G5	1'×3'	127-120-40-43	
128	13P128	E3	1'×3'	128-118-108	
129	13P129	E3	1'×3'	129-118-108	
130	13P130	F2	1'×3'	129-118-108	
131	13P131	F2	1'×3'	129-118-108	
132	13P132	H3	1'×3'	130-120-40	
133	13P133	H3	1'×3'	130-120-40	
134	13P134	F2	1'×3'	134-20-22	
135	13P135	S4	1'×3'	130-120-40-91	
136	13P136	E4	1'×3'	130-120-40-94	
137	13P137	E3	1'×3'	131-130-40-94	
138	13P138	G3	1'×3'	130-131-110	
139	13P139	E4	1'×3'	130-140	
140	13P140	C6	1'×3'	130-140	
141	13P141	H3	1'×3'	140-144	
142	13P142	H5	1'×3'	140-144	
143	13P143	H5	1'×3'	140-144	
144	13P144	H6	1'×3'	170-177-190-144	
145	13P145	H6	1'×3'	170-177-190-145	
146	13P146	H6	1'×3'	170-177-190-145	
147	13P147	H6	1'×3'	170-177-190-144	
148	13P148	H6	1'×3'	170-177-190-144	
149	13P149	H6	1'×3'	170-177-190-144	
150	13P150	H6	1'×3'	170-177-190-144	
151	13P151	GR	1'×3'	—	
152	13P152	FS	1'×3'	—	
153	13P153	PS	1'×3'	—	
154	13P154	DO	1'×3'	—	
155	13P155	DO	1'×3'	—	
156	13P156	DO	1'×3'	—	
157	13P157	DO	1'×3'	—	
158	13P158	DO	1'×3'	—	
159	13P159	DO	1'×3'	—	
160	13P160	DO	1'×3'	—	
161	13P161	DO	1'×3'	—	
162	13P162	DO	1'×3'	—	
163	13P163	DO	1'×3'	—	
164	13P164	DO	1'×3'	—	
165	13P165	DO	1'×3'	—	
166	13P166	DO	1'×3'	—	
167	13P167	DO	1'×3'	—	
168	13P168	DO	1'×3'	—	
169	13P169	DO	1'×3'	—	
170	13P170	DO	1'×3'	—	
171	13P171	DO	1'×3'	—	
172	13P172	DO	1'×3'	—	
173	13P173	DO	1'×3'	—	
174	13P174	DO	1'×3'	—	
175	13P175	DO	1'×3'	—	
176	13P176	DO	1'×3'	—	
177	13P177	DO	1'×3'	—	
178	13P178	DO	1'×3'	—	
179	13P179	DO	1'×3'	—	
180	13P180	DO	1'×3'	—	
181	13P181	DO	1'×3'	—	
182	13P182	DO	1'×3'	—	
183	13P183	DO	1'×3'	—	
184	13P184	DO	1'×3'	—	
185	13P185	DO	1'×3'	—	
186	13P186	DO	1'×3'	—	
187	13P187	DO	1'×3'	—	
188	13P188	DO	1'×3'	—	
189	13P189	DO	1'×3'	—	
190	13P190	DO	1'×3'	—	
191	13P191	DO	1'×3'	—	
192	13P192	DO	1'×3'	—	
193	13P193	DO	1'×3'	—	
194	13P194	DO	1'×3'	—	
195	13P195	DO	1'×3'	—	
196	13P196	DO	1'×3'	—	
197	13P197	DO	1'×3'	—	
198	13P198	DO	1'×3'	—	
199	13P199	DO	1'×3'	—	
200	13P200	DO	1'×3'	—	
201	13P201	DO	1'×3'	—	
202	13P202	DO	1'×3'	—	
203	13P203	DO	1'×3'	—	
204	13P204	DO	1'×3'	—	
205	13P205	DO	1'×3'	—	
206	13P206	DO	1'×3'	—	
207	13P207	DO	1'×3'	—	
208	13P208	DO	1'×3'	—	
209	13P209	DO	1'×3'	—	
210	13P210	DO	1'×3'	—	
211	13P211	DO	1'×3'	—	
212	13P212	DO	1'×3'	—	
213	13P213	DO	1'×3'	—	
214	13P214	DO	1'×3'	—	
215	13P215	DO	1'×3'	—	
216	13P216	DO	1'×3'	—	
217	13P217	DO	1'×3'	—	
218	13P218	DO	1'×3'	—	
219	13P219	DO	1'×3'	—	
220	13P220	DO	1'×3'	—	
221	13P221	DO	1'×3'	—	
222	13P222	DO	1'×3'	—	
223	13P223	DO	1'×3'	—	
224	13P224	DO	1'×3'	—	

Tab.1 遺構一覧表



Fig.3 遺構全体実測図 (1/100)

III. 調査成果

(1) はじめに (Fig.4)

当遺跡は筑後市大字水田字53、54の2筆に所在する。岡邦彦氏の専用住宅建設に伴い、筑後市教育委員会が実施した発掘調査で、今回は敷地面積445.19m²の内、掘削・削平の及ぶ建物建設予定面積約2,000m²を調査対象範囲とした。発掘調査は、排土置場に限られる状況から反転調査を行うこととなり、平成15年5月6日～同年6月30日の間実施した。この間、考古学的手法による表土除去及び埋め戻し（有限会社徳光建設に委託）、構造検出、掘削、実測、写真撮影などの作業を行った。調査の結果、柱穴・井戸・溝・土坑・ピット等の遺構が確認され、須恵器・土師器・陶磁器・瓦・石製品など多くの遺物を得ることができた。発掘調査は小林勇作が担当したが、調査期間や費用の関係から当市文化財専門員である永見秀樹、上村英士、立石真二らの協力を得た。遺物整理及び報告書作成に至る諸作業は小林勇作が担当し、平成16年度に文化財整理室にて行った。以下、主要な遺構及び遺物について報告する。



(2) 基本土層 (Fig.6)

調査前は既に宅地となっており、表面上の礫混じりの土砂を除去すると約0.35m程の土層が厚く堆積する。この堆積土層直下に黄色粘質土及び明灰茶色土による整地層が薄く認められており、この整地層を除去すると地山である黄灰色粘土が確認される。今回報告する遺構はこの地山面ないしは整地層上面で検出されたものであり、この状況から確認された整地層は後述する各遺構を形成する際に施された地業であることが想定される。

(3) 検出遺構

掘立柱建物

1SB160 (=1SP006・008・018・019・114・119) (Fig.5, Pla.2)

南部E2地区で確認した東西2間(1.98~2.08m)×南北2間(2.08~2.10m)の掘立柱建物である。検出した柱穴は図に示したa~hであり、調査時に使用した遺構番号はa=1SP018、b=1SP019、c=1SP066、d=1SP006、e=1SP007、f=1SP119、g=1SP008、h=1SP114となる。このうちd~hは重複する東西溝の1SD050を切っている。建物面積は4.263m²(≒1.29坪)を復原し、南北軸はN=7°35'40"→Wの方針を示す。各柱穴間の長さはa-b間1.00m、b-c間1.08m、c-d間1.00m、d-e間1.10m、e-f間1.04m、f-g間0.94m、g-h間1.14m、h-a間0.94m、深さは0.16~0.58mを測る。柱穴a及びfの底部からは礎盤と考えられる石礫が埋置されており、更にb及びcについては柱が残存した状態で確認され、柱径は13~14cm程度を測る。また、検出された柱穴のうちa・c・f・gで新たな柱穴痕も確認されており、幾度かの建替えがあったものと推測される。

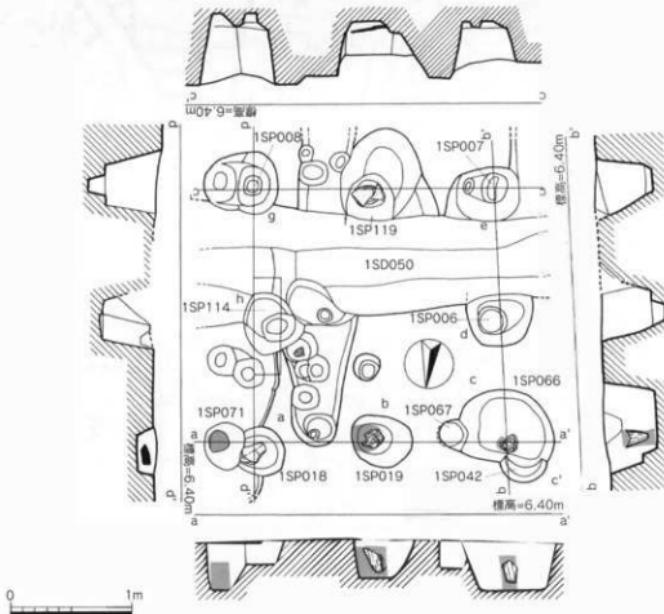


Fig.5 1SB160実測図 (1/40)

溝

1SD001 (Fig.6, Pla.2)

調査区南部のH2地区に位置し、検出長5.00m程度、幅0.90~1.15m、深さ0.20mを測る。溝の方位はN-18° 26' 58" -Wを示し、南部は南東方へ向かって調査区外へと展開する。遺構の先後関係については古い順に1SD040・050、1SP002→1SD001であり、埋土は3層の粘質土が堆積する。各層より散在的に中世の土師器、陶磁器の遺物が認められている。溝の断面形は幅広の逆台形状を呈し、底面はほぼ安定したフラットな面を残す。

1SD040 (Fig.6, Pla.3・4・8)

調査区西部に位置する南北溝で検出長14.7m、幅0.80~1.63mを測る。ほぼ直線的に延びる溝で方位はN-8° 36' 56" -Wを示す。遺構の先後関係については古い順に1SD060→1SD040→1SD091→1SK028→1SD001となり、更に溝底からはピット（1SP097-099・132・133・138）、溝状遺構（1SD139・170）、不明遺構（1SX150）が認められている。溝の断面形はほぼU字状を呈し、溝底レベルは南部から北部にかけて約0.38m下がる。堆積土はレンズ状に堆積し、多くの砂や粘土、礫等が包含する。また、粘質土系埋土であることから下層付近では堆積土がかなり締まった状態で確認され、部分的に硬化が見受けられる。各層から散在的に中世の土師器、陶磁器、銅錢が出土している。

1SD050 (Fig.6, Pla.4・5)

当溝は調査区南部に位置する。平面プランはF字状を呈し、北部の先端部は1SK010、南部の東西溝は1SB160に切られる。更に東西溝は後述する1SD060とはほぼ平行に走り、東部は調査区外へと展開する。幅は北部東西溝で0.48~1.18m、南部東西溝で0.65~1.12mを測り、溝底レベルについては東方から西方へ、北方から南方へと下がる。方位は南部東西溝でN-77° 55' 47" -Eを示し、溝の断面形はほぼU字状を呈する。埋土について全般的に粘質土または粘土が流れ込むようにレンズ状に堆積しており、中位層では小石や礫が多く含まれていた。中世の土師器、陶磁器が出土している。

1SD060 (Fig.6, Pla.6)

調査区中央部を四方に巡る溝であるが、当溝は所々で現代の建物基礎の擾乱を受けており、また調査区設定の都合により東部は北半部のみの検出となった。遺構の切り合いは古い順に1SD192→1SD060→1SD040、1SK015・030・215の先後関係にある。幅1.85m前後を測り、断面形は緩やかなU字状を呈する。方位は東西溝でN-79° 9' 35" -E、南北溝でN-10° 50' 25" -Wを示し（何れも復原値）、先述した1SD050とほぼ同位にあることが理解できる。溝内に堆積する埋土について、原則的には粘質土または粘土を含む堆積層が流れ込んでいたが、1SD040と切り合う手前にあたる西部は溝内に小石や礫が敷き詰められた状態で確認された。整地層のように版築された緻密な状態ではないが、人為的に溝を埋め戻した可能性が考えられ、1SD040を施工する段階で不要となつた当溝を埋没させたことが想定される。

1SD091・120 (Fig.6, Pla.7・8)

当溝は調査区西端部で確認した南北溝で、途中、現代の建物基礎の擾乱を受けて分断されている。従って、遺構番号は便宜上この擾乱より南半部を1SD091、北半部を1SD120としている。何れも調査区上の設定から西部部分を確認することができておらず、規模については詳細不明である。南半部の1SD091は1SK028に切られる。埋土については粘質土または粘土が堆積し、若干の小石や礫が包含する。また、1SD040と同様に粘質土系埋土であり、下層付近では堆積土がかなり締まった状態を呈し、部分的に硬化が看取される。

井戸

1SE100 (Fig.7, Pla.8・9)

調査区北東部のE6地区に位置する。平面プランは不整円形状を呈し、径は1.26~1.37m、深さは1.56mを測り、坑内の最低標高は4.48mである。井戸枠の存在はなく、素堀りの状態で使用されていたものと思われる。なお、地山は上位から淡黄灰色粘質土・淡乳灰色粘質土（5~10cm大の礫を多く混入する）・暗灰色粘性砂（5~10cm大の礫を多く混入する）を呈することから周囲から水が集まりやすい環境にあつたことが窺える。堆積土に多くの炭化物や植物が包含しており、各層から散在的に中世遺物の土師器が

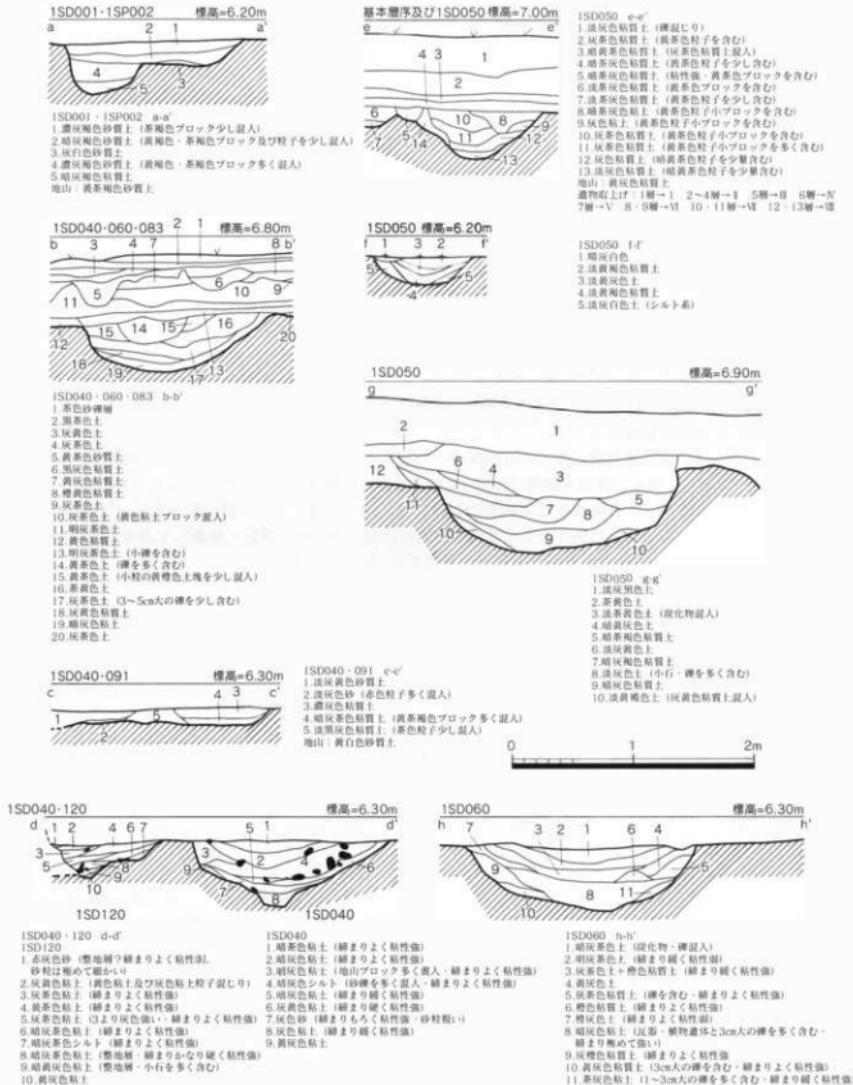


Fig.6 溝 (1SD001・040・050・060・091・120) 土層断面実測図 (1/40)

出土している。

1SE110 (Fig.7、Pla.9)

調査区中央部のG4地区に位置する。遺構の東部は1SK65に切られ、西半部は現代の建物基礎による擾乱を受けている。平面プランは不整円形状を呈するものと思われ、径は1.75m前後を測る。井戸の上位はすり鉢状を呈し、深さ0.45m以下では円筒状に掘削されている。なお、坑内については狭小であったため約1m分しか掘り下げを行っておらず、井戸枠の存在については不明である。また、すり鉢状から円筒状へと移行する境界付近では投棄された多くの川原石が認められたが、人為的に組まれている状況ではなく、素堀りであった可能性が高い。地山は、先述した1SE100と同様に上位から黄茶褐色砂質土・黄

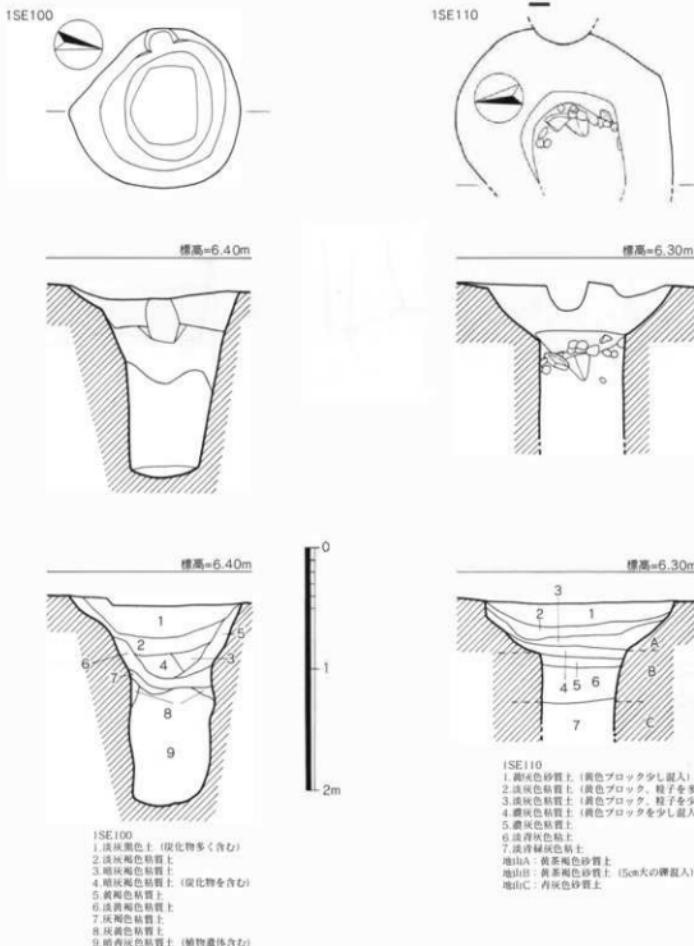


Fig.7 井戸 (1SE100・110) 実測図 (1/40)

茶褐色砂質土（5cm大の礫を多く混入する）・青灰色砂質土の砂層が発達しており、周囲からは水が集まりやすい環境にあったことが窺える。

1SE140 (Fig.8, Pla.10)

調査区北東部のC6地区に位置する。上位は1SK211が覆っており、当遺構は下位にあたる断面形が円筒状を呈する部分が該当する。平面プランはほぼ円形状を呈し、径は0.73~0.95m、深さは約1.6m、坑内の最低レベルは標高4.4mである。井戸枠は確認されておらず、素堀りの状態で使用されていたものと思われる。なお、井戸を形成する地山は上位から淡黄灰色粘質土・淡乳灰色粘質土（5~10cm大の礫を多く混入する）・暗灰色粘性砂（5~10cm大の礫を多く混入する）を呈し、周囲からは水が集まりやすい環境にあったことが窺える。各層から散在的に土師器や自然木片、杭木などが出土している。

土坑

1SK010 (Fig.9, Pla.11・12)

調査区の中央部F3地区に位置し、先述した1SD050を切る。平面プランは隅丸方形状を呈し、長軸1.13m、短軸0.98m、深さ0.38mを測る。遺構検出面からはひき臼、坑内底部には陶器（皿・すり鉢）が埋置された状態で出土した。なお、埋土は流れ込みによるもので人為的作用はなかったものと判断される。

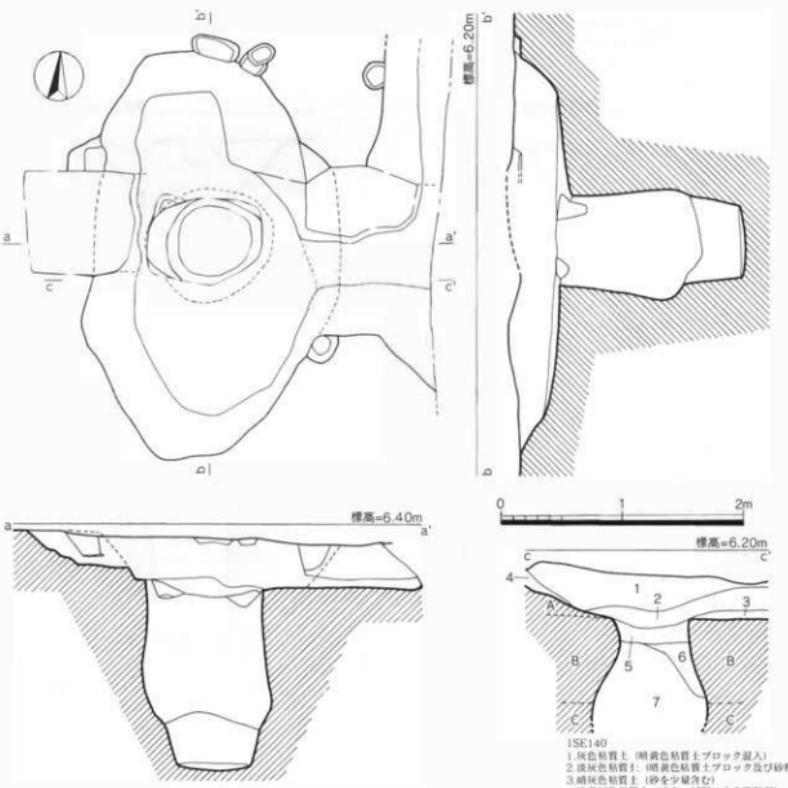


Fig.8 井戸 (1SE140) 実測図 (1/40)

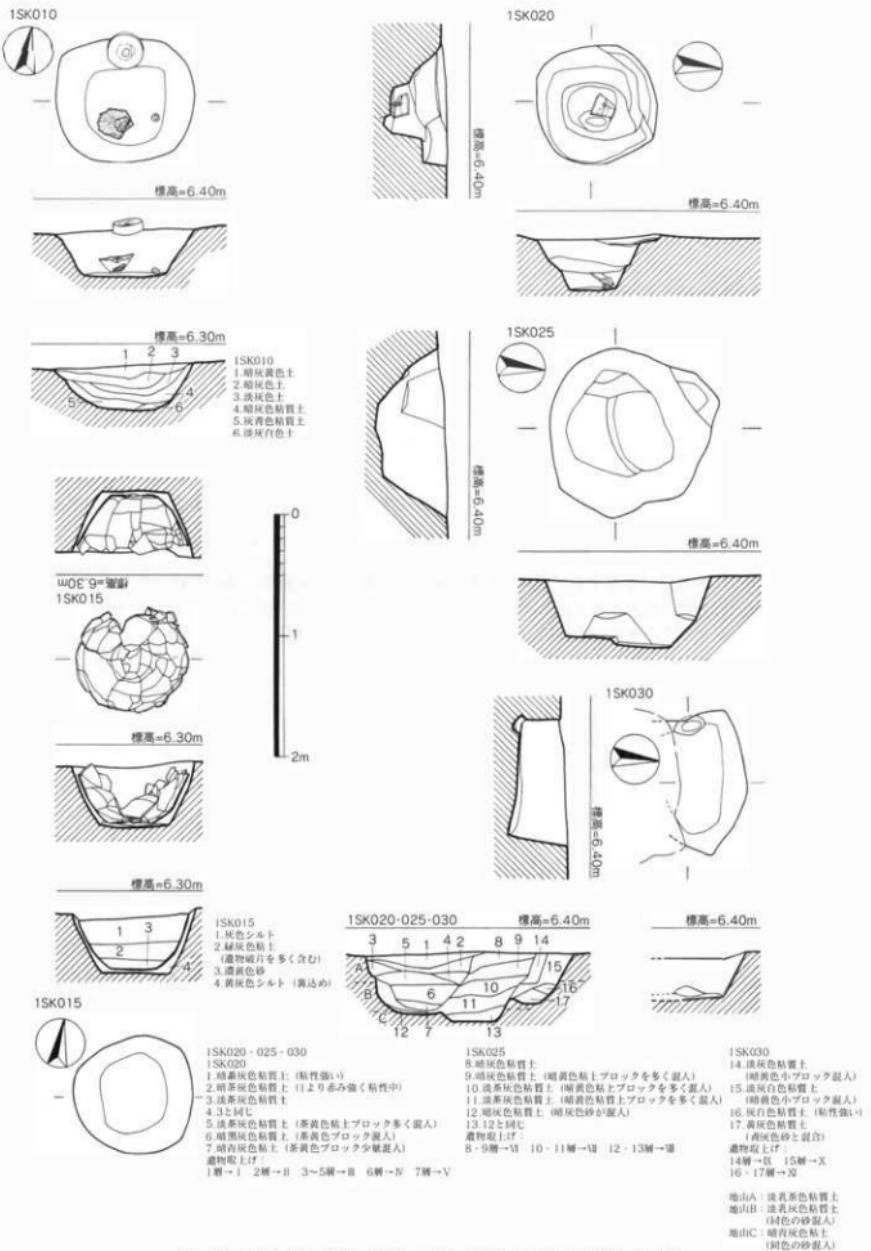


Fig.9 土坑 (1SK010・015・020・025・030) 実測図 (1/40)

1SK015 (Fig.9、Pla.13・14)

調査区中央部F4地区に位置する。遺構検出時から陶器甕が埋置された状態で確認されており、上半部は既に削平を受けていた。遺構堀方は甕が程良く納まるサイズに掘削されており、裏込めは僅かな隙間しか存在しない。堀方の平面プランはほぼ円形状を呈し、径は1m前後を計測する。甕内面には不純物（石灰か？）が付着しており、トイレとして設置された埋甕である可能性が考えられる。

1SK020 (Fig.9、Pla.15・17)

調査区中央部F4地区に位置し、当遺構の切り合は1SK103→1SK025・134→1SK020の先後関係にある。平面プランはほぼ円形状、遺構断面形はすり鉢状を呈し、径は1m前後、遺構検出面からの深さは0.46mを測る。坑内底部には径3cm程度の小杭が打ち込まれており、その上部には廃棄された瓦片が埋置されていた。また、土層断面では流れ込みによる堆積土を確認することはなく、遺構廃絶後短期間の間で人为的に埋め戻された可能性が高い。当遺構は先述した1SK015と同等規模であることからトイレ用に埋甕された痕跡と捉えられ、1SK015の前身であったことが想定される。

1SK025 (Fig.9、Pla.16・17)

先述した1SK020に隣接した土坑で調査区中央部F4地区に位置する。当遺構の切り合は1SK030・103→1SK025→1SK020の先後関係にあり、一連のトイレ遺構であったことが想定される。平面プランはほぼ不整梢円形状を呈し、坑内の北部及び西部にテラスが認められる。径は1.28～1.48m、遺構検出面からの深さは0.58mを測る。坑内底部の北側は更に一段深くなった平坦面が存在することからこの場所に埋甕が設置されていたものと思われる。堆積土はほぼ平坦に埋没していることから遺構廃絶後は人为的に埋め戻されたことが推測される。

1SK030 (Fig.9、Pla.16・17)

調査区中央部F4地区に位置する。遺構の配置状況から一連のトイレ遺構と想定され、切り合から最初に掘削された遺構と捉えられる。北半部のみの検出であり、幅1.1m前後を測る。遺構検出面からの深さは0.41mを測り、坑内底部の西側に小ビットを確認する。底部はフラットで流れ込みによる堆積土は認められない。やはり人为的に埋め戻された可能性が高い。

1SK070 (Fig.10、Pla.17・18)

調査区北東部E6地区に位置し、北部は1SK150に切られる。平面プランは不整円形状を呈するものと思われ、径は1.1m前後、深さは0.46mを測る。坑内の底部はほぼフラットであり、付近からは瓦や木製建築部材が認められている。

1SK188 (Fig.10)

調査区北西部F6地区に位置する。平面プランは隅丸長方形形状を呈し、長軸2.27m、短軸1.48m、深さ0.13mを測る。底面はフラットであるが、底部北西部と南東部より小ビットが認められた。このうち北西部にある2穴中央部から柱痕が確認されたことにより杭が穿たれていたことが判明したが、使用用途については不明である。

1SK202・215 (Fig.10)

調査区北部G6地区に位置する。今回、埋甕部分を1SK202、その周囲を1SK215として扱ったが1SK215は1SK202の堀方である可能性もある。1SK202は径0.50～0.62m、深さ0.22mを測り、底部に埋甕を認める。埋甕内面には不純物（石灰か？）が付着しており、トイレとして設置された埋甕である可能性が考えられる。一方の1SK215は不整円形状を呈し、径は約0.9mを測る。

不明遺構

1SX150 (Fig.10、Pla.18)

調査区北東部D7地区で確認し、遺構北部は調査区外へと展開するため全体プランが判然としない土坑である。当遺構の先後関係については古い順に1SK070→1SK150→1SK162・163・194・195、1SD193となる。幅は4.8m、深さ0.73mを測り、底面はほぼ平坦面を呈する。遺物は中世の土師器、陶磁器は出土している。

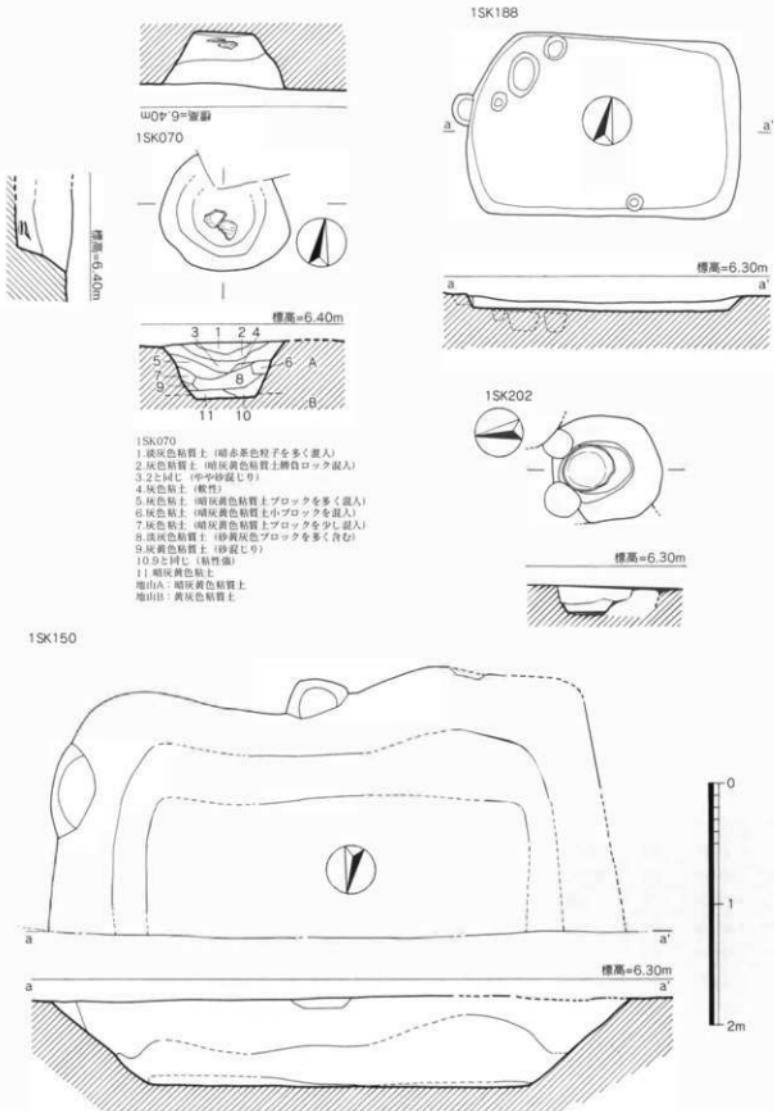


Fig.10 土坑 (1SK070・188・202・215)、不明遺構 (1SK150) 実測図 (1/40)

ピット（柱穴）群（Fig.3、Pla.19～24）

今回検出したピットのうち、柱痕・礎石・柱が認められた柱穴と思われる遺構について抽出し、下記のTab.2に表記する。

単位：cm

No.	遺構番号	地区番号	平面プラン	長さ（径）	幅	深さ	備考
1	ISP005	F3	楕円形	52	40	41	17cm大の川原石出土（柱支えとして使用か？）
2	ISP022	F4	楕円形	65	60	46	径約20cmの柱出土
3	ISP036	H4	隅丸長方形	48	37	37	径16cmの柱痕確認
4	ISP037	H4	円形	33	—	36	径12cmの柱痕確認
5	ISP046	H3	楕円形	51	42	53	径24cmの柱痕確認・柱痕周辺に集石（柱支えか？）
6	ISP051	G5	不整椭円形	79	65	45	径22cmの柱痕確認
7	ISP061	G5	楕円形	57	53	43	径20cmの柱痕確認
8	ISP062	G3	不整椭円形	72	56	34	径15cmの柱痕確認
9	ISP063	G3	楕円形	56	40	29	径16cmの柱痕確認
10	ISP064	F3	円形	42	—	54	柱痕周辺に川原石出土（柱支えとして使用か？）
11	ISP068	E3	不整椭円形	85	65	44	径13～18cmの柱痕を3ヶ所で確認
12	ISP080	G3	円形	33	—	34	柱痕周辺に川原石出土（柱支えとして使用か？）
13	ISP085	H5	楕円形	28	—	38	径18cmの柱痕確認
14	ISP097	I5	隅丸方形	42	46	32	径9cmの柱痕確認
15	ISP098	I6	楕円形	37	—	22	径13cmの柱痕確認
16	ISP109	G5	円形	30	—	58	ISP108の柱痕か？
17	ISP111	G5	円形	22	—	53	ISP108の柱痕か？
18	ISP130	F7	隅丸長方形	60	39	28	径18cmの柱痕確認・検出面からひき引出土
19	ISP133	H3	楕円形	59	47	33	径17cmの柱出土
20	ISP146	H6	隅丸方形	42	42	52	径24cmの柱痕確認
21	ISP149	G6	楕円形	32	27	30	径13cmの柱痕確認
22	ISP151	G6	円形	24	—	39	柱出土
23	ISP152	F5	楕円形	42	33	43	径19cmの柱痕確認
24	ISP169	H5	隅丸方形	35	40	37	径10cmの柱痕確認
25	ISP177	H5	隅丸方形	37	32	43	径9cmの柱痕確認
26	ISP185	G6	楕円形	39	35	28	径15cmの柱痕確認
27	ISP186	G5	楕円形	58	55	43	径18cmの柱痕確認
28	ISP189	F6	隅丸方形	45	33	45	径14cmの柱痕確認
29	ISP195	E7	円形	30	—	16	径19cmの柱出土
30	ISP214	G6	円形	27	—	19	径16cmの柱痕確認
31	ISP216	G6	円形	35	—	31	径14cmの柱痕確認
32	ISP222	E6	円形	25	—	9	径14cmの柱痕確認
33	ISP223	H6	円形	32	—	17	径16cmの柱痕確認

Tab.2 ピット（柱穴）法量等一覧表

(3) 出土遺物

掘立柱建物

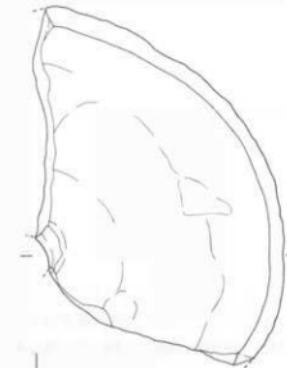
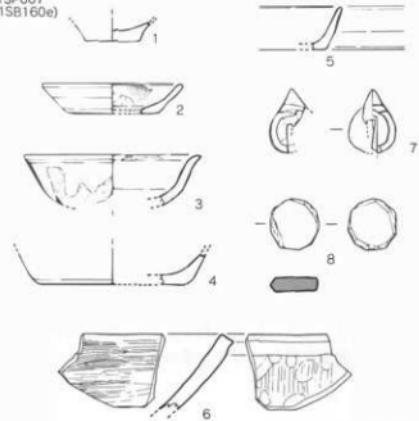
1SP007 (=1SB160e) (Fig.11, Pla.24)

土師器

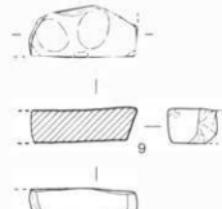
豆皿 (1) 底部細片で底径3.4cmを測る。外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。

小皿 (2) 口径8.6cm、底径5.6cm、器高1.9cmを復原する。外底は糸切り、見込みはナデ、内外面はヨコ

1SP007
(1SB160e)



1SP018
(1SB160a)



1SP119
(1SB160f)



11

1SP042
(1SB160c')

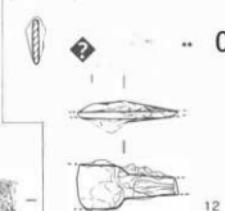


Fig.11 1SB160 (1SP007 · 018 · 042 · 119) 出土遺物実測図 (1/3)

ナデ調整を施す。内面に油煙痕が残る。

坏（3～5） 3は口縁部破片で口径11.0cmを復原する。体部は丸味を帯び、口縁部にかけては如意形に外方へ開く。口縁端部に油煙痕が残る。4は底部細片で底径9.0cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整である。5は体部細片で内外面はヨコナデである。外底には板状圧痕を認める。

火鉢（6） 口縁部細片である。口縁端部はヨコナデ、内面は横方向の細かい刷毛目、外面は縦方向の荒い刷毛目、指頭圧痕を認める。

土鉢（7） 器高3.9cm、最大幅2.4cm、重さ4.5gを計測する。表面はナデ調整で紐通し部の穿孔及び、鉢の開口部は焼成前に施されている。

瓦質土器

面子（8） 瓦質製で二次加工品と思われる。土器破片の周囲を細かく打ち抜いて円形状に仕上げている。最大径3.0cm、器厚0.9cm、重さ9.0gを計測する。

1SP018 (=1SB160a) (Fig.11, Pla.24)

瓦

平瓦（9・10） 9は色調は淡茶白色を呈し、胎土に微砂粒、赤色粒子、金雲母を含む。凹面はナデ、凸面は工具ナデ、側面は面取りを施す。表面に塗し銀が付着する。10は土師質の淡乳茶色を呈し、胎土に微砂粒、赤色粒子、金雲母を含む。凹面は刷毛目後ナデ、側面はヘラにて面取りを施す。

1SP119 (=1SB160f) (Fig.11, Pla.24)

石製品

ひき臼（11） 安山岩製の上臼ですり面に6本単位のすり目を施す。最大径28.8cm、中心軸部径1.4cm、重さ2785gを計測し、表面全体に煤が付着することから二次焼成を受けたものと思われる。

1SP042 (=1SB160c') (Fig.11, Pla.24)

鉄製品

短刀（12） 柄部の破片で柄部には僅かに木片が残っている。現存長6.3cm、刃部幅3.0cm、柄部幅1.2cm、重さ21.1gを計測する。

溝

1SD001 (Fig.12・13, Pla.24～26)

土師器

土鍋（13・14） 13は口縁部細片で端部は玉縁状を呈する。内面及び口縁端部外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目で外面には煤が付着する。14は口径50.4cmを復原する。体部内面下位及び口縁端部はヨコナデ、体部内面上位はヨコナデ後刷毛目、体部外面上位は指押さえ後ヨコナデ、体部外面下位は横方向の刷毛目を施し、体部から底部にかけては僅かに屈曲が認められる。外面には煤が付着する。

火鉢（15） 口径30.4cm、底径25.2cm、器高8.0cmを復原する。底部から体部にかけては斜位方向に立ち上がり、口縁部は内側へ折り曲がる。底部はほぼ平坦面を呈し、外底には台形状の脚が4ヶ所貼り付けられていたものと思われる。口縁部に煤が付着する。

瓦質土器

鉢（16） 口縁部細片で一部が大きく外反することから片口になるものと思われる。片口部内外面はナデ？、体部内面はヨコナデ、体部外面は縦方向の刷毛目を施す。

磁器

猪口（17・18） 17は口径5.0cm、高台径2.6cm、器高3.1cmを復原する。淡灰白色の素地に乳白色の釉を高台部以外に施釉する。18は17よりも若干口縁部が外反する。口径4.8cm、高台径2.4cm、器高2.9cmを復原し、暗茶灰色の素地に暗灰白色釉を高台部以外に施す。外面は貫入が看取される。

皿（19） 体部から口縁部にかけては僅かに屈曲し、端部は外反する。形状から清瀬皿と思われる。素地は淡灰茶色を呈し、暗緑灰色釉を施す。

碗（20） 口径11.8cmを復原し、口縁端部は僅かに外反する。暗灰白色的素地に淡緑白色の釉が施され、内面には貫入が認められる。

白磁

碗 (21) 口径9.6cmを復原し、明灰白色の素地に明白色釉を施す。全体に貫入を認める。

青磁

碗 (22) やや丸味を帯びた碗で口径11.0cmを復原する。明灰白色の素地に淡緑白色釉を内外面に施釉し、底部と体部境界の内外面に1条、口縁部外面に2条の沈線が施される。

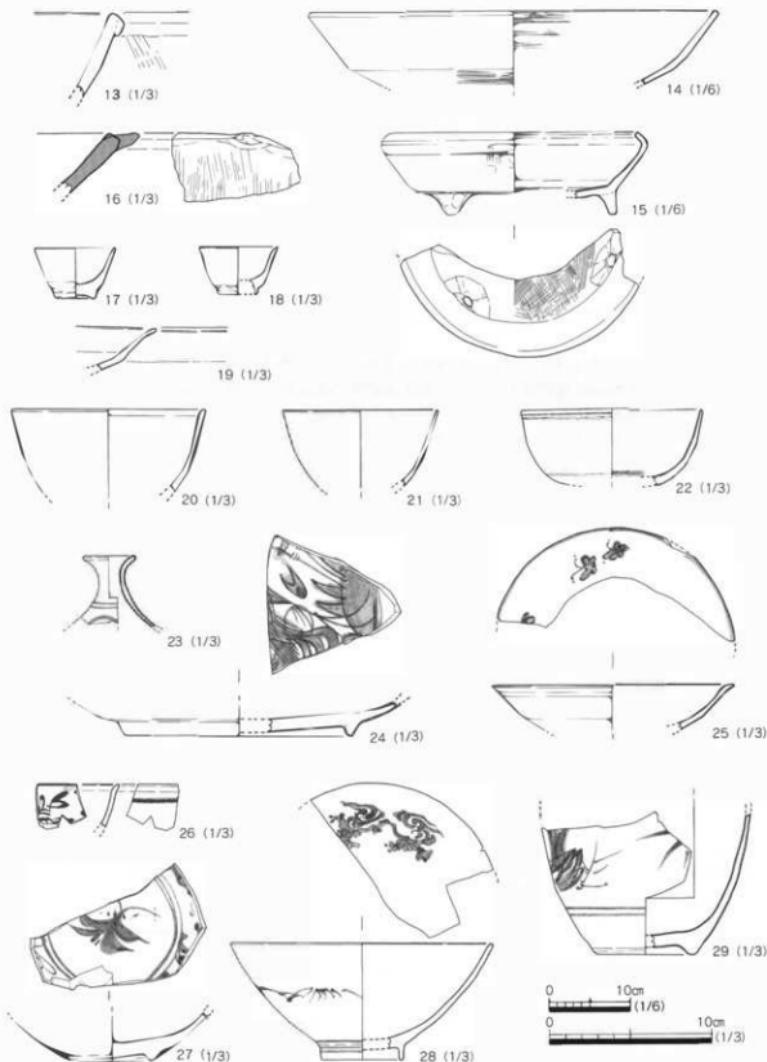


Fig.12 1SD001出土遺物実測図① (1/3 · 1/6)

染付

徳利×水注（23） 短頭で口縁部は大きく外反する。淡白色の素地に淡青白色釉を外面及び口縁部内面まで施釉する。内面は釉ダレが認められ外面には呉須で文様が描かれる。

皿（24・25） 24は廣東系染付皿と思われる。高台径14.0cmを復原する。明灰白色の素地に暗灰白色釉を施釉するが外底中心付近は露胎である。高台部には砂が付着し、見込みには呉須で文様（絵柄不明）が描かれる。25は口径15.0cmを復原する細片で、端部は外反する。素地は暗茶灰色を呈し、内外面に暗茶灰色釉を施す。呉須で内面に文様を描く。

碗（26～28） 26は口縁部細片で内外面に呉須で文様が描かれる。素地は淡灰白色を呈し、淡青白色釉を内外面にかける。27は底部細片で高台径5.0cmを復原する。暗灰白色的素地にくすんだ淡緑白色釉を内外面に施すが疊付は露胎である。内面体部に草文、見込みに花文が描かれる。28は口径16.0cm、高台径5.0cm、器高7.2cmを復原する。明白色の素地に淡青白色釉を全面に施し、高台疊付には砂が付着する。内外面に呉須で草花文が描かれる。

壺（29） 底部細片で底径6.0cmを復原する。底部はいわゆる碁笥底を呈し、疊付は露胎である。素地は淡茶白色、明青白色釉を内外面に施釉し、全体に貫入が認められる。

陶器

碗（30・31） 30は口径12.4cmを復原する。やや丸味を帯びた器形で口縁端部は外反する。淡茶白色的素地に淡白灰色釉を内外面に施す。胎土に白色・黒色粒子を多く含む。31は底部細片で唐津系陶器と思われる。高台径4.9cmを測り、見込みには4ヶ所の砂目痕が残る。素地・釉ともに淡茶白色を呈し、疊付は釉を搔き取る。

すり鉢（32・33） 32は底部細片で底径11.6cmを復原する。外底は糸切りで内面には10本単位のすり目を放射状に施す。素地は淡黄褐色を呈し、内外面は露胎であるが、一部で赤灰色釉が付着、外底には施釉する際に残る指頭痕が認められることから口縁部付近は施釉されていたものと思われる。また外底及び見込みには胎土目跡が残る。33は口縁部細片で口径32.0cmを復原する。口縁端部は内側にかえりのある鶴先状を呈し、内外面には濃黒赤色鉄釉を施す。口縁部下位で僅かにすり目が認められている。

壺（34） 高取焼系と思われ、口径11.3cm、最大胴部径18.0cmを復原する。胴部はやや扁平な球状を呈し、口縁端部は若干外方へ立ち上げる。淡黒灰色の素地に淡灰白色釉を内面と口縁部及び体部の外面に厚く施釉する。

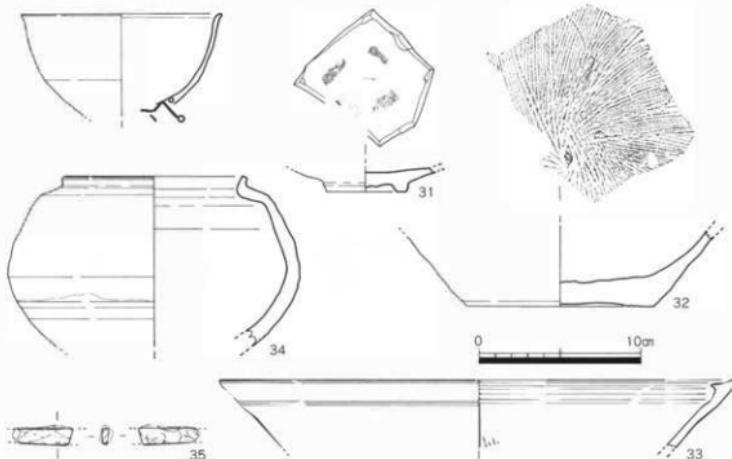


Fig. 13 ISD001出土遺物実測図② (1/3)

鉄製品

刀子（35） 現存長3.8cm、幅1.0cm、重さ6.1gを計測する。鋒彫れがひどく詳細は不明である。

1SD040 (Fig.14, Pla.26・27)

土師器

豆皿（36～38） 何れも外底は糸切りで口径5.6～6.7cm、底径4.0cm、器高1.4～1.65cmを復原する。36・38は口縁部付近に油煙痕が認められる。

小皿（39・40） 39は口径8.6cm、底径6.4cm、器高1.9cmを復原し、40は底径6.4cmを測る。ともに外底糸切りで内外面はヨコナデ調整である。

壺（41） 底部から斜方へ若干そり気味に立ち上がる。口径10.2cm、底径5.0cm、器高3.0cmを復原し、外底に板状圧痕が認められる。体部内外面はヨコナデである。

土鍋（42） 口縁部細片で端部は玉縁状を呈する。内面は細かい横方向の刷毛目、端部はヨコナデ、外面は粗い横方向の刷毛目を施す。外面に煤が付着する。

土鉢（49） 土鉢に使用されていた玉と思われ、径は0.8cm前後を測る。重さは2.2gを量る。

瓦質土器

すり鉢（43） 口縁部細片で内面にすり目が施されている。すり目単位は8本と思われ、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整である。

染付

皿（44） 口径13.7cm、底径5.0cm、器高3.1cmを復原し、明灰白色の素地に暗灰白色釉を全面に薄くかける。置付には砂が付着し、内面に呉須で文様が描かれる。

小椀（45） 猪口の可能性もある。高台径2.4cmを復原し、明白色の素地に淡青白色釉を施す。呉須で見込みに花文、高台内に「福」文字を描く。胎土は精選されている。

碗（46） やや丸味を帯びた碗で、底部は肥厚する。素地は淡灰白色を呈し、淡青灰色釉を内外面に施釉する。外面体部に淡い呉須で文様を描く。

陶器

碗（47） 底部細片で見込みに3ヶ所の目跡が認められる。目跡は配置状況から4ヶ所に施されていたものと思われる。高台径4.7cmを測り、暗赤褐色の素地にややくすんだ暗茶灰色釉を薄く施釉する。高台付近に二次焼成痕が認められる。

すり鉢（48） 口縁部細片で端部は勧先状を呈する。濃赤褐色の素地に淡灰茶色釉を口縁部内外面のみ施釉する。

石製品

石塔（50） 石材は凝灰岩製で器形から五輪塔の火輪になる可能性がある。現存の重さは540.0gである。

銅製品

銅鏡（51） 完形の寛永通寶で「寶」文字の貝が「ス」字状を呈することから古式タイプである可能性が考えられる。裏文字はなく重さは3.2gを量る。

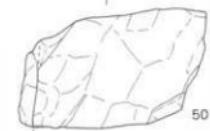
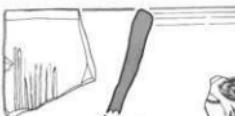
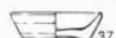
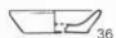
1SD050 (Fig.14, Pla.27・28)

土師器

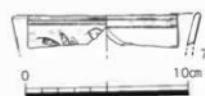
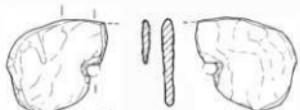
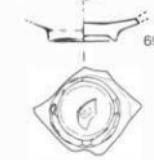
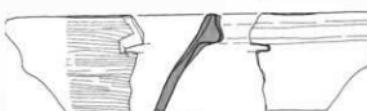
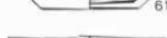
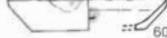
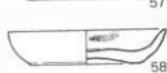
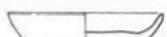
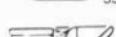
豆皿（52～54） 何れも外底は糸切りで口径6.2～6.4cm、底径3.0～4.3cm、器高1.25～1.9cmを復原する。52・54は外方へ反り気味に立ち上がるが、53はやや内湾する。52の口縁端部は焼成後打ち搔かれており、灯明皿として使用される際に芯置きとして施された可能性がある。

小皿（55～64） 口径8.6～11.0cm、底径5.5～7.2cm、器高1.8～2.8cmを測る。器形別では55・57・58・60・63・64がやや内湾気味に体部が立ち上がり、56・59・61・62では体部が外方へ若干開き気味に立ち上がる。また56・59・61では体部断面形が菱形状を呈し、口縁端部付近で更に外反させたものである。何れも外底糸切り、口縁部及び体部内外面はヨコナデ、見込みはナデの調整であり、58～60では口縁部付近に油煙痕を認めることから灯明皿の使用が考えられる。64は52と同様、焼成後に口縁端部が打ち搔かれており、灯明皿として使用される際に芯置きとして施された可能性が考えられる。

1SD040



1SD050



0 10cm

Fig.14 1SD040・050出土遺物実測図 (1/3)

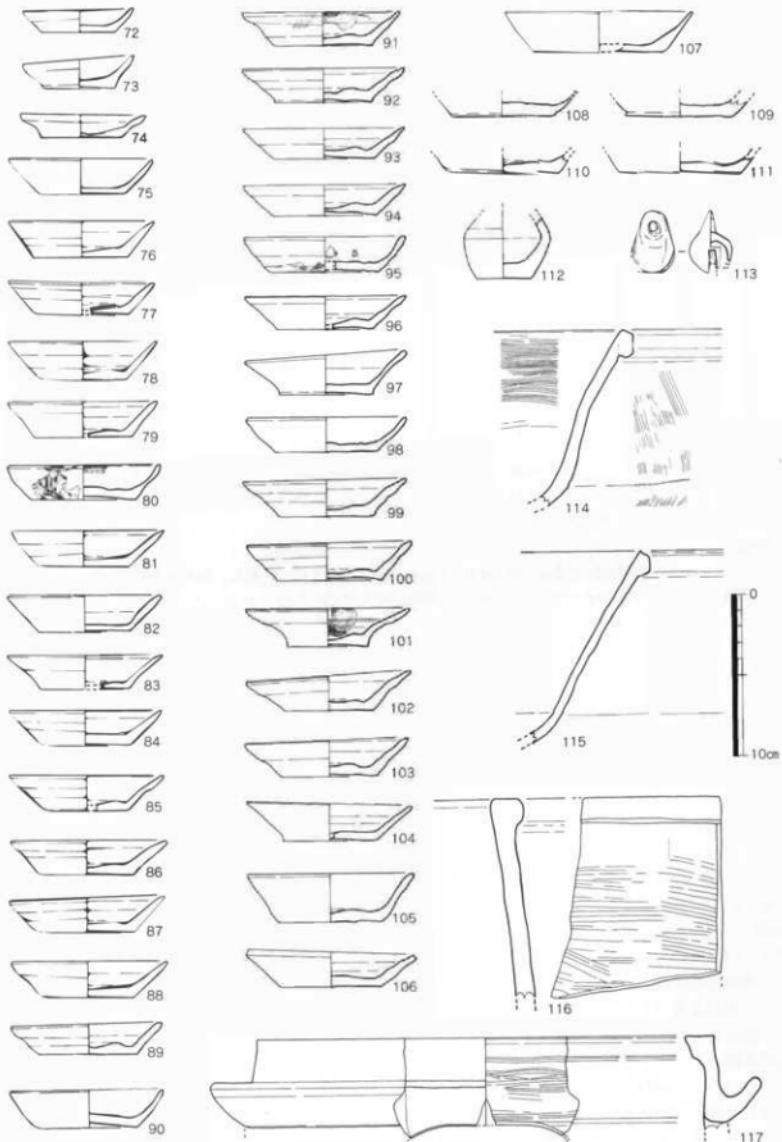


Fig.15 1SD060出土遺物実測図① (1/3)

すり鉢 (66) 焼成はやや還元焼成氣味である。口縁部細片で内面にすり目が施される。内面は横方向の刷毛目、口縁端部及び外面はヨコナデ後指押さえにて調整する。口径は30.0cmを復原する。

鉢 (67) 口縁端部が玉縁状を呈する片口鉢である。焼成は若干還元焼成で内面は刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデである。片口部分は焼成後穿孔が施されている。

火鉢 (68) 底部細片で底径14.0cmを復原する。体部外面は縦方向の刷毛目、内面はヨコナデ、外底は風化のため不明であるが、僅かに刷毛目が残る。

瓦質土器

釜 (65) 口縁部細片で端部はほぼ垂直に立ち上がる。肩部の一部が肥厚していることから把手が付着されていたものと想定される。

白磁

皿 (69) 底部細片で高台径4.2cmを測る。見込みに4ヶ所の胎土目が残り、疊付4ヶ所を弧状に抉り取る。

淡茶黄色の素地に淡茶白色釉を内外面に施釉するが高台部は露胎であり、細かい貫入が認められる。森田D群。

磁器

碗 (70) 象嵌された口縁部細片で象嵌部には白色土が埋め込まれている。素地は暗黒灰色を呈し、透明釉が内外面に薄く施される。国産品か?

石器

石包丁 (71) 石材は片岩製で表面は著しく風化しており、刃部は認められない。穿孔された痕跡が残り、内径0.8cm前後を測る。重さは37.8g。

1SD060 (Fig.15~18, Pla.28~33)

土師器

豆皿 (72~74) 口径6.7~7.7cm、底径4.5~5.0cm、器高1.4~1.8cmを測る。何れも外底は糸切りで外方へ反り気味に立ち上がるタイプであり、74は口縁端部付近で更に外反させるものである。

小皿 (75~111) 口径9.0~11.6cm、底径5.0~8.0cm、器高1.9~3.0cmを測る。器形別では底部から口縁部にかけての立ち上がりに特徴がみられ、75・80・90・95・98の5点はやや内湾気味に、82・97・104~107の6点は外方へやや開き気味に立ち上がる。更にこれ以外の双方にも該当しないタイプで、今回出土率の高い器形は底部から体部にかけて外方へ立ち上げ、口縁端部付近で更に外反させたものであり、体部と口縁部境界に段が生じるものである。76~79・81・83~89・91~94・96・99~103の22点が該当する。調整は主として口縁部及び体部内外面はヨコナデ、見込みはナデ、外底は糸切りである。また80・91・95・101では口縁部付近に油煙痕を認めており灯明皿の使用が考えられる。

小壺 (112) 底部破片でミニチュア土器と思われる。底径3.3cmを測り、外面はナデ内面はナデ及びヨコナデの調整である。

土鈴 (113) 胴部はほぼ球状を呈し、鈴内には鈴玉も認められる。紐通し部のつまみは貼り付けられており、内径0.5cm前後を測る。高さ3.8cm、胴部径2.6cm、重さ8.7gを計測する。

土鍋 (114・115) ともに口縁部は玉縁状を呈し、外面に煤が付着する。体部調整において114は内外面を細かい刷毛目で調整し、115はナデを施す。114は口縁部から底部にかけて緩やかなS字状を呈する。

平瓦 (116) 端部断面形は台形状を呈し、端部内外面はヨコナデ、凹面はナデ、凸面は粗い刷毛目を施す。表面は暗茶褐色、芯は生焼けで灰褐色を呈し、胎土は微砂粒・金雲母を多く含み、焼成は良好であり、いわゆる甕の製作法と類似する点が認められる。側面は表面からのヘラ切り込み後、工具にて面取りが施されている。甕製作技法を用いて瓦を製作した可能性が強い。

瓦質土器

甕? (117) 口縁部破片で口径28.2cmを復原する。口縁端部は平坦で内面に突出した口縁部を呈する。口縁部外面には庇が施され、下方へ展開する窓(開口部)が認められる。表面は淡黒灰色、芯は淡白茶色を呈し、庇には僅かながら煤が付着する。

蓋 (118) 口縁部は鉤状に屈曲し、天井部はほぼ平坦に仕上げられている。中央部に紐通し用のつまみ

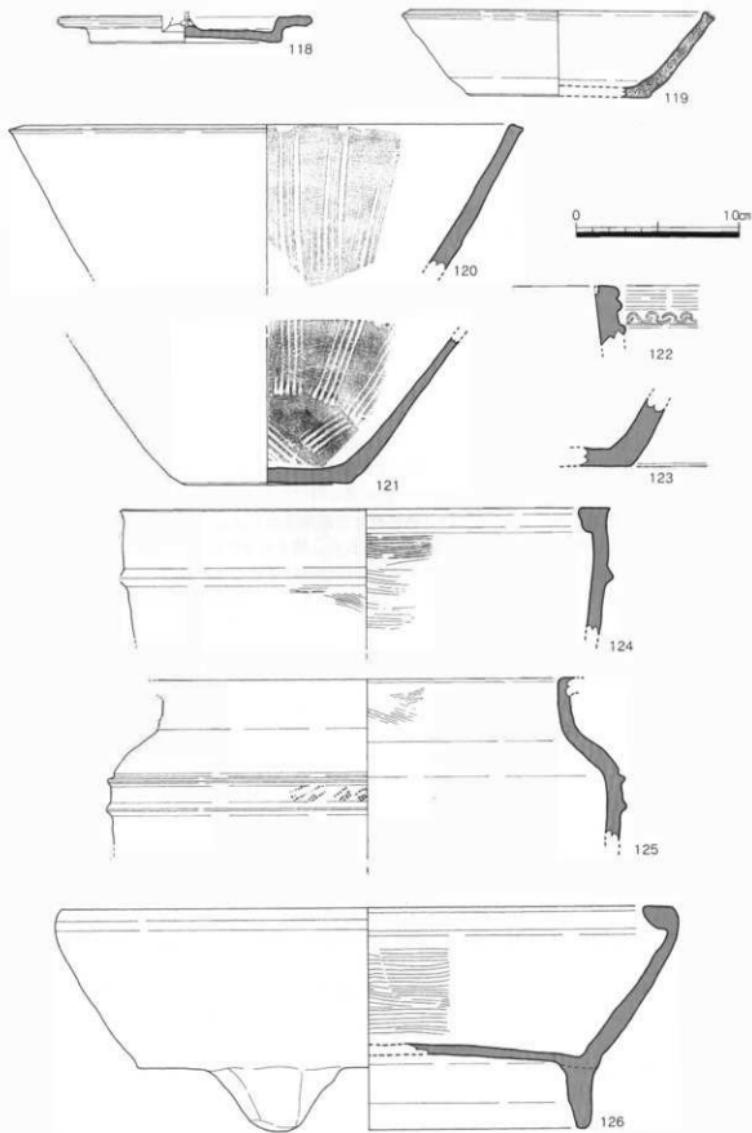


Fig.16 1SD060出土遺物実測図② (1/3)

が施され、最大径は15.6cm、下部の内口径は11.8cm、紐通し部内径は0.3cmを測る。暗黒灰色を呈し、内外面には煤が付着する。

鉢（119） 口径19.4cm、底径11.4cm、器高5.3cmを復原する。内面及び口縁部外面はヨコナデ、体部及び外底はナデで内外面には煤が付着する。

すり鉢（120・121） 120は口縁部細片で内面に刷毛目後5本単位のすり目を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデである。口径31.6cmを復原し、表面は淡黒灰色、芯は暗黒色を呈する。121は底部細片で淡灰茶色を呈する。底径10.4cmを測り、内面は刷毛目後5本単位のすり目を放射状に施す。体部外面及び外底はナデで、境界付近をヨコナデする。

火鉢（122～126） 122は口縁部細片で外面に貼付突帯及び爪文スタンプを押印する。123は底部細片で内面に炭化物が厚く付着する。124口縁部細片で口径30.0cmを復原する。口縁端部は平坦面で内面張り出しの口縁部を呈する。口縁部下位には1条の貼付突帯が施され、内面に煤が付着する。125は口縁端部を欠損した口縁部細片で器形は茶釜に類似する。口縁部内径は23.8cmを復原し、肩部に2条の貼付突帯、その間にはスタンプが押印される。126は口径37.4cm、底径28.4cm、器高13.65cmを測る。口縁部は内面へ突出し、底部には台形状の脚を貼り付け、3ヶ所に施されていたものと思われる。内面に炭化物、内外面には煤が付着する。

釜（127～131） 127は口縁部細片で口径11.4cmを復原する。肩部に把手が貼り付けられ、内径0.8cmの穿孔を施す。肩部上位には菊花文スタンプが押印される。128は口縁部細片で口径15.2cmを復原する。菊花文スタンプを2段に押印する。129は口径15.2cmを測る細片で肩部に把手が貼付される。焼成前に穿孔された内径は0.8cmを測り、肩部には菊花文のスタンプが施される。130は口径15.2cm、鋤部径25.0cm、胴部径22.0cmを復原する。胴部にはやや垂れ下がった鋤が貼り付けられており、これより下位は煤が厚く付着する。肩部には菊花文が押印される。131は胴部細片で鋤部径は31.8cm、胴部径は27.4cmを復原し、肩部には焼成前に穿孔した内径0.9cmの把手が貼り付けられる。鋤より下位には炭化物が厚く付着する。

竈？（132） 口縁部破片で口径32.0cmを復原する。口縁端部は平坦で内面に突出した口縁部を呈する。口縁部外面には庇が施され、表面は淡白茶色、芯は明茶褐色を呈る。内外面に煤が付着する。

磁器

碗（133・135） 133は口径9.6cm、高台径4.1cm、器高2.8cmを復原する。口縁部を欠損し、その断面は研磨されていることから砥石として使用された二次転用品である可能性が考えられる。見込み及び体部外面に細い線刻を施し、刷毛塗りされた白色文様が描かれる。淡灰色の素地に淡青灰色釉を高台以外に施す。唐津系か。135は高台径3.2cmを測る底部細片で淡茶白色の素地に淡茶黄色の透明釉が高台以外にかけられる。全体に貫入が認められる。

青磁

碗（134） 龍泉窯系青磁で底部細片で高台径5.0cmを測る。焼成不良であり、明赤茶色の素地に明燈茶色釉を施す。全体に細かな貫入が認められ、高台は露胎である。見込みには花文、体部外面には線刻が施されている。太宰府編年Ⅱc類。

染付

皿（136） 底部細片で高台部は蛇の目高台を呈する。高台径5.2cmを測り、淡青白色の素地に淡青白色釉を全面に施釉する。豊付は釉が搔き取られ僅かに砂が付着する。見込みに淡い呉須で草花文が描く。

陶器

甕（137） 底部細片で底径21.4cmを復原する。胎土に砂粒を多く含み内面には自然釉が被る。

石製品

ひき白（138） 石材は安山岩で上部を欠損する。小型のひき白と思われ、すり面は摩耗のため確認できない。底径は17.3cmを測る。

五輪塔（139） 石材は凝灰岩製で風化した側面が僅かに残る。器形から火輪の一部と考えられる。

鉄製品

鎌（140） 形状は現在の草刈り鎌と同様に弧状を呈し、柄部は留め具が溶接されている。重さは290.0g

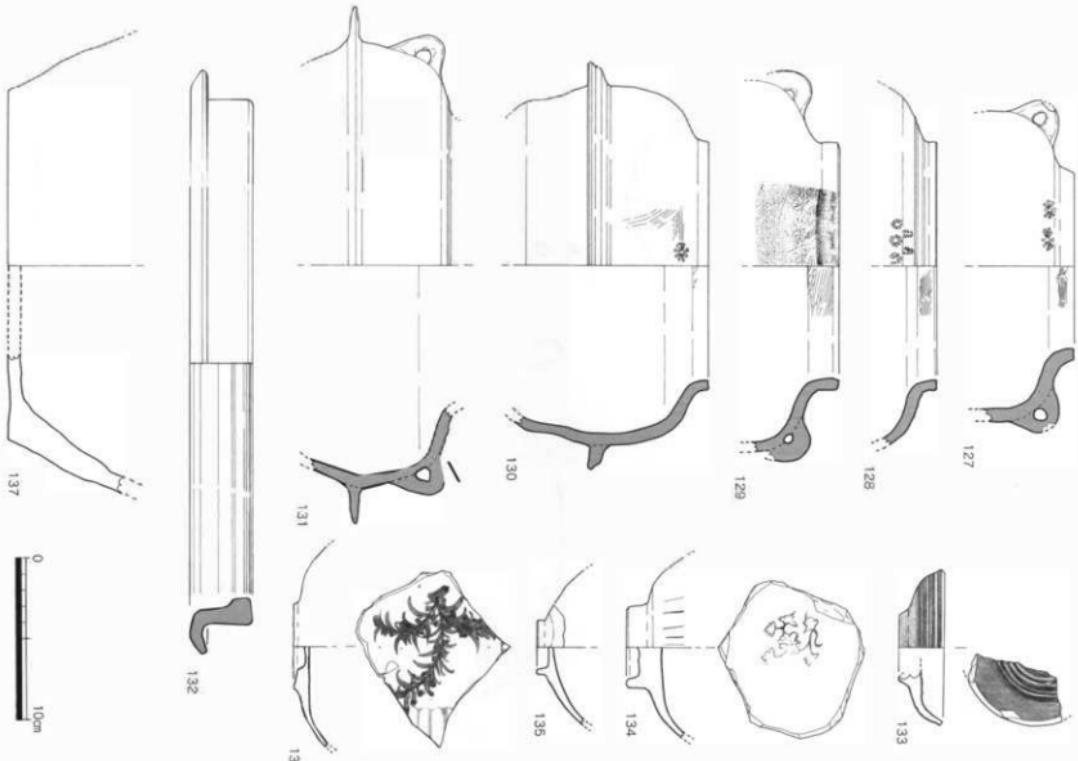


Fig. 17 ISD060出土遺物実測図③ (1/3)

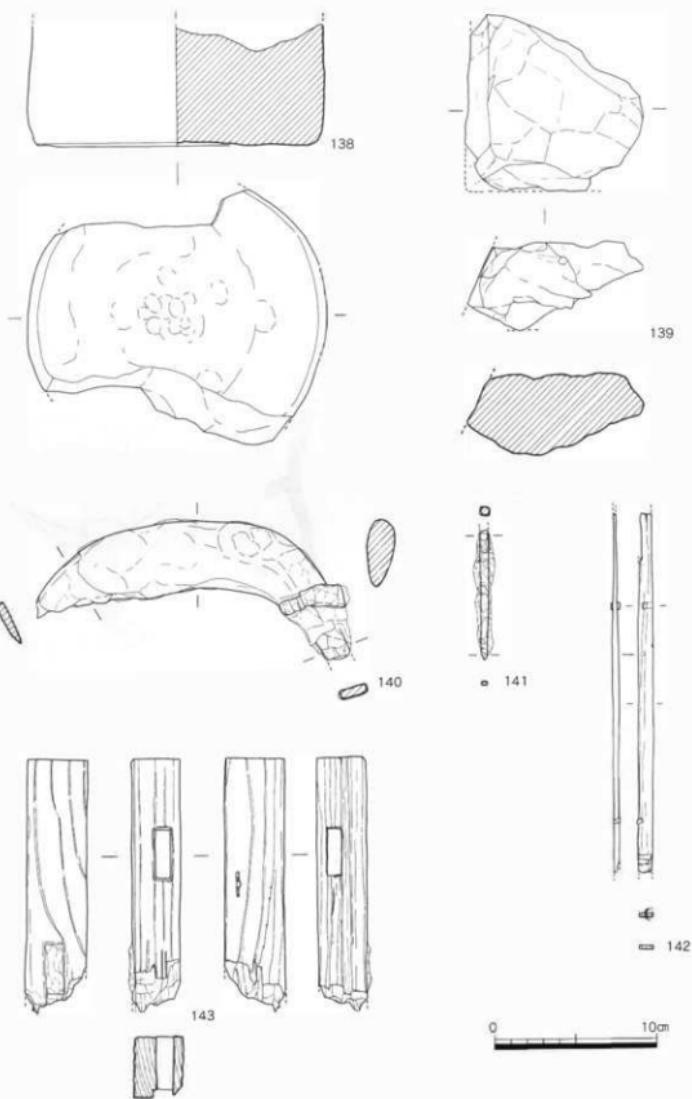


Fig.18 1SD060出土遺物実測図④ (1/3)

を量る。

鉄釘 (141) 現存長8.0cm、最大幅0.5cmを測る方柱形を呈する釘で重さは15.9gを量る。

木製品

細材 (142) 現存長21.95cm、最大幅0.95cm、厚さ0.3cmを測る。材質は不明であるが2ヶ所に金属片が埋め込まれている。

角材 (143) 角材を利用した部材で幅2.8cm×厚さ3.6cmを測る。上端面に切削面を認め、裏面右側縁は面取りが施される。中央に縦3.0×横1.1cm×厚さ3.2cmのホゾ穴が割り貫かれ、左側面には金属片が打ち込まれる。更に右側面には釘痕跡、裏面には幅0.6cm×深さ0.5cmの溝が施される。部材については不明であるが、加工痕跡から農機具等に使用されていた部材である可能性が想定される。

1SD094 (Fig.19・20, Pla.33・34)

土師器

大甕 (144) 口縁部細片で端部はやや肥厚する。口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面は横方向の刷毛目調整である。

白磁

碗 (145) 底部細片で高台端部を僅かに欠損する。高台径は6.0cmと思われ、淡灰白色の素地に淡灰色釉を高台以外に施す。

磁器

紅皿 (146) 口径4.8cm、高台径1.6cm、器高1.8cmを測る。素地は明白色を呈し、淡白綠色釉を内面及び口縁端部に施釉する。外面は型押しされ貝殻状を呈する。

変形皿 (147) 輪花を呈する変形皿で内面は花文状に施される。明茶白色の素地に内面は瑠璃釉、外面には淡灰白色釉を施す。外面には呉須で唐草文が描かれる。

染付

仏飯器 (148・149) 148は口縁部細片で口径7.2cmを復原する。明白色の素地に淡綠白色釉を内外面に施し、内面には呉須で文様を描く。149は口径7.2cm、高台径2.6cm、器高3.4cmを測る。淡灰白色の素地に淡綠白色釉を施す。疊付は露胎で砂が厚く付着する。

蓋 (150) つまみ径5.2cmを復原する。素地は明灰白色を呈し、淡灰白色釉を内外面に施す。全体に貫入が認められ、暗青色の呉須で天井部及び内面に文様が描かれる。

碗 (151～155) 151は口縁部細片で明灰白色の素地に暗青白色釉を施し、内外面に呉須で文様を描く。152は高台径4.0cm、153は口径9.2cm、高台径4.0cm、器高5.1cmを測る。ともに呉須で網目文が描かれ、明灰白色の素地に淡青灰色釉を内外面に施す。疊付は露胎である。152は高台内に渦文鉢を施す。154は口縁部細片で口径10.0cmを復原する。暗茶灰色の素地に淡灰茶色釉を内外面に施す。155はいわゆるくらわんか碗で高台径4.0cmを復原する。底部は肥厚し、外面に呉須で文様が描かれる。

陶器

碗 (156・157) 156・157はいわゆる腰折れ碗であり、体部から口縁部にかけて屈曲した器形を呈する。156は口径9.6cm、高台径3.2cm、器高4.6cm、157は口径9.8cm、高台径4.2cm、器高5.1cmを復原する。何れも内外面に施釉するが高台部は露胎である。

火入 (158) 高台径10.0cmを復原し、胴部は球形状を呈する。銘赤茶色の素地に外面下位は鉄釉、外面中位は淡灰白色釉及び淡綠茶色釉が施される。

鉢 (159・160) 何れも唐津系と思われる。159は口縁部が玉縁状を呈し、口径23.8cmを復原する。素地は明灰茶色を呈する。外面は白色土で波状に文様が描かれる。160は底径8.2cmを復原し、見込みに胎土目跡が認められる。明赤茶色の素地に内面に暗綠茶色釉が施される。

すり鉢 (161) 口径31.2cm、底径8.4cm、器高12.2cmを復原し、素地は明赤茶色を呈する。外底は糸切りで内外面に光沢のない鉄釉を施す。すり目は12本単位である。

土瓶 (162) 注口の細片で先端部は僅かに欠損する。注口部内径は0.7cmを測り、胴部側には内径0.6cm前後の穿孔が3穴施されている。素地は明赤茶色を呈し、濃黒茶色釉を外面に施す。胴部内面側に釉ダレ

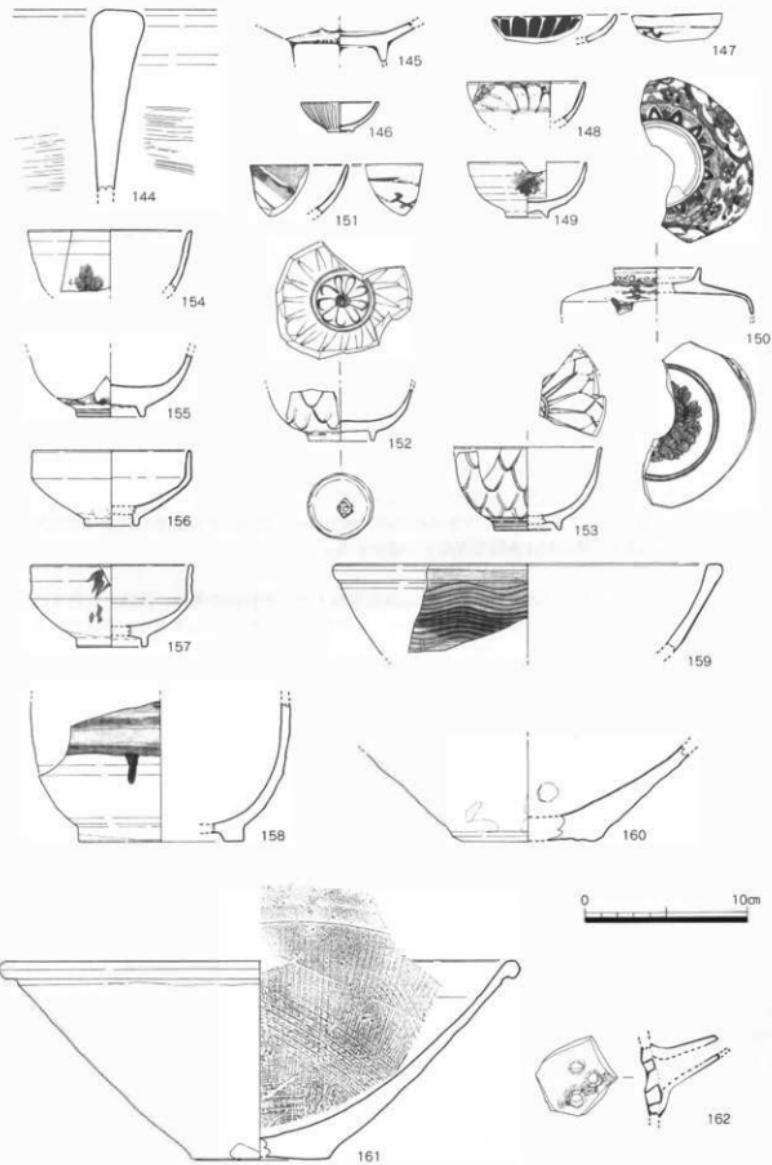


Fig.19 1SD094出土遺物実測図① (1/3)

が認められる。

瓦

平瓦（163）・164） 163は暗灰黒色を呈し、胎土に茶色粒子・微砂粒・金雲母を少量含む。凹凸面は工具ナデ、側面は工具による面取りが施されており、端部には菊花文スタンプを押印する。164はほぼ直角に屈曲するタイプでどの部分に葺かれていたものかは不明である。表面は淡黒灰色、裏面は暗白灰色を呈し、表面は工具ナデ、裏面はナデを施す。

丸瓦（165） 脊部凹面には布目痕跡が残り、凹面側縁はハラ切り、側面・凸面玉縁面は面取り、脇部凸面は工具ナデを施す。表面は淡黒灰色を呈する。

石器

砥石（166・167） ともに石材は砂岩製で166は153.5gを量る。167は方柱状を呈し、4面全てを砥面として利用する。151.7gを量る。

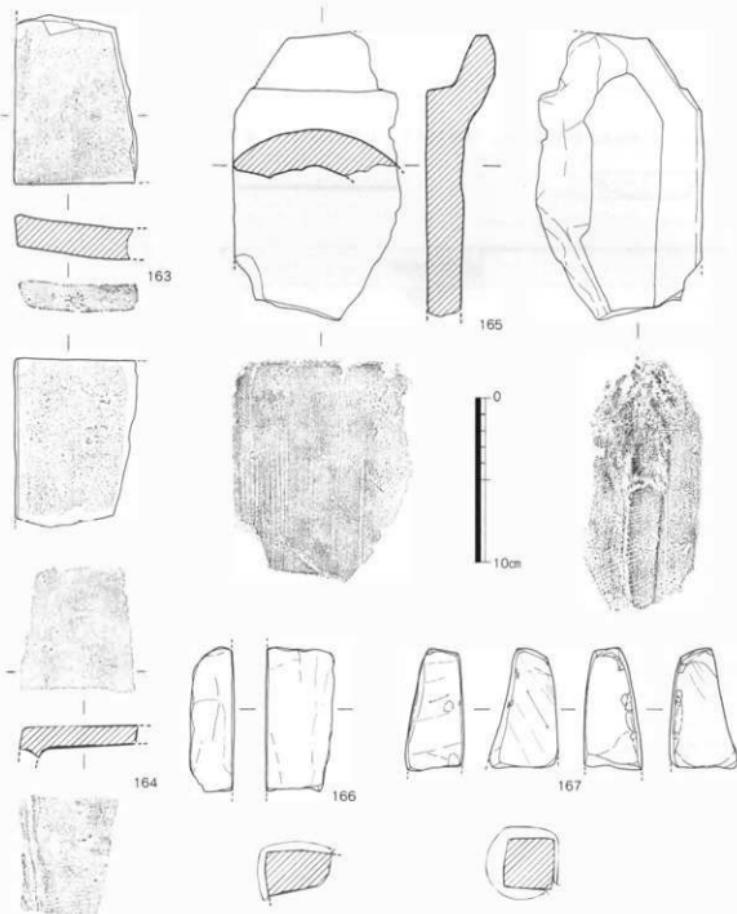


Fig.20 1SD094出土遺物実測図② (1/3)

1SD116 (Fig.21、Pla.34)

土師器

豆皿 (168) 口径7.0cm、底径5.2cm、器高1.6cmを復原する。外底糸切り、内外面ヨコナデである。

1SD118 (Fig.21、Pla.34)

陶器

すり鉢 (169) 口縁部細片で口径32.0cmを復原する。明赤茶色の素地に口縁部内外面に鉄釉を施し、内面には口縁部付近まで櫛目を施す。

1SD120 (Fig.21、Pla.34・35)

土師器

面子 (170) 湾曲の少ない体部片を利用して円形状に成型したもので外面には煤が付着する。重さは13.7gを量る。

磁器

仏飯器 (171) 口径4.8cmを復原する。素地は明茶白色を呈し、明緑白色釉を内外面に施す。

染付

碗 (172) 口縁部細片で明灰白色の素地に明青白色釉を施す。呉須で外面に文様を描く。

陶器

水注 (173) 口径9.4cmを復原する。口縁部はラッパ状に外反し、明赤茶色の素地に明緑茶色釉を施す。

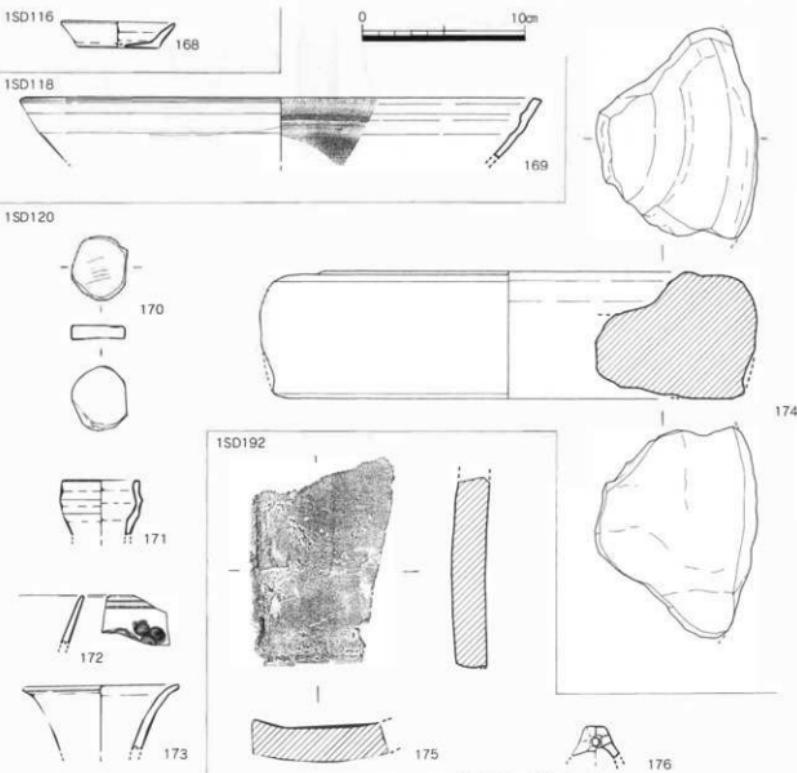


Fig.21 1SD116・118・120・192出土遺物実測図 (1/3)

石製品

ひき臼（174） 石材は凝灰岩製の上臼で表面は著しく摩耗しているためすり目は認められない。最大径30.6cm、器高7.8cmを復原する。

1SD192 (Fig.21, Pla.35)

瓦

平瓦（175） 凹凸面は工具ナデ、側面及び端面は面取りを施す。明黒灰色を呈し、微砂粒・金雲母を多く含む。

土師器

土鉢（176） 紐通し用の穿孔が残存した土鉢で孔内径は0.6cm、重さ4.4gを計測する。

井戸

1SE100 (Fig.22, Pla.35)

土師器

壺（177～180） 口径11.4～14.0cm、底径7.0～9.0cm、器高2.7～3.3cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデで体部から口縁部にかけて丸味を帯びる。177は口縁端部及び外面に煤が付着する。

すり鉢（181・182） 181は口縁部細片で内面にすり目が施される。182は底部細片で底径12.0cmを復原する。すり目は6本単位で放射状に施す。

釜（183） 口径17.0cmを復原し口縁部は直立する。肩部の口縁部よりには焼成前に施された方形状の穿孔が認められる。

木製品

板材（184） 厚さ1mmの細板材で2穴が並列して上下に穿たれており、計4ヶ所の穿孔を認める。

1SE100第2層 (Fig.22, Pla.35)

土師器

土鍋（185） 玉縁状口縁を呈し、口径43.5cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、内面は横方向の細かい刷毛目、体部外面上位は縱方向の刷毛目、体部中位は刷毛目後ナデ、体部下位は刷毛目を施す。内外面に煤が付着する。

1SE100第3～8層 (Fig.22, Pla.35)

土師器

すり鉢（186） 口縁部細片で口縁部内外面はヨコナデ、内面は刷毛目後すり目、体部外面はナデを施す。焼成後施された線刻が認められる。

1SE100第9層 (Fig.22, Pla.35)

土師器

壺（187） 口径12.8cm、底径7.6cm、器高2.35cmを測る。体部から口縁部にかけて丸味を帯びた器形を呈する。

火鉢（188） 口径27.8cmを復原し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は横方向の刷毛目、体部下位はミガキ？が施される。内面に煤が付着する。

土鍋（189） 口縁部細片で玉縁状を呈する。内面は刷毛目、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はナデである。

瓦質土器

茶釜（190～192） 190は口縁部細片で口径15.0cmを復原する。口縁端部は直立させ、肩部の口縁部よりに内径0.6cmの穿孔を2ヶ所に施し、その下位にはスタンプが押印される。191は肩部の細片で肩部に方形状の穿孔が施される。その下位には焼成後に施された線刻が認められる。192は胴部細片で胴部径は28.0cm、胴部径は23.0cmを復原する。内外面に煤が付着する。

1SE110 (Fig.23～25, Pla.36～38)

土師器

小皿（193～201） 口径6.4～9.0cm、底径3.8～6.0cm、器高1.3～2.2cmを測る。何れも外底は糸切り、内外

面ヨコナデであり、体部から口縁部にかけてはやや丸味を帯びた立ち上がりである。

坏（202～219） 口径11.0～13.0cm、底径6.6～9.0cm、器高2.2～3.3cmを測る。器形別では殆どが底部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がるが、214は底部から体部にかけて外方へ立ち上げ、口縁端部付近で更に外反させたタイプである。調整は主に口縁部及び体部内外面はヨコナデ、見込みはナデ、外底

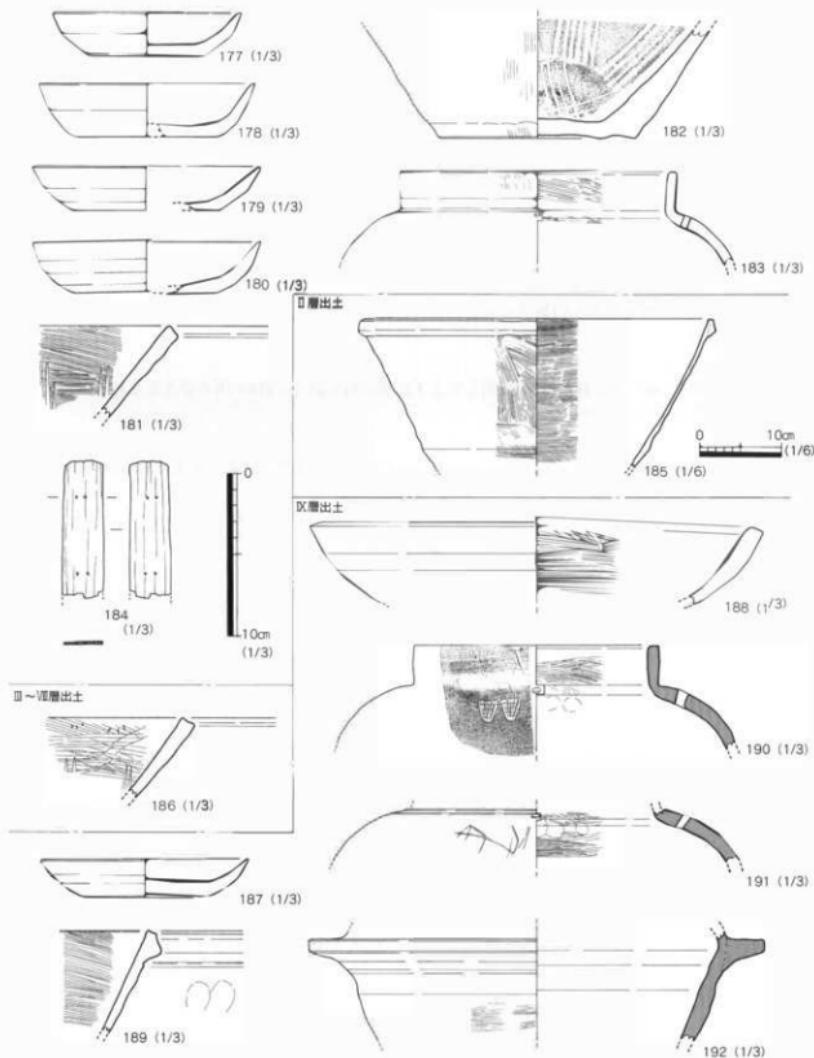


Fig.22 1SE100出土遺物実測図 (1/3・1/6)

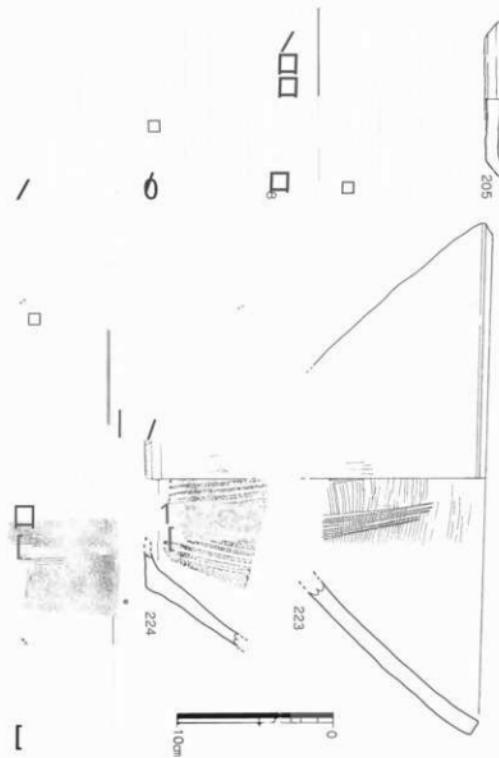
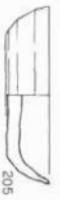
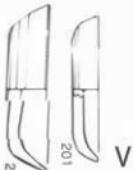
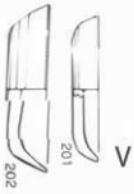
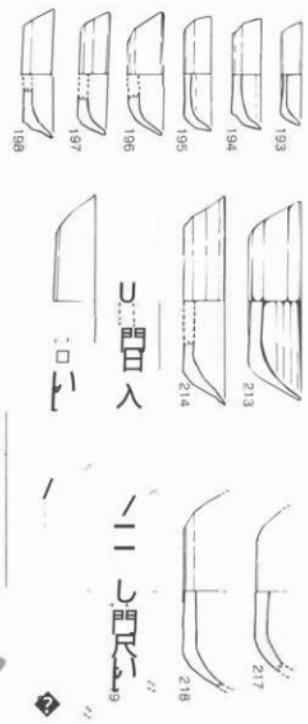


Fig.23 1SE110出土遺物測量図① (1/3)

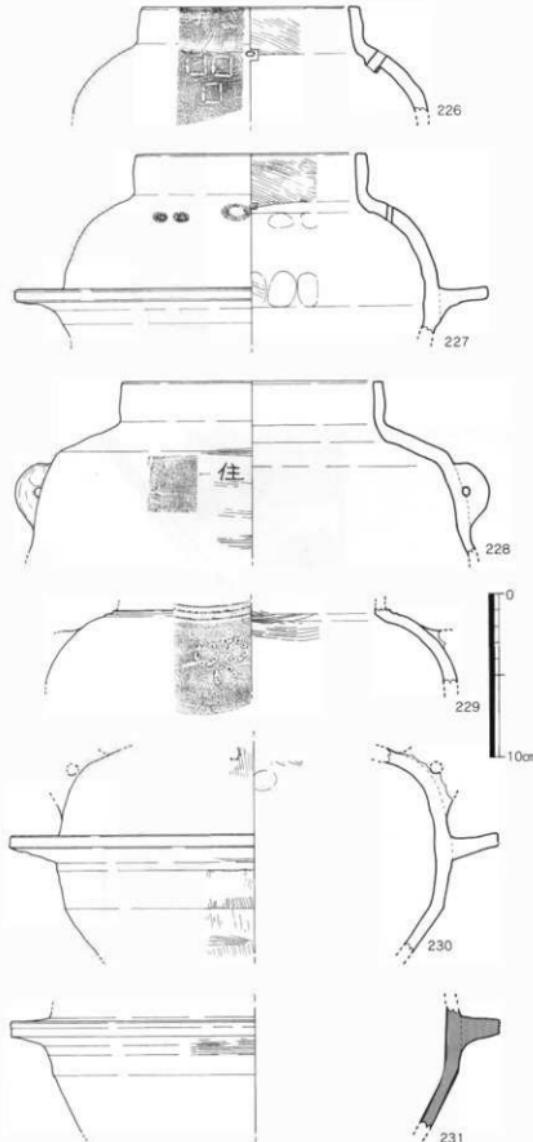


Fig.24 1SE110出土遺物実測図② (1/3)

は糸切りである。207・209・218は煤が付着する。

鉢 (220) 底部細片で底径11.0cmを復原する。外底は板状圧痕が残り、内面底部と体部境界には指頭痕が認められる。体部外面はヨコナデ。

すり鉢 (223～225) 223は口径31.6cmを復原し、内面に5本単位のすり目が認められる。224は底部細片で13.4cmを復原する。6本単位のすり目を施す。225は片口すり鉢で内面にすり目が施される。口縁部細片で口径31.4cmを復原する。

茶釜 (226～230) 226は口径13.2cmを復原する。肩部に内径0.6cmの穿孔が施され、格子状のスタンプが1セット3つで押印される。227は胴部が球状を呈する茶釜で口縁部はほぼ直立する。口径14.0cm、鉢部径29.0cm、胴部径23.0cmを復原し、肩部には方形状の穿孔が施される。更に大小の菊花文スタンプが押印される。228は胴部が箱形を呈する茶釜で、口縁部はほぼ直立する。肩部に把手が貼付けられており、内径0.5cmの穿孔を施す。更に「住」文字が線刻されており、口径15.8cmを復原する。229は肩部細片で口縁部と肩部境界には2条の沈線が施される。更に文花のスタンプが1セット3つで押印される。230は胴部細片で鉢部径30.0cm、胴部径24.0cmを復原し、胴部はほぼ球形状を呈する。肩部に菊花文のスタンプが押印され、把手が貼り付けられた痕跡が認められる。更に鉢直上には内外面から焼成後穿たれた痕跡を認めるが定かではないので図示は省略した。

土鍋 (232・233) ともに口縁部は玉縁状を呈する。232は口径27.6cm、233は38.7cmを復原する。232の外面には煤が付着する。

瓦質土器

すり鉢 (221・222・234) 221は口径27.2cmを復原する。内面にすり目、口縁部付近に内径0.7cmを測る穿孔が施さ

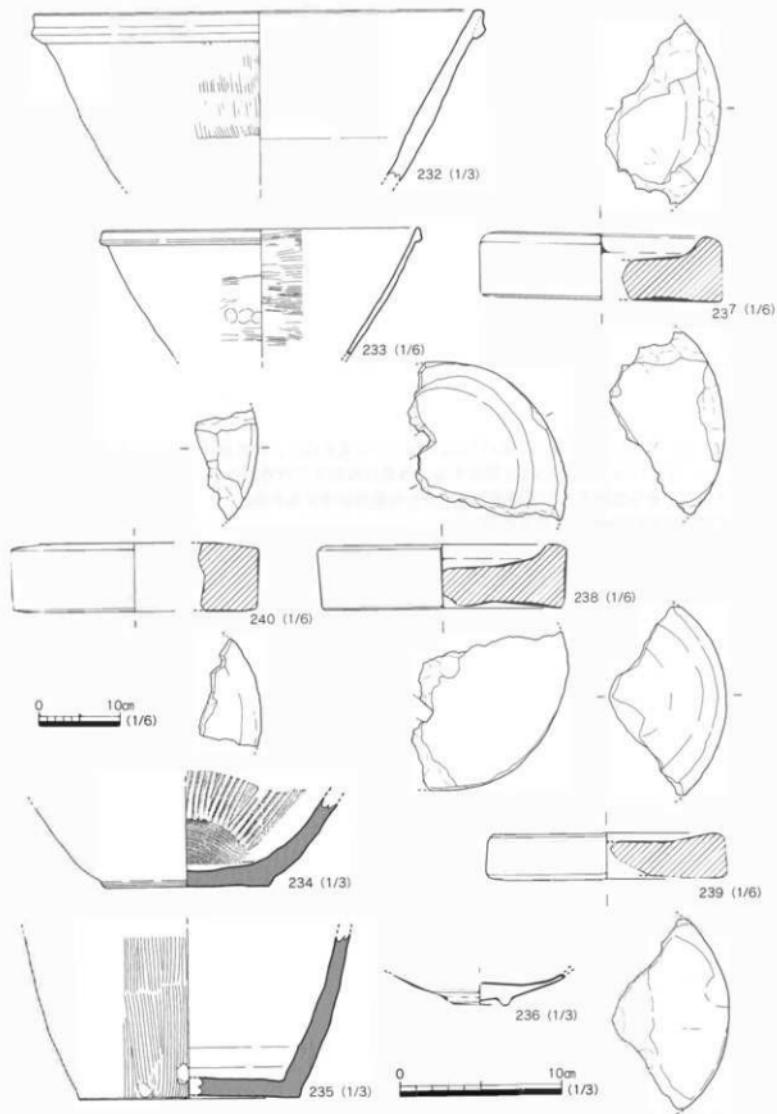


Fig.25 1SE110出土遺物実測図③ (1/3・1/6)

れる。穿孔は焼成後内外面から穿たれる。222は同一個体を図面上で復原したもので、口径30.0cm、底径11.0cm、器高13.0cmを復原する。すり目は放射状に施されており、単位は6本である。234は底部細片で底径10.0cmを復原する。体部はやや内溝気味に立ち上がり、内面には放射状に5本単位のすり目が施される。

茶釜（231） 鋼部径30.0cm、胴部径25.0cmを復原し、胴部は球形状を呈するものと思われる。

火舍（235） 底部細片で底径13.6cmを復原する。体部はバケツ型を呈するものと思われ、外面は粗い縦方向の刷毛目、内面はヨコナデの調整が施される。外面に煤が付着する。

磁器

碗（236） 高台径4.0cmを測る。淡茶灰色の素地に明緑白色釉を内面及び体部外面に施し、高台部は露胎を呈する。全体に貫入が認められる。

石製品

ひき臼（237～240） 237は安山岩製の上臼で最大径30.0cm、器高8.1cmを復原する。著しく摩耗しており、すり面は不明である。238は砂岩製の上臼で最大径31.0cm、器高8.0cmを復原する。すり面中心部に径3.0cm前後の軸穴が施され、中心からやや離れた部分に方形状の供給口を貫通させる。すり面は著しく摩耗して不明である。239は安山岩製の上臼で最大径30.0cm、器高8.1cmを復原する。すり面は摩耗のため不明。240は砂岩製の下臼で最大径30.6cm、器高8.6cmを復原する。すり面は摩耗のため不明であり、材質及び大きさから238とセットで使用されていた可能性がある。

1SE140 (Fig.26, Pla.39)

土師器

壺（241・242） 241は底部細片で底径7.6cmを測る。外底糸切り、内外面はヨコナデ調整である。242は口径12.0cm、底径8.0cm、器高3.3cmを復原する。外底は糸切りで内外面はヨコナデ、口縁部内外面に油煙痕を認めるところから灯明皿として使用されていた可能性が考えられる。

土鍋（243） 口縁部細片で玉縁状を呈する。

木製品

杭木（244） 長さ31.9cm、径3.7cm前後を測り、先端部及び上端部は片側から切り落とされる。自然木を利用したものと思われ、木材は不明である。

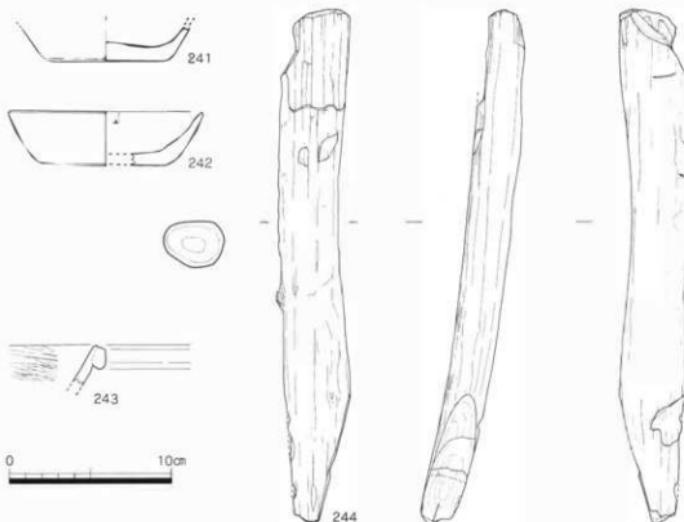


Fig.26 1SE140出土遺物実測図 (1/3)

土坑

1SK010 (Fig.27、Pla.39)

染付

皿 (245) 輪花皿で口径14.0cm、高台径5.4cm、器高3.55cmを復原する。明白色の素地に淡青白色釉を置付以外の内外面に施す。置付には砂が厚く付着し、内面には呉須で花文を描く。

陶器

皿 (246) 底部細片で高台径7.0cmを測る。淡黄灰色の素地に内面は濃青緑色釉、外面は高台内以外に

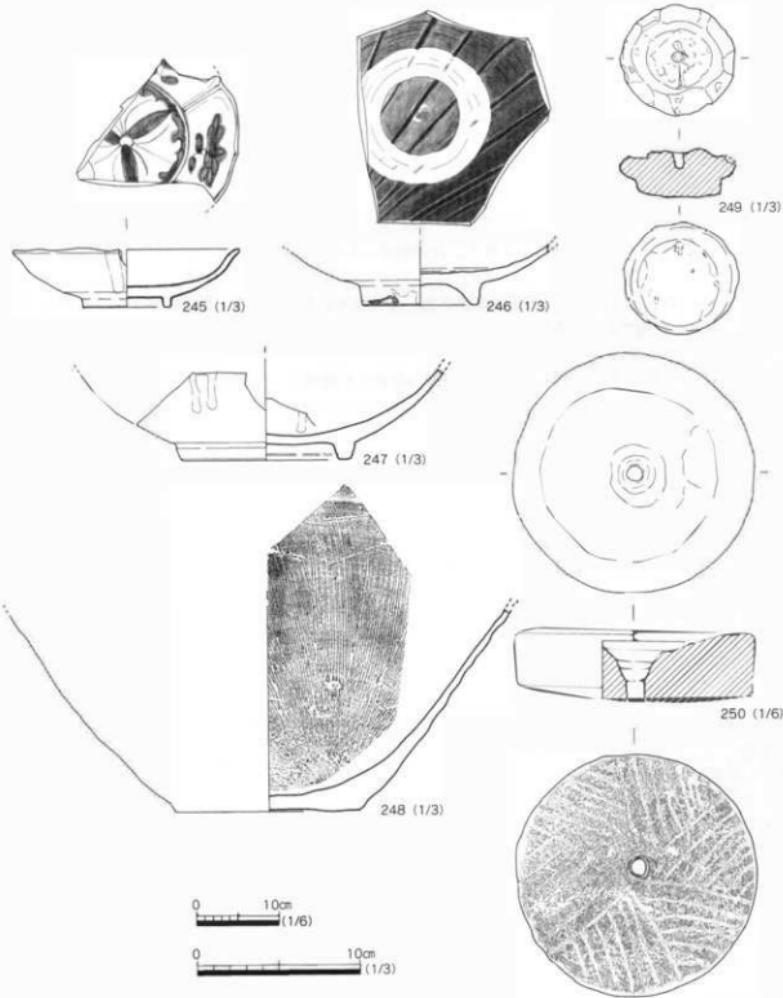


Fig.27 1SK010出土遺物実測図 (1/3・1/6)

淡灰色釉を施釉し、見込みは蛇の目状に釉が搔き取られる。疊付の一部に砂目跡が認める。武雄系か？
鉢（247） 高台径5.2cmを測る。高台以外の内外面に鉄泥釉を施すが、体部外面下位で釉ダレが認められる。

すり鉢（248） 底径11.3cmを測る。外底は糸切りで、11本単位のすり目を放射状に施す。外底及び見込みには胎土目跡が6ヶ所で確認される。

石製品

不明（249） 石材は軽石で中心部に深さ1.0cmの穿孔が施される。最大径7.0cm、高さ2.9cm、重さ28.4gを計測する。

ひき臼（250） 安山岩製の上臼で最大径29.4cm、器高9.0cmを測る。完形で中心部に内径2.0cmの穿孔が施される。すり面は7本単位のすり目が施される。

1SK015 (Fig.28, Pla.39)

土師器

大甕（251） 口径50.0cm、底径38.0cm、器高106.0cmを復原する。口縁部内外面はヨコナデ、体部及び底部はナデが施される。

平瓦（252・253） 252は端部断面形は肥厚した三角状を呈し、端部内外面はヨコナデ、凹面は工具ナデ、凸面はナデを施す。凸面は暗灰茶色、凹面は淡黒灰色を呈する。いわゆる甕の製作法と類似する点が多く、側面は切断後工具にて面取りが施されている。甕製作技法を用いて瓦を製作した可能性が強い。253は凹面ナデ、凸面刷毛目、側面はヘラ切り、凸面側縁は面取りが施される。

瓦

平瓦（254） のし瓦と思われ、表面は暗黒灰色、芯は淡灰白色を呈する。凹凸面はナデ、側面及び端面は丁寧に面取りが施されている。

石器

砥石（255） 石材は砂岩製で方柱状を呈する。4面全てを砥面として利用し、細かな線刻が観察できることから金属を使用した可能性が考えられる。重さは347.0gを量る。

1SK020 (Fig.29, Pla.39・40)

土師器

大甕（256・257） ともに口縁部に粘土を貼り付けて肥厚させたもので、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。先述した251の器形を呈すると思われる。

瓦質土器

風炉（258） 焼成前に穿たれた内径0.6cmの穿孔を口縁部付近に認める。口縁端部はヘラナデ、内面は刷毛目及び工具ナデ、外面は刷毛目を施す。

土師器

平瓦（259） 凹面は刷毛目及びナデ、凸面は刷毛目、側面は凸面から切り込みを施して切断した後、ヘラナデ及び面取りを施す。

瓦

丸瓦（260） 凸面はナデ、凹面は布目痕が残り、胴部凹面側縁はヘラ切り、側面は面取りを施す。

銅製品

銅鏡（261） 寛永通寶で「寶」文字の貝が「ハ」字状を呈することから新式タイプである可能性が考えられる。重さは1.8gを量る。

木製品

細材（262） 上端部を欠損する。現存長6.2cm、厚さ0.3cmを測る。

1SK022 (Fig.29, Pla.40)

土師器

小皿（263） 口径9.2cm、底径5.0cm、器高2.0cmを復原する。口縁部に油煙痕を認め、灯明皿の使用が考えられる。

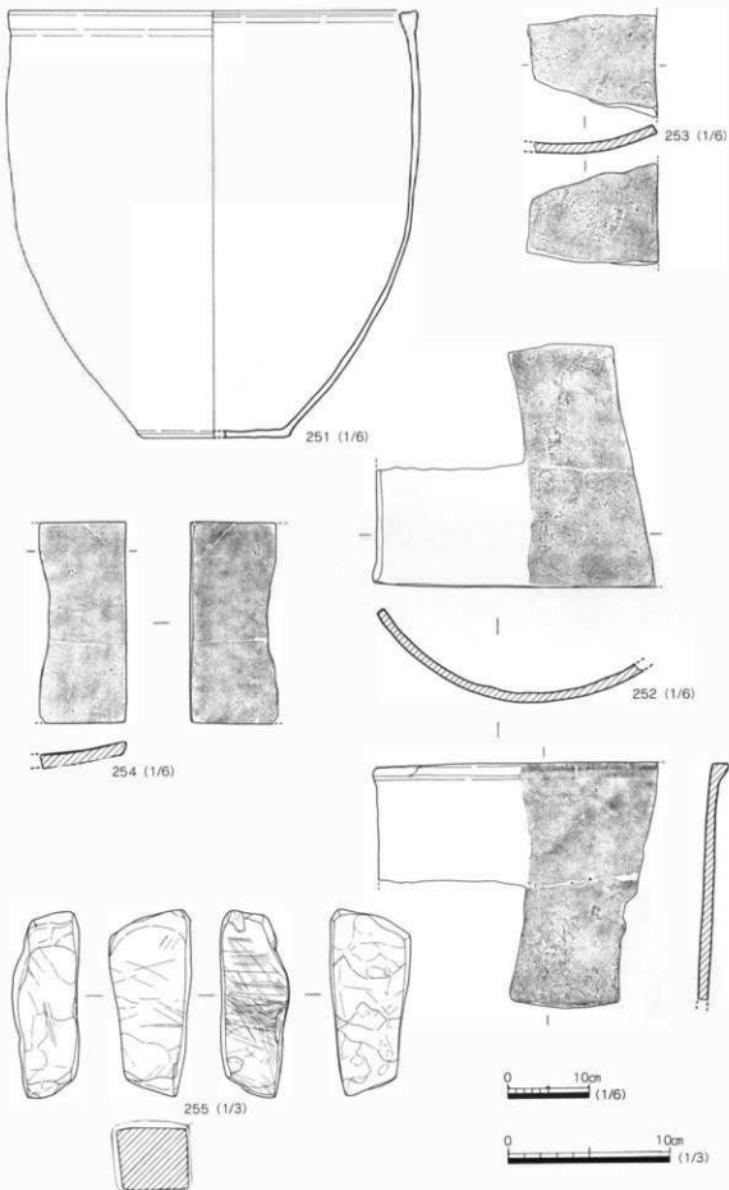


Fig.28 1SK015出土遺物実測図 (1/3・1/6)

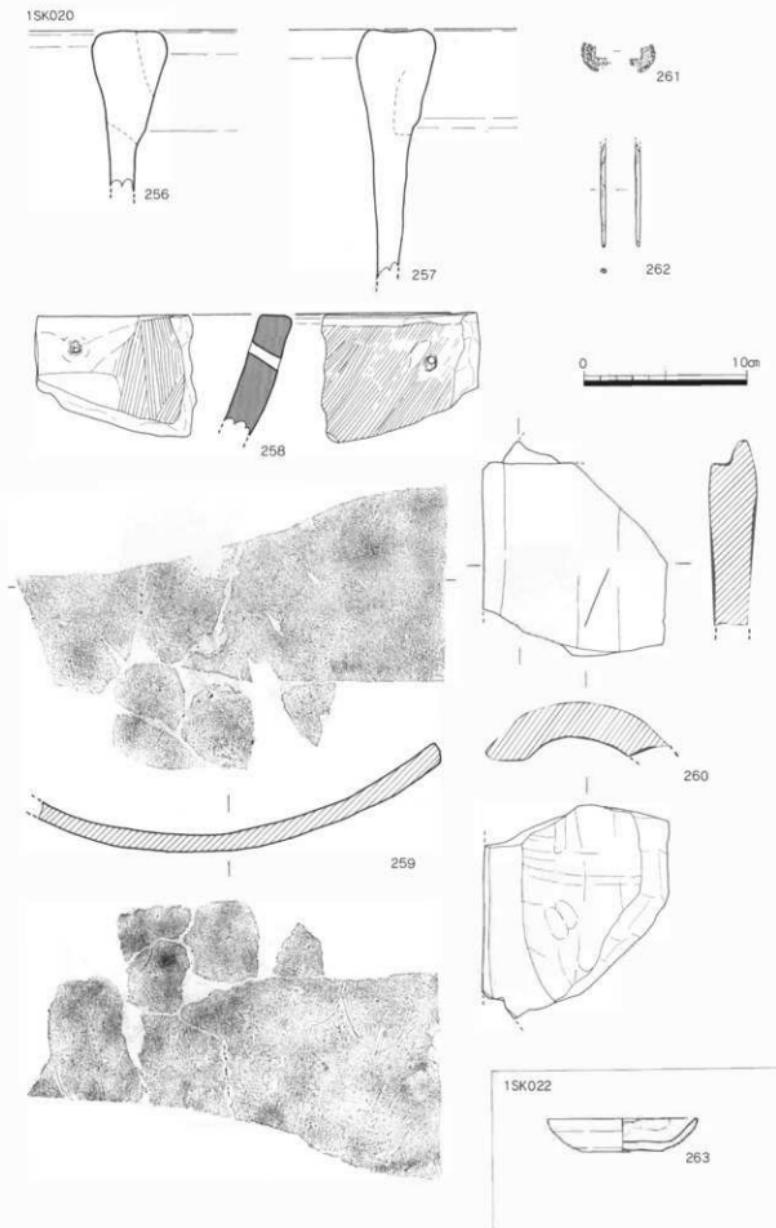


Fig.29 1SK020・022出土遺物実測図 (1/3)

1SK025 (Fig.30, Pla.40)

土師器

大甕 (264) 口径41.0cmを復原する。口縁部は内面に突出させたもので口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデの調整を施す。

磁器

蓋 (265) つまみ径4.0cm、口径10.0cm、器高3.0cmを復原する。暗灰白色の素地に端茶灰色釉を内外面に施す。つまみ端部は露胎で全体に貫入が認められる。

銅製品

銅鏡 (266) 完形の寛永通寶で「寶」文字の貝が「ハ」字状を呈する新式タイプで裏面には「文」文字が施される。重さは4.1g。

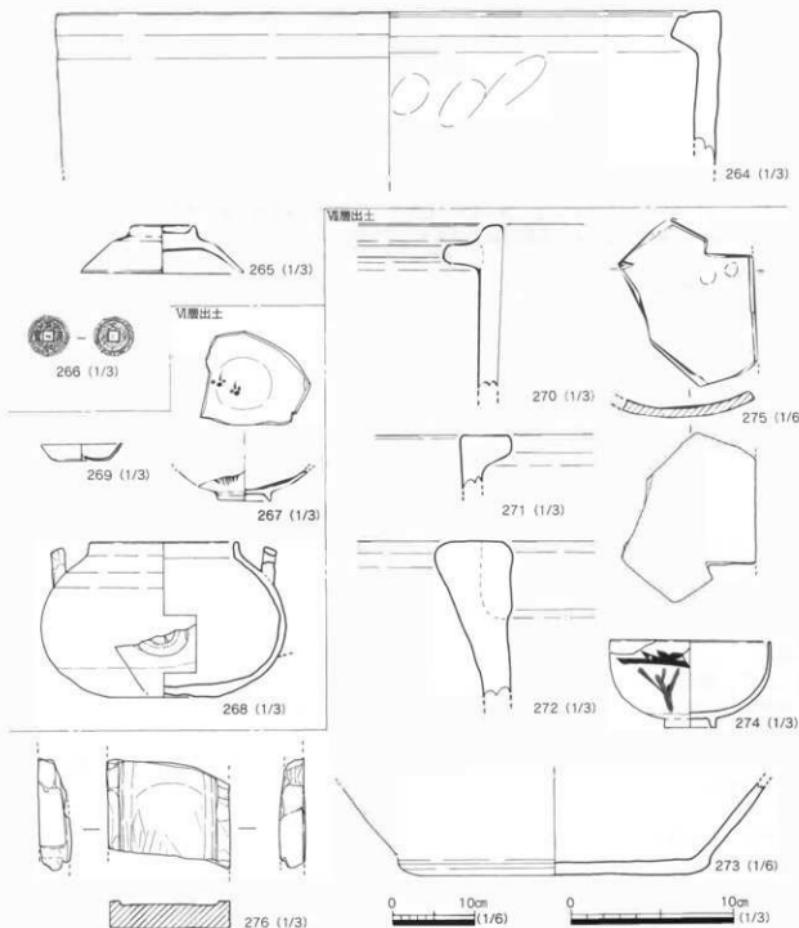


Fig.30 1SK025出土遺物実測図 (1/3・1/6)

1SK025第VI層 (Fig.30、Pla.40)

磁器

碗（267） 高台径3.2cmを測り、明白茶色の素地に淡乳青色釉を高台以外に施釉する。色絵付碗で関西系と思われる。

陶器

土瓶（268） 口径9.0cm、底径6.3cm、器高9.5cmを復原する。肩部に把手が貼付され、底部及び体部外面以外に明灰綠色釉をかける。外面に煤が付着し、二次焼成を受けたものと思われる。

銅製品

皿（269） 口径5.0cm、底径3.6cm、器高1.0cmを復原し、重さは14.4gを量る。天秤皿か。

1SK025第VII層 (Fig.30、Pla.40・41)

土師器

不明（270） 口縁部内面に貼付突帯を施す。淡茶白色を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデ調整を施す。

甕（271） 口縁端部で断面形は台形状を呈する。

大甕（272・273） 272は口縁端部に粘土を貼付し肥厚させる。先述した251の器形を呈すると思われ、273の口縁部である可能性がある。273は底径38.4cmを復原する。体部内面はヨコナデ、外面は工具ナデ、底部内面はナデ、外面は刷毛目調整を施す。

磁器

碗（274） 口径9.8cm、高台径3.2cm、器高5.3cmを測る。淡茶白色の素地に淡白黄色釉を高台以外に施釉し、全体に細かな貫入を認める。色絵付碗で関西系と思われる。

瓦

平瓦（275） 凹凸面はナデ、側面は凸面から切り込みを施して切斷した後、面取りを施す。

石製品

硯（276） 両端部を欠損した硯面部細片で幅は7.5cm、高さは1.7cm、硯面の幅は6.0cm、深さは0.2cm前後を測る。

1SK028 (Fig.31、Pla.41)

土師器

すり鉢（277） 淡茶白色を呈し、内面に太めのすり目を施す。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は指押さえ、体部内面は刷毛目を施す。

土鉢（278） 淡乳茶色を呈するつまみ部の細片で紐通し用に穿たれた穿孔が僅かに残る。

陶器

すり鉢（279） 口縁部は玉縁状を呈し、口径26.2cm、底径9.3cm、器高9.5cmを復原する。外底は糸切りで、口縁部に鉄釉を施す際にできる指頭圧痕が外底に観察される。内面には10本単位のすり目が施される。

1SK030 (Fig.31、Pla.41)

磁器

鉢（280） 輪花鉢で口径20.5cmを復原する。淡灰白色の素地に暗灰白色釉を内外面に施す。

1SK049 (Fig.31、Pla.41)

土師器

小皿（281） 口径7.6cm、底径4.9cm、器高1.7cmを復原する。外底糸切り、内外面はヨコナデ調整で明黄茶色を呈する。

染付

碗（282） 口縁部細片で明茶白色の素地に淡白色釉を内外面に施す。外面には呉須で文様が描かれる。

石器

砥石（283） 石材は泥岩製と思われ、表面及び側面を砥面として使用している。重さは10.0g。

1SK065 (Fig.31, Pla.41)

土師器

小皿 (284) 口径7.8cm、底径5.8cm、器高1.5cmを復原する。底部中央は凹面を呈し、内面に油煙痕を認める。外底系切り、内外面はヨコナデ。

すり体 (285) 口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデ、体部内面は横方向の刷毛目後すり目を施す。淡灰茶色を呈し、口縁部内面付近に煤が付着する。

釜 (286) 口縁部細片で外面は淡茶灰色、内面は暗黒茶色を呈する。淡灰白色を呈し、淡製白色釉を内外面に施す。

染付皿 (287) 口縁部細片の輪花皿で口径14.0cmを復原する。淡灰白色を呈し、内面に柴須で文様が描かれる。

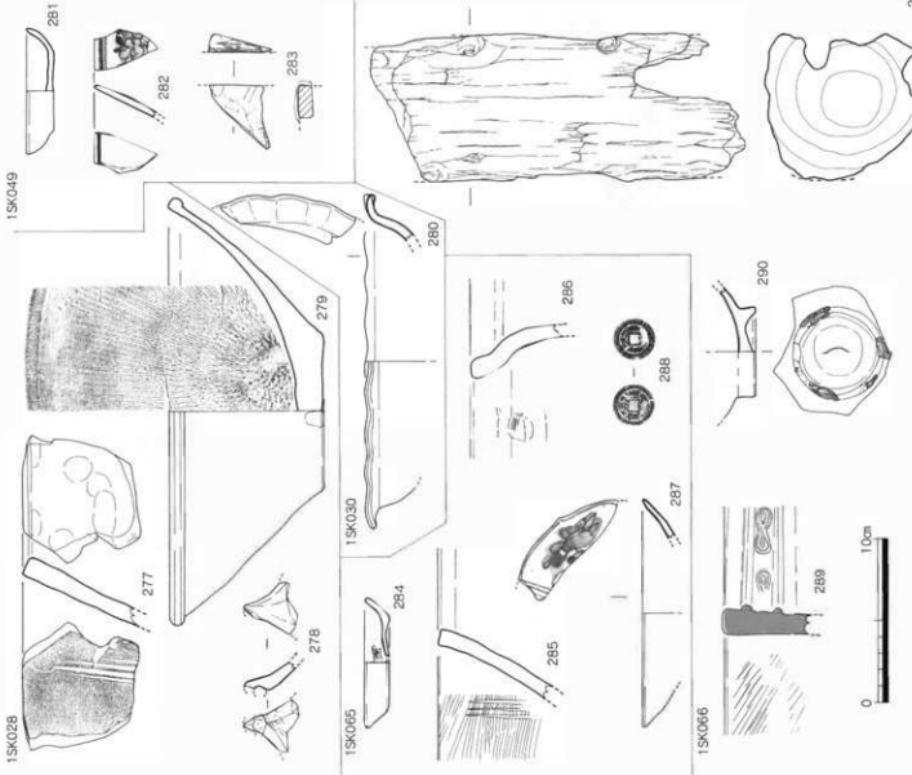


Fig.31 1SK028・030・049・065・066出土遺物実測図 (1/3)

銅製品

銅鏡 (288) 新寛永通寶で裏面に「文」文字が施される。重さは3.2g。

1SK066 (Fig.31, Pla.42)

瓦質土器

風炉 (289) 口縁部細片で口縁部外面に2条の貼付突帯が施される。突帯間には「∞」のスタンプが押印される。

陶器

碗 (290) 底部細片で高台径5.4cmを測る。明茶白色の素地に淡白黄茶色釉を内外面に施釉し、疊付に3ヶ所の砂目痕跡が残る。全体に貫入を認める。

木器

柱 (291) 現存長22.9cm、径9.0cmを測る。芯は既に腐食しており、表面の加工痕跡は認められない。

1SK068 (Fig.32, Pla.42)

土師器

小皿 (292) 口径9.0cm、底径5.0cm、器高2.3cmを復原する。摩耗のため調整不明であるが内面はヨコナデ調整が僅かに認められる。明乳燈色を呈する。

甕 (293) 口縁部細片で断面形は台形状を呈する。今回は甕としたが平瓦になる可能性もある。

陶器

鉢 (294) 口縁部細片で玉縁状を呈する。口径29.6cmを復原し、濃赤黒色の素地に鉄釉を口縁部内外面に施す。

瓦

丸瓦 (295・296) ともに凹面に布目痕を認め、凸面はナデ、胴部凹面側縁はヘラ切り、側面は面取りを施す。

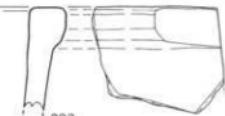
1SK068



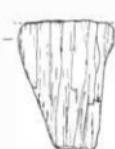
292



294



293



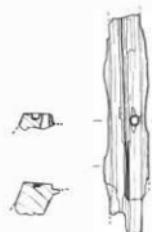
1SK070



295



296



300

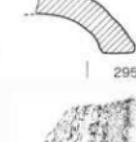


Fig.32 1SK068・070出土遺物実測図 (1/3)

木製品

板材（297・298）ともに厚さ1.0cm前後の板材で8.0cm弱の長さに合わせて切断されているようである。双方の材質は不明であるが類似する。

1SK070 (Fig.32、Pla.42)

染付

碗（299）底部細片で明灰白色の素地に明白色釉を内外面に施釉する。豊付は露胎で内面に呉須で花文が描かれる。

木製品

角材（300）現存長13.6cm、幅2.8cm、厚さ2.0cmを測る角材で中央部に内径0.5cmの穿孔が認められる。側面では大きく抉り取られた痕跡を認めるが腐食のため詳細不明である。

1SK077 (Fig.33、Pla.42・43)

土師器

壺（301）淡赤白色を呈し、口径12.2cm、底径8.0cm、器高2.8cmを復原する。外底系切り、内外面はヨコナデ調整を施す。

鉢（302）淡灰茶色を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はナデを施す。

火鉢（303）口縁部細片で淡茶灰色を呈し、内面に張り出した突帶を施す。口縁端部には煤が付着する。

瓦質土器

釜（304）口縁部と肩部境界は屈折し、端部は外面に張り出した突帶を施す。色調は暗黒灰色を呈する。

瓦

軒平瓦（305）軒平瓦右辺部の細片と思われ、軒面に唐草文が配されている。

1SK084 (Fig.33、Pla.43)

瓦

平瓦（306）凹凸面はナデ、側面は工具ナデと思われる。

1SK113 (Fig.33、Pla.43)

染付

碗（307）くらわんか碗底部細片で高台径3.4cmを測る。暗白灰色の素地に淡青灰色釉を内外面に施す。豊付は露胎である。

1SK194 (Fig.33、Pla.43)

染付

碗（308）高台部を欠損する。口径12.0cmを復原し、明灰白色の素地に青みがかった透明釉を施す。全体に貫入が見られ、高台内に「大明□」銘が認められる。

1SK202 (Fig.33、Pla.43)

土師器

土鍋（309）309は玉縁状を呈した土鍋で銘茶橙色を呈する。310は銘茶褐色を呈し、内面は刷毛目、外面は刷毛目及びナデ、口縁部内外面はヨコナデが認められる。瓦質土器の可能性もある。

不明（314・315）ともに凹凸面は粗い刷毛目、側面はヨコナデを施す。表面は淡黒茶色、芯は淡茶黄色を呈し、胎土は微砂粒、雲母を多く含み焼成は良好である。不明遺物としたが土管或いは丸瓦の可能性もある。

磁器

皿（311）口縁部細片で口径12.0cmを復原する。明白灰色の素地に明緑灰色釉を内外面に施釉する。

陶器

碗（312）精選された胎土を呈し、素地は淡茶灰色、釉は明黒茶色を呈する。内外面に施釉され、口径7.8cmを復原する。

鉢（313）口縁部細片で内面には刷毛による波状文が描かれる。唐津系。

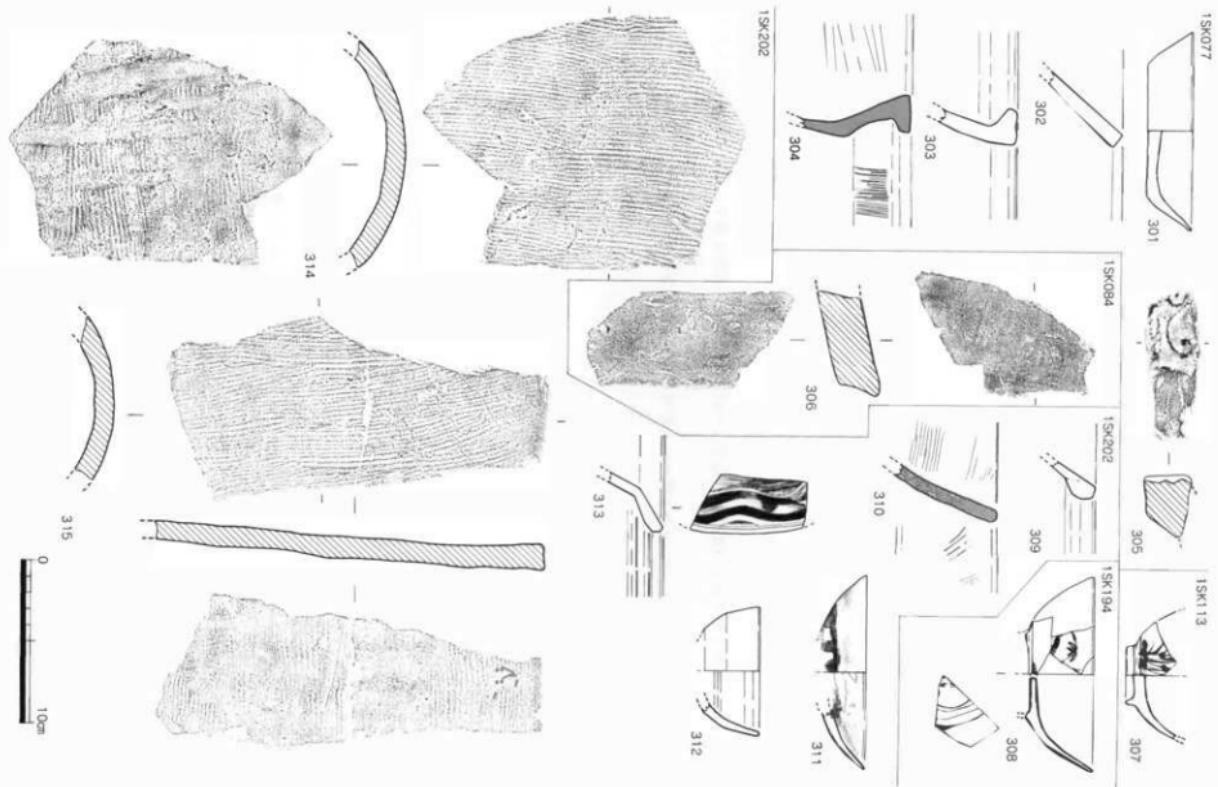


Fig.33 1SK077・084・113・194・202出土遺物実測図 (1/3)

1SK211 (Fig.34、Pla.43)

土器器

皿 (316) 口径13.0cm、底径7.9cm、器高2.35cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデの調整を施し、口縁部内面には煤が厚く付着する。

白磁

碗 (317) 高台径5.1cmを測る。淡灰白色の素地に淡青白色釉を高台以外に施釉する。太宰府 XI 類。

龍泉窯系青磁

碗 (318) 高台径5.3cmを測り、外面に連弁が施される。太宰府 II a類。

1SK215 (Fig.34、Pla.43・44)

土器器

不明 (319~321) 何れも凹凸面は粗い刷毛目、側面はヨコナデを施す。表面は淡黒茶色、芯は淡茶黄色を呈し、胎土は微砂粒、雲母を多く含み焼成は良好である。不明遺物としたが土管或いは丸瓦の可能性もある。

1SK218 (Fig.34、Pla.44)

土器器

土鉢 (323) 土鉢に用いられていた土製玉と思われる。径は1.15cm、重さは1.5gを計測する。

瓦質土器

鉢 (322) 口縁部外面及び内面はヨコナデ、体部外面は刷毛目を施す。外面に煤が付着する。

陶器

鉢 (324) 高台部細片で高台径8.0cmを復原する。高台部は鉄釉、見込みには暗黒緑色釉が施される。

ピット

1SP002 (Fig.35、Pla.44)

土器器

小皿 (325・326) 325は口縁部細片で淡乳茶色を呈する。口縁部に炭化物が付着する。326は底部細片で底径7.0cmを復原する。淡乳茶色を呈し、調整は摩耗のため不明。

瓦質土器

風炉 (327) 外面に1条の貼付突帯を施し、上部に刺突文、下部に菊花文を施す。内面は斜め方向の刷毛目を認める。

染付

碗 (328) 底部片で高台径4.8cmを復原する。明灰白色の素地に明青白色釉を内外面に施釉する。

1SP009 (Fig.35、Pla.44)

鉄製品

不明 (329) 最大径2.7cm、重さ5.9gを計測する。中央部に内径0.2cmの穿孔を認める。

1SP014 (Fig.35、Pla.44)

染付

碗 (330) くらわんか碗で明白色の素地に淡灰白色釉を内外面に施す。

1SP017 (Fig.35、Pla.44)

染付

碗 (331) 高台径4.6cmを復原し、明灰白色の素地に暗灰白色釉を施す。見込みにコンニヤク印判による五弁花文が施される。

石器

砥石 (332) 石材は砂岩製又は泥岩製である。表裏面・右側面・下端面の3面を砥面として利用し、細かな線刻が観察できることから金属を使用した可能性が考えられる。重さは570.0gを量る。

1SP019 (Fig.38、Pla.48)

木器

柱 (388) 長さ30.7cm、最大径14.1cmを測る。芯は既に腐食しており表面の加工痕跡は認められない。

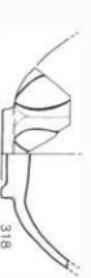
1Sk211



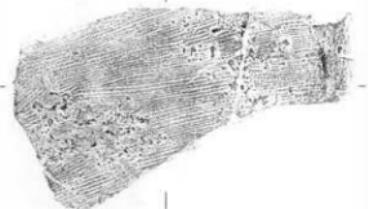
1Sk215



318



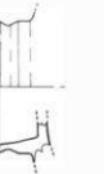
319



321



322



323



324

Fig.34 1Sk211·215·218出土遺物実測図 (1/3)

1SP024 (Fig.35、Pla.44・45)

土師器

壺 (333) 口径11.6cm、底径7.0cm、器高2.5cmを復原する。明茶白色を呈し、外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。

土鍋 (334) 口縁部細片で内外面はヨコナデ。外面に煤が付着する。

石器

柱状片刃石斧 (335) 長さ3.20cm、幅1.15cm、厚さ0.45cm、重さ3.7gを計測する。泥岩製の完形品である。

1SP026 (Fig.35、Pla.44)

土師器

土鍋 (336) 口縁端部は折り返した玉縁状口縁を呈し、口縁部内外面はヨコナデ、体部内面は刷毛目、体部外面はナデを施す。外面には煤が付着する。

1SP027 (Fig.35、Pla.45)

土師器

平瓦 (337) 凹面はナデ、凸面は工具ナデを施し、側面は凸面から切り込みを入れた後側面中央までヘラ切りを施し破断する。切り離し後粗い面取りを施す。色調は明乳橙色を呈する。

1SP041 (Fig.35、Pla.45)

土師器

小皿 (338・339) 338は端乳橙色を底部細片で底径6.0cmを復原する。339は端灰茶色を呈する。ともに外底糸切り、内外面はヨコナデを施す。

碁石 (340) 濃黒灰色を呈し、径2.0cm、重さ3.4gを計測する。焼成後上下部に穿孔が施される。

石器

砥石 (341) 石材は天草産砂岩製で方柱形を呈する。表面1面を砥面として利用する。重さは305.0gを量る。

1SP043 (Fig.35、Pla.45)

土師器

小皿 (342) 淡白橙色を呈し、口径9.0cm、底径5.7cm、器高1.7cmを復原する。外底糸切り、内外面はヨコナデを施し、内面に油煙痕が認められる。灯明皿としての使用が考えられる。

1SP044 (Fig.35、Pla.45)

土師器

小皿 (343) 淡灰茶色を呈し、口径9.6cmを復原する。内外面はヨコナデで油煙痕が認められる。

土鍋 (344) 玉縁状を呈した口縁部細片で外面には煤が付着する。

青磁

壺 (345) 口縁部は緩やかに開き、口径は11.6cmを復原する。淡灰白色の素地に淡灰緑色釉を内外面に施釉する。

1SP047 (Fig.35、Pla.45)

土師器

土鍋 (346) ややくずれた玉縁状を呈した口縁部細片で端部はヨコナデ、内面は刷毛目、口縁部外面下位は刷毛目及びナデである。

1SP048 (Fig.35、Pla.45・46)

土師器

不明土製品 (347) 淡白茶色を呈し、胎土に茶色粒子、金雲母を含む。重さは27.1g。

瓦質土器

面子 (348・349) ともに土器破片を利用した二次加工品で周囲を細かく打ち抜いて円形状に仕上げている。348は径4.1cm、器厚1.0cm、重さ21.6g、349は径4.3cm、器厚1.0cm、重さ18.0gを計測する。

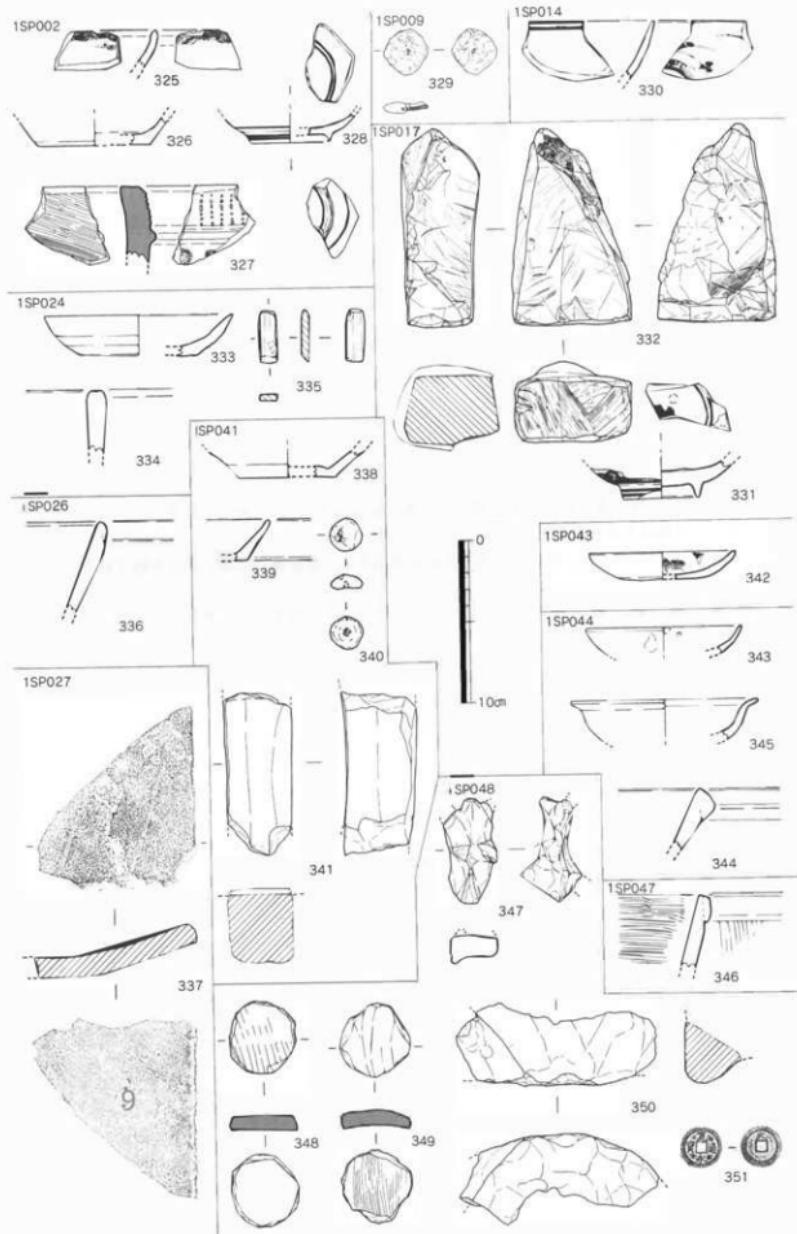


Fig.35 1SP002・009・014・017・024・026・027・041・043・044・047・048出土遺物実測図 (1/3)

石製品

不明 (350) 安山岩製で加工面が僅かに残る。五輪塔の一部である可能性もある。

銅製品

銅鏡 (351) 完形の新寛永通寶で裏面には「文」文字が施される。重さは3.5g。

1SP051 (Fig.36、Pla.45・46)

染付

碗 (352) 高台径4.8cmを測る。灰白色の素地に淡青白色釉を施釉するが、置付は露胎である。見込みに呉須で花文が施される。

数珠

玉 (353) 径0.7cm、厚さ0.5cm、内孔径0.2cm、重さ0.4gを計測する。

銅製品

煙管 (354) 吸口部で中央は折れ曲がる。重さは4.6gを量る。

1SP053 (Fig.36、Pla.46)

陶器

すり鉢 (355) 口縁部細片で口径30.0cmを復原する。口縁部内面付近まで16本単位のすり目を施し、内面及び口縁部外面まで鉄釉を施す。体部外面は露胎である。

1SP058 (Fig.36、Pla.46)

土師器

土鉢 (356) 土鈴に用いられた玉で径は1.2cm、重さ1.6gを計測する。

石製品

碁石 (357) 石材は片岩製で径2.1cm、厚さ0.6cm、重さ4.3gを計測する。

面子 (358) 石材は片岩製で径3.3cm、厚さ0.8cm、重さ12.9gを計測する。

1SP074 (Fig.36、Pla.46)

瓦質土器

すり鉢 (359) 内面に僅かにすり目痕跡が残る。調整は摩耗のため不明。

瓦

平瓦 (360) 四面は刷毛目、凸面は工具ナデ、側面はハラ切り後面取りを施す。

1SP075 (Fig.36、Pla.46)

土師器

すり鉢 (361) 口縁部細片で内面にすり目痕跡が残る。口縁端部はヨコナデ、内面は刷毛目、外側はナデを施す。

1SP087 (Fig.36、Pla.46)

石器

砥石 (362) 石材は泥岩製と思われる。表面及び左側面を砥面として利用し、重さは36.5gを量る。

1SP093 (Fig.36、Pla.46)

土師器

面子 (363) 土器破片を利用した二次加工品で周囲を細かく打ち抜いて円形状に仕上げている。径3.8cm、器厚0.8cm、重さ14.3gを計測する。

1SP096 (Fig.36、Pla.46)

染付

碗 (364) 底部細片で高台径4.4cmを測る。淡灰白色の素地に暗青白色釉を全面に施し、置付の釉を搔き取る。全体に貫入が見られ、外側及び見込みに草花文が描かれる。

1SP105 (Fig.36、Pla.46)

磁器

碁石 (365) 径2.25cm、厚さ0.6cm、重さ4.9gを計測する。磁器片を研磨して成型したものである。

1SP107 (Fig.36、Pla.46)

土師器

火舎 (366) 底部破片で底径26.4cmを復原する。内面は刷毛目及びヨコナデ、外面は刷毛目を施す。

龍泉窯系青磁

碗 (367) 口縁部細片で外面に雷文を施す。素地は明白灰色を呈し、内外面に暗青緑色釉を施釉する。

1SP130 (Fig.37、Pla.46)

石製品

ひき臼 (368) 安山岩製の上臼で下面にはすり目が施される。最大径33.5cm、厚さ8.1cmを測り、中心部

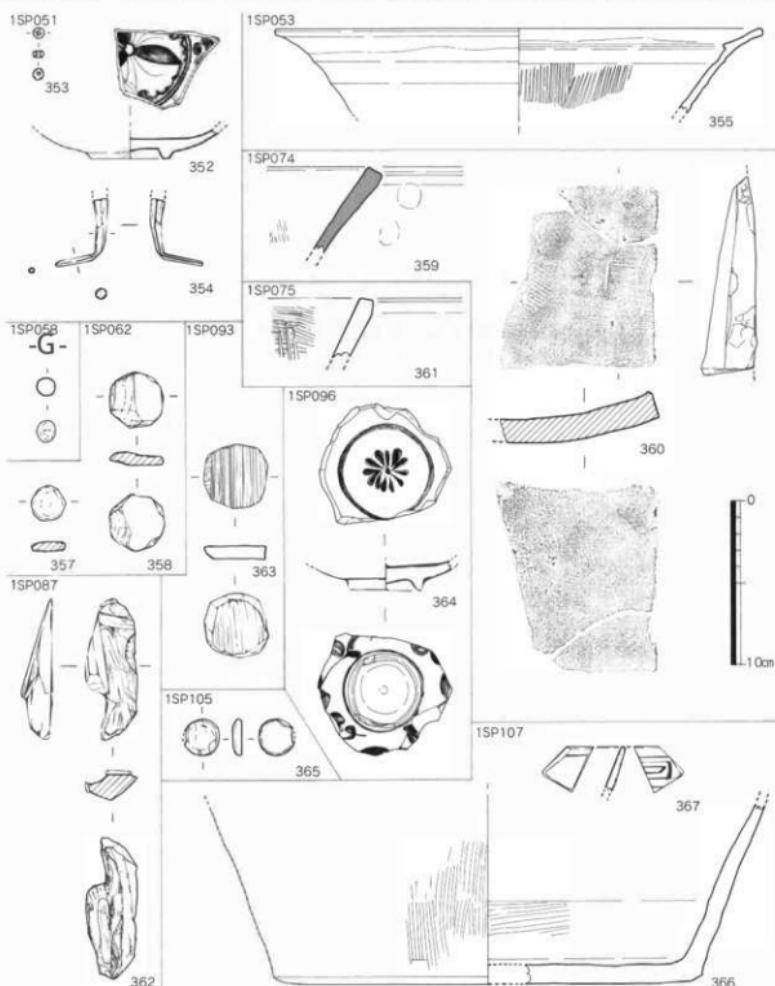


Fig.36 1SP051・053・058・062・074・075・087・093・096・105・107出土遺物実測図 (1/3)

には上下面から穿たれた穿孔を認める。中心よりやや離れた場所に内径3.5cm前後の供給口を貫通させ、側面には方形の挽き手口を施す。

1SP132 (Fig.37、Pla.47)

石製品

石塔 (369) 石材は凝灰岩製で表面にはノミ加工痕跡が認められる。部位については不明。

1SP133 (Fig.37・38、Pla.47)

陶器

碗 (370) 高台径4.6cmを復原する。明灰色の素地に明灰色釉を高台以外に施釉する。

木器

柱 (389) 過半部は腐食した木片で現存長20.0cm、最大径12.8cmを測る。激しく傷んでおり表面の加工痕跡は不明である。

1SP138 (Fig.37、Pla.47)

陶器

すり鉢 (371) 端部は鋒先状を呈し、内面にすり目が施される。口縁部内外面にのみ鉄釉が施され他は露胎である。

瓦質土器

面子 (372) 土器破片を利用した二次加工品で周囲を細かく打ち抜いて円形状に仕上げる。径3.4cm、器厚1.1cm、重さ17.9gを計測する。

1SP143 (Fig.37、Pla.47)

土師器

小皿 (373) 明赤橙色を呈し、口径10.0cm、底径6.0cm、器高1.4cmを復原し、外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。

1SP145 (Fig.37、Pla.47)

土師器

豆皿 (374) 淡赤橙色を呈し、口径5.2cm、底径3.7cm、器高1.6cmを復原する。外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。

1SP153 (Fig.37、Pla.47)

土師器

豆皿 (375) 口径6.8cm、底径5.2cm、器高1.35cmを復原する。明乳橙色を呈し、外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。

1SP157 (Fig.37、Pla.47)

鉄製品

釘 (376) 現存長4.0cm、厚さ0.4cmの方形状を呈し、重さ4.7gを量る。

1SP161 (Fig.37、Pla.47)

瓦質土器

鉢 (377・378) ともに口縁部細片で377は口縁端部を平坦に378は凹状に施す。

1SP162 (Fig.37、Pla.47)

土師器

豆皿 (379) 口径6.0cm、底径4.4cm、器高1.4cmを復原し、外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。

1SP164 (Fig.37、Pla.47)

土師器

すり鉢 (380) 底径10.7cmを復原し、内面にすり目を施す。淡赤橙色を呈し、内面に煤が付着する。

1SP166 (Fig.37、Pla.47)

陶器

すり鉢 (381) 暗灰赤色を呈し、底径11.3cmを測る。内面に13本単位のすり目を施す。外底は糸切りで

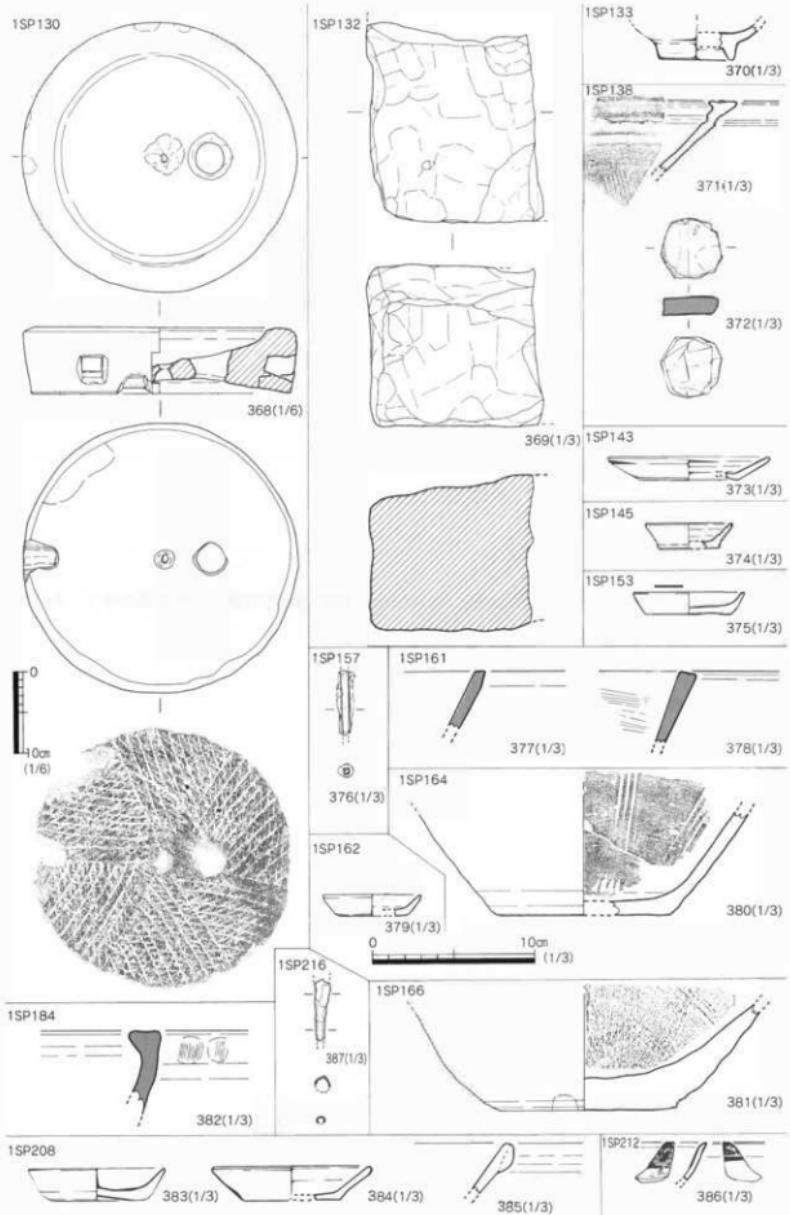


Fig.37 1SP130・132・133・138・143・145・153・157・161・162・164・166・184・208・212・216
出土遺物実測図 (1/3・1/6)

指頭圧痕が残る。

ISP184 (Fig.37, Pla.47)

瓦質土器

すり鉢 (382) 口縁部細片で端部は平坦面を呈し、内面に張り出す。外面に指押さえ後刷毛目を施し、文様とする。端部に煤が付着する。

ISP208 (Fig.37, Pla.47)

土師器

小皿 (383・384) 383は口径9.8cm、底径6.0cm、器高2.1cmを復原する。明茶白色を呈し、口縁部は体部よりもやや開き気味に外反させる。外底は糸切り、内外面はヨコナデ。384はやや内湾するタイプで口径8.3cm、底径6.2cm、器高2.0cmを復原する。明赤燈色を呈し、外面に煤が付着する。

土鍋 (385) 端部は玉縁状を呈する。

ISP212 (Fig.37, Pla.48)

白磁

碗 (386) 口縁端部は若干外反する。淡灰白色の素地に暗灰白色釉を口縁部内外面のみ施釉する。

銅製品

煙管 (387) 吸口部で端部を欠損する。重さは2.3gを量る。

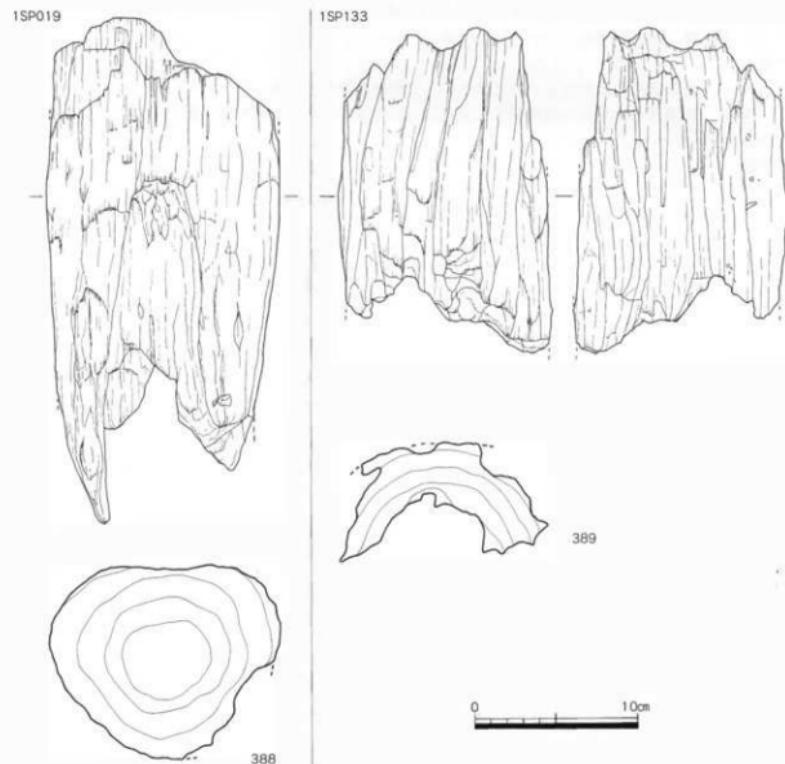


Fig.38 ISP019・133出土遺物実測図 (1/3)

不明遺構

1SX103 (Fig.39、Pla.48)

染付

碗 (390) やや丸味を帯びた碗で口径9.2cm、底径3.5cm、器高5.5cmを復原する。明白色の素地に明白青色釉を内外面に施す。見込みに目跡を認め、高台疊付には砂が厚く付着する。呉須で見込み及び体部外面に文様が描かれる。

1SX117 (Fig.39、Pla.48)

土師器

火鉢 (391) 明乳橙色を呈し、内面に突出した口縁部を呈する。

1SX121 (Fig.39、Pla.48)

土師器

皿 (392) 底径6.3cmを復原する。外底糸切りで色調は明乳橙色を呈する。外面に線刻らしき痕跡を認める。

土鍋 (393) 体部と口縁部境界付近に三角突帯が施される。口縁端部はヨコナデ、内面は横方向の刷毛目、口縁部外面は綫方向の刷毛目及び指押さえである。外面には厚く煤が付着する。

磁器

碗 (394) 口径6.8cmを復原する。暗灰白色の素地に暗白灰色釉を内外面にかける。

1SX150 (Fig.39、Pla.48・49)

土師器

不明 (395) 底部細片と思われる。外底は糸切りで明乳白色を呈する。

火舎 (396) 明黒茶色を呈する底部細片で底径22.0cmを復原する。底部外面に脚が貼付されており、内面には煤が付着する。

瓦質土器

鉢 (397) 淡黒灰色を呈し、口縁端部はヨコナデ、口縁部内外面はナデを施す。

火鉢 (398・399) 398は脚部の細片で脚は逆台形状を呈する。脚部はナデ、底部はヨコナデを施す。399は口縁部破片で口径32.3cmを復原する。内面張り出しの口縁部を呈し、外面には三角状の貼付突帯を施される。

陶器

碗 (400～402) 400は底部細片で高台径4.8cmを復原する。見込みは蛇ノ目状に釉が搔き取られる。素地は明茶白色を呈し、淡赤灰色釉を高台部以外に施釉する。401は口縁部細片で明白茶色の素地に濃茶緑色釉を施す。武雄系か。402は長崎現川系陶器皿と思われ、口径13.3cm、高台径5.1cm、器高3.0cmを復原する。暗灰褐色の素地に明茶褐色釉を高台部以外に施釉する。内面見込みは釉が蛇ノ目状に搔き取られ、高台疊付には砂が付着する。

1SX174 (Fig.39、Pla.49)

須恵器

鉢 (403) 東播系鉢で口縁部は玉縁状を呈する。

磁器

碗 (404) 口縁部細片で淡灰茶色の素地に淡緑灰色釉を薄く施釉する。

1SX205 (Fig.39、Pla.49)

土師器

小皿 (405・406) 405は丸味を帯びた小皿で口径8.1cm、底径4.9cm、器高2.0cmを測るほぼ完形品である。明黄茶色を呈し、外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。内面に油煙痕を認め、灯明皿と使用された可能性がある。406は405と対照的に体部から口縁部にかけては大きく外反する。口径9.87cm、底径5.5cm、器高2.0cmを復原する。明乳赤色を呈し、外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整を施す。

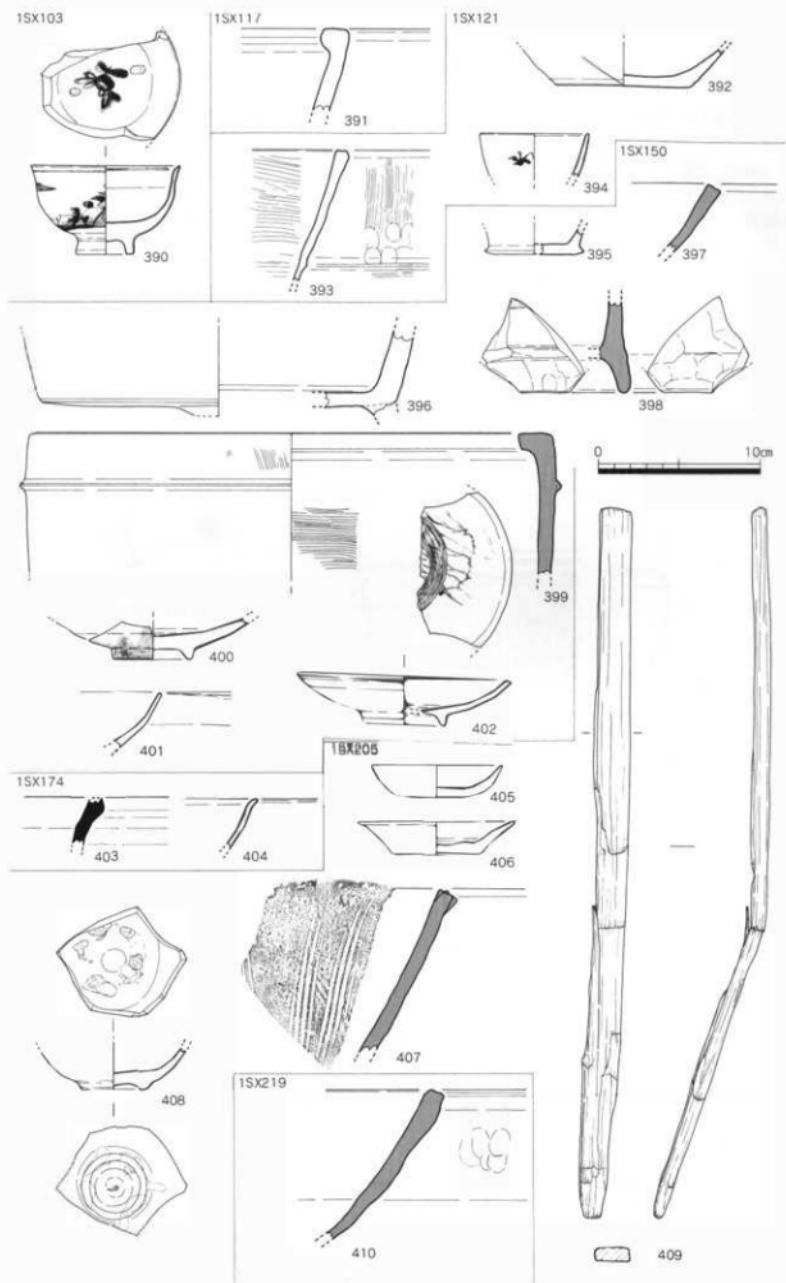


Fig.39 1SX103・117・121・150・174・205・219出土遺物実測図 (1/3)

瓦質土器

すり鉢 (407) 口縁部は片口を呈し、内面には5本単位のすり目が放射状に施される。

青磁

碗 (408) 底部破片で、胎土に砂粒を多く含む。明灰茶色の素地に明緑茶色釉を外外面に施釉する。内面見込み及び高台疊付に砂目跡を5ヶ所で認める。朝鮮系か？

木製品

不明 (409) 長さ44.8cm、幅2.2cm前後、厚さ1.0cm前後を測り、先端部は若干細くなる。途中屈折するが本来は棒状を呈していたものと思われる。

1SX219 (Fig.39, Pla.49)

瓦質土器

鉢 (410) 淡黒灰色を呈し、外面に煤が付着する。端部はヨコナデ、内外面はナデで、外面の一部に指頭圧痕が残る。

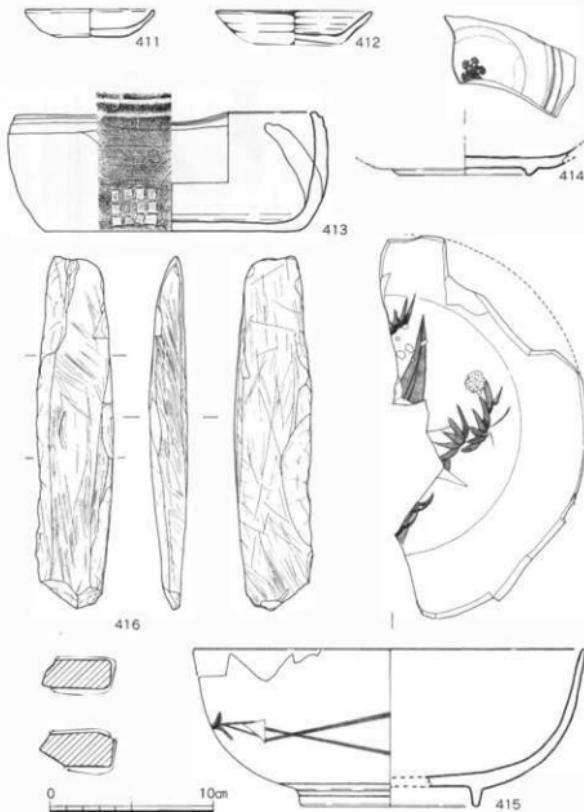


Fig.40 表土出土遺物実測図 (1/3)

表土 (Fig.40, Pla.49)

土師器

小皿 (411・412) 411は丸味を帯びた小皿で口径7.8cm、底径5.0cm、器高1.7cmを測るほぼ完形品である。明茶橙色を呈し、外底は糸切り、内外面はヨコナデを施す。一方の412は対照的に体部から口縁部にかけて大きく外反する。口径9.6cm、底径6.0cm、器高2.1cmを復原する。明白赤色を呈し、外底は糸切り、内外面はヨコナデ調整を施す。

火鉢 (413) 口径18.2cm、底径15.4cm、器高7.3cmを測る。体部の一ヶ所を内側へ大きく内湾させ、体部外面下位には装飾用と思われる格子目文が5ヶ所に押印される。口縁部に大きく黒斑が認められる。

染付

皿 (414) 底部細片で高台径8.0cmを復原する。淡白灰色の素地に淡乳灰色釉を内外面に施す。高台疊付に砂が付着し、内面見込みは蛇ノ目状に釉が搔き取られる。更に見込みには五弁花纹が施される。

陶器

鉢 (415) 口径24.0cm、高台径11.1cm、器高9.7cmを復原する。暗茶灰色の素地に明青灰色釉を高台疊付以外に施釉する。淡い呉須で見込み及び外面に文様が施される。朝妻焼。

石器

砥石 (416) 粘板岩製の砥石で表裏面及び右側面の3面を砥面として使用している。砥面には使用した際に付した細かな線刻が残る。345gを量る。



発掘作業風景

Fig No	遺物No	遺物番号	形態	名	部	寸	幅	厚	底	状況(底面)	長さ	幅(横)	厚さ(高さ)	重さ	備考
11	-001	1SF007	3	上脚部	足底		○	3.4							
11	-002	1SF007	2	上脚部	小腿	○	8.6	1.9	○	5.6					
11	-003	1SF007	5	上脚部	趾	○	11.0								
11	-004	1SF007	1	上脚部	趾				○	9.0					
11	-005	1SF007	4	上脚部	趾				○						
11	-006	1SF007	6	上脚部	火鉢										
11	-007	1SF007	7	上脚部	上鉗						2.4	3.9	4.5		
11	-008	1SF007	8	瓦質土器							3.0	0.9	9.0	一次加工品	
11	-009	1SF018	2	瓦											
11	-010	1SF018	1	瓦											
11	-011	1SF119	1	石製品	多孔性						28.8	5.0	278.0	下臼・安山岩	
11	-012	1SF042	1	鉛製品	筒形?										21.1
12	-013	1SD001	2	上脚部	上鉗										
12	-014	1SD001	3	上脚部	上鉗	○	30.4								
12	-015	1SD001	1	上脚部	火鉢	○	30.4	8.0	○	25.2					
12	-016	1SD001	4	瓦質土器	口日輪										
12	-017	1SD001	18	破砕	破片	○	5.0	3.1	○	(2.4)					17c中
12	-018	1SD001	19	破砕	破片	○	4.8	2.9	○	(2.4)					17c中
12	-019	1SD001	9	破砕	破片										17c後
12	-020	1SD001	10	破砕	破片	○	11.8								17c
12	-021	1SD001	12	白磁	碗	○	9.6								焼成・17c前
12	-022	1SD001	11	青磁	碗	○	11.0								17c
12	-023	1SD001	22	染付	進村X水注		3.3								
12	-024	1SD001	29	染付	黑				○	(14.0)					中国山陰系・16c末
12	-025	1SD001	21	染付	黑	○	15.0								
12	-026	1SD001	16	染付	黑										
12	-027	1SD001	14	染付	黑						6.0				
12	-028	1SD001	17	染付	黑	○	16.0	7.2	○	(5.0)					17c後～末
12	-029	1SD001	15	染付	紫				○	6.0					
13	-030	1SD001	8	陶器	碗	○	12.4								17c前
13	-031	1SD001	13	陶器	碗						(4.9)				17c中
13	-032	1SD001	6	陶器	すり鉢				○	11.6					焼成より
13	-033	1SD001	5	陶器	すり鉢	○	32.0								
13	-034	1SD001	7	陶器	壺	○	11.3								高坂山・17c後～?
13	-035	1SD001	23	瓦質土器	刀子	○									6.1
14	-036	1SD040	6	上脚部	足裏	○	5.6	1.4	○	4.0					保持直
14	-037	1SD040	3	上脚部	足裏	○	6.7	1.6	○	4.0					
14	-038	1SD040	5	上脚部	足裏	○	6.0	1.6	○	4.0					油煙板あり
14	-039	1SD040	1	上脚部	小瓶	○	8.6	1.9	○	6.4					
14	-040	1SD040	2	上脚部	小瓶						6.4				
14	-041	1SD040	4	上脚部	坪	○	10.2	3.0	○	5.0					油煙板あり 寸引18本半
14	-042	1SD040	7	上脚部	土瓶										
14	-043	1SD040	8	瓦質土器	すり鉢										
14	-044	1SD040	15	染付	壺	○	13.7	3.1	○	5.0					
14	-045	1SD040	13	染付	壺				○	(2.4)					高台内に「壺」銘あり
14	-046	1SD040	12	染付	壺										
14	-047	1SD040	11	陶器	壺						(4.7)				口銘あり
14	-048	1SD040	10	陶器	すり鉢										
14	-049	1SD040	9	上脚部	土瓶五						0.8				2.2
14	-050	1SD040	16	石製品	石瓶?										540.0
14	-051	1SD040	15	新鋭品	細颈										3.2 古墳木造
14	-052	1SD050	6	上脚部	足裏		6.2	1.2		4.0					
14	-053	1SD050	13	上脚部	足裏	○	5.2	1.9		3.0					
14	-054	1SD050	5	上脚部	足裏	○	6.4	1.8		4.3					
14	-055	1SD050	9	上脚部	小瓶		8.6	1.8		6.2					
14	-056	1SD050	4	上脚部	小瓶		9.0	2.2		5.5					
14	-057	1SD050	7	上脚部	小瓶		9.5	2.8		7.0					
14	-058	1SD050	10	上脚部	小瓶		9.7	2.1		7.2					
14	-059	1SD050	3	上脚部	小瓶		10.0	2.7		6.0					
14	-060	1SD050	12	上脚部	小瓶	○	10.0	2.0	○	7.0					油煙板あり 油煙板あり
14	-061	1SD050	2	上脚部	小瓶		10.0	2.1		6.0					
14	-062	1SD050	1	上脚部	小瓶		10.2	2.2		5.6					
14	-063	1SD050	8	上脚部	小瓶	○	10.4	2.4	○	7.1					
14	-064	1SD050	11	上脚部	小瓶	○	11.0	2.6	○	6.8					芯凹きあり
14	-065	1SD050	17	瓦質土器	壺										
14	-066	1SD050	15	瓦質土器	すり鉢	○	30.0								
14	-067	1SD050	16	瓦質土器	片口鉢										穿孔あり
14	-068	1SD050	14	瓦質土器	火鉢				○	14.0					
14	-069	1SD050	19	白磁	碗										高田D館
14	-070	1SD050	18	破砕	碗	○	11.4								
14	-071	1SD050	20	石製品	石盤子										37.8 片岩
15	-072	1SD060	27	上脚部	足裏		6.7	1.4		4.5					
15	-073	1SD060	28	上脚部	足裏		6.8	1.8		4.5					
15	-074	1SD060	39	上脚部	足裏		7.7	1.4		5.0					
15	-075	1SD060	22	上脚部	小瓶		9.0	2.2		5.2					
15	-076	1SD060	21	上脚部	小瓶	○	9.0	2.3	○	6.0					
15	-077	1SD060	35	上脚部	小瓶	○	9.0	2.0	○	5.6					
15	-078	1SD060	19	上脚部	小瓶	○	9.2	2.4		5.5					
15	-079	1SD060	37	上脚部	小瓶	○	9.2	2.2	○	6.0					
15	-080	1SD060	23	上脚部	小瓶		9.2	2.2		6.5					
15	-081	1SD060	1	上脚部	小瓶		9.5	2.3		5.8					
15	-082	1SD060	24	上脚部	小瓶	○	9.6	2.3	○	5.6					
15	-083	1SD060	38	上脚部	小瓶	○	9.6	2.1	○	5.6					
15	-084	1SD060	5	上脚部	小瓶		9.5	2.2		5.5					
15	-085	1SD060	34	上脚部	小瓶	○	9.6	2.2	○	5.0					
15	-086	1SD060	14	上脚部	小瓶		9.7	2.2		6.0					
15	-087	1SD060	6	上脚部	小瓶		9.5	2.2		6.0					
15	-088	1SD060	2	上脚部	小瓶		9.6	2.1		5.8					
15	-089	1SD060	4	上脚部	小瓶		9.3	1.9		6.0					
15	-090	1SD060	11	上脚部	小瓶		9.4	2.3		6.0					

Tab.3 出土遺物観察表①

Fig.№	遺物No.	遺物番号	器番号	名 称	形 状	寸 法	重 量	既往 (有無)	長さ	幅 (径)	厚さ (高さ)	量さ	備考
15 - 091	ISD060	10	[未記]	小瓶		9.7	2.1	○	6.0				
15 - 092	ISD060	15	[未記]	小瓶	○	10.0	2.1	○	6.0				
15 - 093	ISD060	20	[未記]	小瓶	○	10.0	1.9	○	6.0				
15 - 094	ISD060	33	[未記]	小瓶	○	10.0	1.9	○	6.4				
15 - 095	ISD060	32	[未記]	小瓶	○	10.0	2.2	○	6.8				
15 - 096	ISD060	16	[未記]	小瓶	○	10.0	2.1	○	6.0				
15 - 097	ISD060	8	[未記]	小瓶	○	10.0	2.4		5.8				
15 - 098	ISD060	18	[未記]	小瓶	○	10.0	2.1		6.2				
15 - 099	ISD060	9	[未記]	小瓶	○	10.0	2.3		5.8				
15 - 100	ISD060	7	[未記]	小瓶	○	10.0	2.1		6.0				
15 - 101	ISD060	36	[未記]	小瓶	○	9.7	2.3		6.0				
15 - 102	ISD060	40	[未記]	小瓶	○	10.2	2.2		5.5				治癒前あり
15 - 103	ISD060	29	[未記]	小瓶	○	10.0	2.2		6.0				
15 - 104	ISD060	13	[未記]	小瓶	○	10.2	2.3		5.8				
15 - 105	ISD060	12	[未記]	小瓶	○	10.2	3.0	○	6.4				治癒前あり
15 - 106	ISD060	17	[未記]	小瓶	○	10.5	2.2		6.2				
15 - 107	ISD060	30	[未記]	小瓶	○	11.6	2.4	○	8.0				
15 - 108	ISD060	31	[未記]	小瓶					8.5				
15 - 109	ISD060	29	[未記]	小瓶					6.5				
15 - 110	ISD060	25	[未記]	小瓶				○	7.0				
15 - 111	ISD060	26	[未記]	小瓶				○	7.6				
15 - 112	ISD060	41	[未記]	小瓶					3.3				
15 - 113	ISD060	42	[未記]	土器						2.6	3.8	8.7	
15 - 114	ISD060	44	[未記]	土器									保存前
15 - 115	ISD060	45	[未記]	土器									保存前
15 - 116	ISD060	43	[未記]	瓦片									
15 - 117	ISD060	55	[未記]	蓋?	○	28.2							
16 - 118	ISD060	58	瓦質土器	蓋	○	11.8				15.6			保存前
16 - 119	ISD060	47	瓦質土器	火鉢	○	19.4	5.3	○	11.4				保存前
16 - 120	ISD060	59	瓦質土器	すり鉢	○	31.6							下口15本単位
16 - 121	ISD060	61	瓦質土器	すり鉢					10.4				下口15本単位
16 - 122	ISD060	46	瓦質土器	火鉢									保存前
16 - 123	ISD060	60	瓦質土器	火鉢									保存前
16 - 124	ISD060	53	瓦質土器	火鉢	○	30.0							保存前
16 - 125	ISD060	54	瓦質土器	火鉢	○	23.8							
16 - 126	ISD060	57	瓦質土器	火鉢	○	37.4	13.6	○	28.4				保存前
17 - 127	ISD060	49	瓦質土器	蓋	○	11.4							保存前
17 - 128	ISD060	52	瓦質土器	蓋	○	15.2							17c
17 - 129	ISD060	48	瓦質土器	蓋	○	15.2							17c
17 - 130	ISD060	51	瓦質土器	蓋	○	15.2							
17 - 131	ISD060	50	瓦質土器	蓋						27.4			保存前
17 - 132	ISD060	56	瓦質土器	蓋?	○	32.0							保存前
17 - 133	ISD060	65	磁器	碗	○	9.6	2.8	○	14.0				
17 - 134	ISD060	63	瓦器	碗				○	5.0				
17 - 135	ISD060	64	磁器	碗				○	3.2				18c頃
17 - 136	ISD060	66	漆付	皿				○	5.2				17c
17 - 137	ISD060	62	陶器	煮?	○	21.4							
18 - 138	ISD060	70	石製品	タコ目					17.3				安山岩
18 - 139	ISD060	69	石製品	瓦礫块									265.0 大輪か?
18 - 140	ISD060	68	石製品	理									200.0
18 - 141	ISD060	67	石製品	理					5.0	0.5	0.5		15.0
18 - 142	ISD060	71	石製品	理付					21.9	0.9	0.3		2ヶ所に金屬片
18 - 143	ISD060	72	石製品	角付						2.8	3.6		金屬片付材か?
19 - 144	ISD094	1	[未記]	人型									
19 - 145	ISD094	19	[未記]	人型				○	16.0				
19 - 146	ISD094	20	破片?	粗面	○	4.8	1.8	○	11.6				18c
19 - 147	ISD094	21	破片?	皮面									粗面物 - 17c末~18c?
19 - 148	ISD094	17	染付	粗面	○	7.2							18c
19 - 149	ISD094	16	染付	粗面	○	7.2	3.4	(2.6)					18c前~中・色絵付・櫛目網
19 - 150	ISD094	22	染付	蓋						5.2			18c後
19 - 151	ISD094	18	染付	圓									
19 - 152	ISD094	14	染付	圓					14.0				高台内に「福」跡あり
19 - 153	ISD094	15	染付	圓	○	9.2	5.1	○	14.0				
19 - 154	ISD094	13	染付	圓	○	10.0							18c前
19 - 155	ISD094	12	染付	圓				○	14.0				くろむかわ圓・18c~中
19 - 156	ISD094	10	陶器	圓	○	9.6	4.6	○	13.2				
19 - 157	ISD094	9	陶器	圓	○	9.8	5.1	○	14.2				
19 - 158	ISD094	6	陶器	火入				○	10.0				
19 - 159	ISD094	11	陶器	鉢	○	23.8							
19 - 160	ISD094	7	陶器	鉢?				○	8.2				16c末~17c初・既形系
19 - 161	ISD094	5	陶器	すり鉢	○	31.2	12.2	○	8.4				すり口12本単位
19 - 162	ISD094	8	陶器	土瓶									穿孔3ヶ所
20 - 163	ISD094	3	瓦	瓦									
20 - 164	ISD094	4	瓦	瓦									
20 - 165	ISD094	2	瓦	瓦									
20 - 166	ISD094	23	石製品	砾石									163.5 49個
20 - 167	ISD094	24	石製品	砾石									151.7 49個
21 - 168	ISD116	1	[未記]	豆皿	○	7.0	1.6	○	5.2				
21 - 169	ISD118	1	陶器	すり鉢	○	32.0							
21 - 170	ISD120	1	[未記]	陶器	碗	○							3.3 0.9 13.7 二次加工品
21 - 171	ISD120	4	染付	粗面	○	4.8							
21 - 172	ISD120	20	染付	碗	○								17c?
21 - 173	ISD120	2	陶器	水注	○								
21 - 174	ISD120	5	石製品	さき口	○	9.4			30.6	7.8	972.5		土手・魔界石
21 - 175	ISD192	1	瓦	瓦									
21 - 176	ISD192	2	[未記]	上部									4.4
22 - 177	ISE100	3	[未記]	片	○	11.4	2.7	○	7.0				
22 - 178	ISE100	4	[未記]	片	○	13.2	3.3	○	8.8				
22 - 179	ISE100	2	[未記]	片	○	14.0	2.7	○	9.0				
22 - 180	ISE100	1	[未記]	片	○	14.0	3.1	○	9.0				

Tab.4 出土遺物観察表②

出土番号	出土地点	遺物番号	形態	形	理	形	理	被覆(高台付)	直立	倒伏(立)	埋立(直立)	直立	後方・側面			備考	
													直立	倒伏	直立		
22 - 181	ISE109	6	上部器	丁字脚					○	12.0							保存用
22 - 182	ISE109	5	上部器	丁字脚					○								保存用
22 - 183	ISE109	7	上部器	脚	○	17.0											2穴空2脚付空孔・木釘跡か?
22 - 184	ISE109	8	木製品	板材													保存用
22 - 185	ISE109	1	上部器	土鍋		43.5											保存用
22 - 186	ISE109	1	上部器	土鍋		12.8	2.3	7.6									2穴空2脚付空孔・木釘跡か?
22 - 187	ISE109	1	上部器	片	○	27.8											保存用
22 - 188	ISE109	3	上部器	火鉢	○												保存用
22 - 189	ISE109	2	上部器	土鍋													保存用
22 - 190	ISE109	5	从属土器	茶釜	○	15.0											保存用
22 - 191	ISE109	4	从属土器	茶釜													保存用
22 - 192	ISE109	6	从属土器	茶釜													保存用
23 - 193	ISE110	28	上部器	小鉢		6.4	1.3	5.0									
23 - 194	ISE110	20	上部器	小鉢	○	6.8	1.8	○	5.0								
23 - 195	ISE110	27	上部器	小鉢	○	7.0	1.7	○	5.6								
23 - 196	ISE110	25	上部器	小鉢	○	7.6	2.2	○	3.8								
23 - 197	ISE110	24	上部器	小鉢	○	7.6	1.8	○	5.4								
23 - 198	ISE110	22	上部器	小鉢	○	8.0	1.8	○	6.0								
23 - 199	ISE110	26	上部器	小鉢	○	8.0	2.0	○	6.0								
23 - 200	ISE110	23	上部器	小鉢	○	8.4	1.8	○	6.0								
23 - 201	ISE110	21	上部器	小鉢	○	9.0	1.6	○	6.0								
23 - 202	ISE110	14	上部器	片	○	10.4	2.5	○	8.0								
23 - 203	ISE110	18	上部器	片	○	11.0	2.7	○	7.8								
23 - 204	ISE110	17	上部器	片	○	11.0	2.9	○	7.2								
23 - 205	ISE110	4	上部器	片	○	11.0	2.7	○	7.6								
23 - 206	ISE110	5	上部器	片		11.2	2.2	○	8.9								
23 - 207	ISE110	1	上部器	片		11.3	2.5	○	7.6								保存用
23 - 208	ISE110	3	上部器	片	○	11.4	2.7	○	8.4								保存用
23 - 209	ISE110	5	上部器	片	○	11.4	2.4	○	8.5								保存用
23 - 210	ISE110	2	上部器	片	○	11.6	2.5	○	6.6								
23 - 211	ISE110	9	上部器	片					○	7.8							
23 - 212	ISE110	11	上部器	片	○	12.0	2.6	○	8.0								
23 - 213	ISE110	7	上部器	片	○	12.4	3.3	○	8.0								
23 - 214	ISE110	8	上部器	片	○	13.0	2.6	○	9.0								
23 - 215	ISE110	12	上部器	片	○	13.0	2.5	○	8.6								
23 - 216	ISE110	15	上部器	片	○	13.0	2.5	○	8.0								
23 - 217	ISE110	13	上部器	片					○	6.0							
23 - 218	ISE110	10	上部器	片					○	7.6							保存用
23 - 219	ISE110	16	上部器	片					○	9.0							
23 - 220	ISE110	19	上部器	片					○	11.0							
23 - 221	ISE110	41	从属土器	寸引鉢	○	27.2											穿孔あり
23 - 222	ISE110	43	从属土器	寸引鉢	○	30.0	13.0	○	11.0								寸引目付本单位
23 - 223	ISE110	42	上部器	寸引鉢	○	31.6											寸引目付本单位
23 - 224	ISE110	35	上部器	寸引鉢					○	13.4							寸引目付本单位
23 - 225	ISE110	40	上部器	片引り鉢	○	31.4											
23 - 226	ISE110	33	上部器	茶釜	○	13.2											保存用
23 - 227	ISE110	29	上部器	茶釜	○	14.0											保存用
23 - 228	ISE110	32	上部器	茶釜	○	15.8											保存用
24 - 229	ISE110	34	上部器	茶釜													
24 - 230	ISE110	31	上部器	茶釜													保存用
24 - 231	ISE110	30	瓦質土器	茶釜													保存用
25 - 232	ISK110	44	上部器	土鍋	○	27.6											保存用
25 - 233	ISK110	39	上部器	土鍋	○	38.7											
25 - 234	ISK110	36	瓦質土器	寸引鉢					○	10.0							寸引目付本单位
25 - 235	ISK110	37	瓦質土器	火鉢					○	13.6							寸引付
25 - 236	ISK110	38	瓦質土器	圓					○	14.0							
25 - 237	ISK110	47	石製品	火鉢							30.0	8.1	1665.0	上臼・安山岩			
25 - 238	ISK110	45	石製品	火鉢							31.0	8.0		上臼・砂岩			
25 - 239	ISK110	46	石製品	火鉢							30.0	5.7	1645.0	上臼・安山岩			
25 - 240	ISK110	48	石製品	火鉢							30.6	8.6	720.0	下臼・砂岩			
26 - 241	ISK140	1	上部器	片					○	7.6							保存用
26 - 242	ISK140	2	上部器	片	○	12.0	3.3	○	8.0								保存用
26 - 243	ISK140	3	上部器	片													
26 - 244	ISK140	4	木製品	板													
27 - 245	ISK010	1	上部器	手形	○	14.0	3.5	○	15.4								17c付?
27 - 246	ISK010	2	上部器	手形							7.0						17c付・武藏
27 - 247	ISK010	1~N	上部器	手形							5.2						17c付・北埼?
27 - 248	ISK010	1	上部器	手形							11.3						17c付・日本あり・手引目付・安山岩
27 - 249	ISK010	3	石製品	手形							7.0	2.9	28.4				
27 - 250	ISK010	4	石製品	手形							29.4	9.0					手引目付本单位・安山岩
28 - 251	ISK015	1	上部器	大甕	○	50.0	106.0		38.0								
28 - 252	ISK015	3	上部器	平瓦													
28 - 253	ISK015	4	上部器	平瓦													
28 - 254	ISK015	2	瓦	平瓦													
28 - 255	ISK015	5	瓦	瓦砾													
29 - 256	ISK020	2	上部器	大甕													
29 - 257	ISK020	1	上部器	大甕													
29 - 258	ISK020	5	瓦質土器	施炉													穿孔あり
29 - 259	ISK020	3	上部器	平瓦													
29 - 260	ISK020	4	瓦	瓦													
29 - 261	ISK020/N	1	脚製品	脚鉄													
29 - 262	ISK020/N	2	木製品	板材													
29 - 263	ISK022	1	上部器	小皿	○	9.2	2.0	○	5.0								
29 - 264	ISK025	1	上部器	大甕	○	41.0											
30 - 265	ISK025	2	瓦製品	差	○	10.0	3.0										16c付?
30 - 266	ISK025	3	瓦製品	脚鉄													新見水道置・裏面に「久」
30 - 267	ISK025V	2	瓦製品	圓													色絵付・開口系・17c木
30 - 268	ISK025V	1	脚製品	七輪	○	9.0	9.5		6.3								保存用
30 - 269	ISK025V	3	脚製品	瓦様?	○	5.0	1.0	○	3.6								14.4
30 - 270	ISK025V	3	上部器	平瓦													

Tab.5 出土遺物観察表③

Pig.No.	遺物番号	遺物名	分類	名前	口	底	腹	側	高さ(厘米)	長さ(厘米)	幅(厘米)	厚さ(毫米)	重さ	備考
30	- 271	ISK0253A	4	土器	甕									
30	- 272	ISK0253A	2	土器	大甕									
30	- 273	ISK0253M	1	土器	大甕				38.4					
30	- 274	ISK0253M	5	磁器	甕		9.8	5.3	(3.2)					色褪け・開口部・17c末
30	- 275	ISK0253A	6	瓦										
30	- 276	ISK0253A	7	石器	圓					7.5	1.7	140.1		
31	- 277	ISK028	1	土器	すり鉢									5.8
31	- 278	ISK028	2	土器	口鉢									
31	- 279	ISK028	3	陶器	すり鉢	○	26.2	9.5	9.3					寸目10本単位・日経あり
31	- 280	ISK030X	1	磁器	鉢	○	20.5							輪花
31	- 281	ISK049	1	土器	小甕	○	7.6	1.7	4.9					
31	- 282	ISK049	2	土器	瓶									17c後～末
31	- 283	ISK049	3	土器	瓶									10.0
31	- 284	ISK065	1	土器	小甕	○	7.8	1.5	○	5.8				17c後～末
31	- 285	ISK065	3	土器	すり鉢									油壺柄あり
31	- 286	ISK065	2	土器	瓶									保育酒
31	- 287	ISK065	4	土器	瓶	○	14.0							17c後
31	- 288	ISK065	5	陶器	瓶									新規名通書・裏面に「火」
31	- 289	ISK066	1	瓦質土器	瓶									
31	- 290	ISK066	2	陶器	瓶				5.4					引付手・17c中
31	- 291	ISK066	3	木製	柱					22.9	9.0			
32	- 292	ISK068	1	土器	小甕	○	9.0	2.3	○	5.0				
32	- 293	ISK068	2	土器	甕									
32	- 294	ISK068	3	陶器	瓶	○	29.6							
32	- 295	ISK068	4	具	丸瓦									
32	- 296	ISK068	5	具	丸瓦									
32	- 297	ISK068	7	木製品	板材									298と同一個体か?
32	- 298	ISK068	6	木製品	板材									297と同一個体か?
32	- 299	ISK070	1	染付	瓶									17c後～末
32	- 300	ISK070H	1	木製品	角材					13.6	2.8	2.0		
33	- 301	ISK077	1	土器	片	○	12.2	2.8	○	8.0				
33	- 302	ISK077	2	土器	鉢									保付手
33	- 303	ISK077	3	土器	火鉢									
33	- 304	ISK077	4	瓦質土器	甕									
33	- 305	ISK077	5	具	軒平瓦									
33	- 306	ISK084	1	具	平瓦									
33	- 307	ISK113	1	染付	瓶									くらわんか瓶・18c中～後
33	- 308	ISK194	1	染付	瓶	○	12.0							「火印」其あり
33	- 309	ISK202	1	土器	土鍋									
33	- 310	ISK202	2	瓦質土器	土鍋									
33	- 311	ISK202	5	磁器	瓶	○	12.0							18c前
33	- 312	ISK202	4	陶器	瓶	○	7.8							18c前
33	- 313	ISK202	3	陶器	瓶									iBe標準
33	- 314	ISK202	6	土器	不明									
33	- 315	ISK202	7	土器	不明									
34	- 316	ISK211	1	土器	甕	○	13.0	2.3	○	7.9				
34	- 317	ISK211	2	白磁	瓶									6.0
34	- 318	ISK211	3	青磁	瓶									6.0
34	- 319	ISK215	2	土器	不明									
34	- 320	ISK215	3	土器	不明									
34	- 321	ISK215	1	土器	不明									
34	- 322	ISK218	1	瓦質土器	鉢									
34	- 323	ISK218	3	瓦質土器	十手瓦									保付手
34	- 324	ISK218	5	陶器	片	○	8.0							
35	- 325	ISP002	2	土器	灯明座									
35	- 326	ISP002	1	土器	小甕	○	7.0							
35	- 327	ISP002	3	瓦質土器	瓶									
35	- 328	ISP002	4	染付	瓶	○	14.8							17c後
35	- 329	ISP009	1	陶器	不明					3.7		5.9		
35	- 330	ISP014	1	染付	瓶									くらわんか瓶・18c中～後
35	- 331	ISP017	1	染付	瓶	○	14.6							見込みに百合花文
35	- 332	ISP017	2	石器	砾石					12.2	5.8			配石または砂利
35	- 333	ISP024	1	土器	片	○	11.6	2.5	○	7.0				
35	- 334	ISP024	2	土器	土鍋									保付手
35	- 335	ISP024	3	石器	枝状片(火葬骨)					3.2	1.1	0.4	3.7	
35	- 336	ISP026	1	土器	土鍋									
35	- 337	ISP027	1	土器	平底									
35	- 338	ISP041	1	土器	不明	○	6.0							
35	- 339	ISP041	2	土器	小瓶									
35	- 340	ISP041	3	土器	砾石					2.0	0.9	3.4		穴打あり
35	- 341	ISP041	4	石器	砾石									305.0 天井座妙音
35	- 342	ISP043	1	土器	小瓶	○	9.0	1.7	○	5.7				油壺柄あり
35	- 343	ISP044	1	土器	中瓶	○	9.6							
35	- 344	ISP044	2	土器	土鍋									
35	- 345	ISP044	3	青磁	片	○	11.6							
35	- 346	ISP047	1	土器	土鍋									
35	- 347	ISP048	3	土器	不明									27.1
35	- 348	ISP048	1	瓦質土器	瓶子					4.1	1.0	21.6		二次加工品
35	- 349	ISP048	2	瓦質土器	瓶子	4.3	1.0					18.0		二次加工品
35	- 350	ISP048	4	石器	不明									261.0 安政妙音
35	- 351	ISP048	5	陶器	瓶									3.5 新規名通書・裏面に「文」
35	- 352	ISP051	1	染付	瓶	(4.8)								17c中～後?
36	- 353	ISP051	2	陶器	玉					0.7	0.5	0.4		
36	- 354	ISP051	3	陶器	件									4.6
36	- 355	ISP053	1	陶器	すり鉢	○	30.0							
36	- 356	ISP058	1	土器	土鍋五					1.2				1.6
36	- 357	ISP062	2	石器	砾石					2.1	0.6	4.3		片割
36	- 358	ISP062	1	石器	曲子					3.3	0.8	12.9		月刊
36	- 359	ISP074	1	瓦質土器	すり鉢									
36	- 360	ISP074	2	具	平底									

Tab.6 出土遺物観察表④

[長さ～m] [幅さ～m] [○] [廻数]

Fig.No.	遺物番号	遺物名	名 称	形 状	目 標	基 本	属性	基 本	属性	基 本	属性	基 本	属性		
36	- 361	ISP075	1	上脚部	骨牙跡										
36	- 362	ISP087	1	石	砾石							36.5	起石		
36	- 363	ISP093	1	上脚部	骨子							14.3	二次加工品		
36	- 364	ISP096	1	漆付	漆			(4.4)					16.6		
36	- 365	ISP105	1	砾石	砾石							2.3	二次加工品		
36	- 366	ISP107	1	上脚部	火灼?	○	26.4					4.9			
36	- 367	ISP107	2	陶器	陶										
37	- 368	ISP130	1	石製品	牙形石							33.5	8.1		
37	- 369	ISP132	1	石製品	石錐?							1600.0	上口・安山岩		
37	- 370	ISP133	1	陶器	陶	○	46.6						17c		
37	- 371	ISP138	1	陶器	骨牙跡										
37	- 372	ISP139	2	瓦	瓦							3.4	1.1		
37	- 373	ISP143	1	上脚部	小頭	○	10.0	1.4	○	6.0					
37	- 374	ISP149	1	漆付	漆	○	5.2	1.6	○	3.7					
37	- 375	ISP153	1	上脚部	骨頭	○	6.6	1.4	○	5.2					
37	- 376	ISP157	1	鉢製品	鉢							4.0	0.4		
37	- 377	ISP161	2	瓦	瓦										
37	- 378	ISP161	1	瓦	瓦										
37	- 379	ISP162	1	上脚部	只頭	○	6.0	1.4	○	4.4					
37	- 380	ISP164	1	上脚部	骨牙跡							○	10.7		
37	- 381	ISP166	1	陶器	骨牙跡							11.3			
37	- 382	ISP184	1	瓦	瓦										
37	- 383	ISP208	1	上脚部	小頭	○	9.8	2.1	○	6.0					
37	- 384	ISP208	2	上脚部	小頭	○	8.3	2.0	○	6.2					
37	- 385	ISP208	3	上脚部	土鈎										
37	- 386	ISP212	1	牙形石	陶										
37	- 387	ISP216	1	陶製品	陶質								7.3		
38	- 388	ISP019	1	木漆	片										
38	- 389	[ISP]133	2	木漆	片							30.7	14.1		
39	- 390	ISX103	1	漆付	漆	○	9.2	5.5	○	3.5			20.0	12.8	
39	- 391	ISX117	1	上脚部	火跡									17c④	
39	- 392	ISX121	2	上脚部	能							○	6.3		
39	- 393	ISX121	1	上脚部	土跡										
39	- 394	ISX121	3	漆付	漆	○	6.8								
39	- 395	ISX150	1	上脚部	不明							○	6.2		
39	- 396	ISX150	2	上脚部	火迹							○	22.0		
39	- 397	ISX150	5	瓦	瓦										
39	- 398	ISX150	4	瓦	瓦										
39	- 399	ISX150	3	瓦	瓦										
39	- 400	ISX150	8	陶器	陶							(4.8)			
39	- 401	ISX150	7	陶器	陶									17c末～18c初	
39	- 402	ISX150	6	陶器	陶	○	13.3	3.0	○	15.1				武藏段～17c末～18c初	
39	- 403	ISX174	1	漆付漆	漆									長崎漆川系	
39	- 404	ISX174	2	漆付	漆									17c・漆付系	
39	- 405	ISX205	2	上脚部	小頭										
39	- 406	ISX205	1	上脚部	小頭	○	9.8	2.0	○	5.5				すり目5本単位	
39	- 407	ISX205	3	瓦	瓦										
39	- 408	ISX205	4	漆付	漆							14.0			
39	- 409	ISX205	5	木製品	手柄							44.5	2.2		
39	- 410	ISX219	1	瓦	瓦										
40	- 411	表1	2	上脚部	只頭	○	7.8	1.7	○	5.0					
40	- 412	表1	1	上脚部	小頭	○	9.6	2.1	○	6.0					
40	- 413	表1	3	上脚部	大頭			18.2	7.3						
40	- 414	表1	4	漆付	漆							○	68.0	くらわんか漆・18c中～後	
40	- 415	表1	5	漆付	漆	○	24.0	9.7	○	111.1				18c後・既製漆	
40	- 416	表1	6	石器	砾石									345.0	私製漆

Tab.7 出土遺物觀察表⑤

IV.まとめ

先述したとおり、当遺跡は現在の水田天満宮参道の東側に位置する。検出した遺構は出土遺物から中近世を主体とするものとわかり、その状況からは水田天満宮と関わる遺跡ではないかと想定される。そこで本題に入る前に周囲をとりまく歴史的環境について概略し、当遺跡の調査成果について振り返ることとする。

1.歴史的環境

1) 水田莊と水田天満宮

太宰府天満宮安楽寺領の莊園であった水田莊は、当初北水田莊と称された。成立年代については一般的に鎌倉時代中頃とされているが定かではない。その理由として、水田莊の初見史料に建長2年（1250）6月3日の修理少別當大島居信全所領注進状案があるが、これより以前の建仁元年（1201）11月の文書には莊名を見ないことから現段階ではこの間において成立したものと想定されている。この後しばらくすると水田莊の中心をなす水田天満宮が建立される。祭神は菅原道真公であり、社伝によると嘉祐2年（1226）に菅原為長が勅を奉じて建立したといい、もとは老松社・老松宮などと称されていた。

さて、天満宮安樂寺領を支配したのは安樂寺別当を頂点とする僧官であり、初代別当は菅原道真の孫にあたる平忠が天暦元年（947）に任命された。一族である大島氏・小島氏は預所や下司などの莊官に補任され支配することとなる。水田莊は南嶋村（水田）・北嶋村（上・下北島）・福嶋村（下車田）の3村から成り、南嶋村は現在の水田天満宮が所在する水田莊の中心地であった。3村の面積は南北朝初期の時点で200町歩であったが、留守別當大島居信高の水田移住によって領主化した以後は安樂寺内にまで發言権を持つようになった。これにより室町末期には600町歩余りの面積まで拡大された説が伝えられている。以後天満宮との関係は明治初期まで隠居地として継続している。

現在の筑後市内における安樂寺領莊園には水田莊の他に下妻莊及び長田莊があった。水田莊南部に隣接する下妻莊は永承2年（1047）、後冷泉朝に下妻莊53町1反余を安樂寺金堂料所として寄進し、延久4年（1072）に建立された同食堂の修理料所のひとつであったと伝えられる（『天満宮安樂寺草創日記』）が、『草創日記』では鎌倉中期の成立とされており、成立年代は不明である。戦国時代まで留守別當大島居家領として維持されていた。後者の長田莊は筑後市域の大字北長田付近と瀬高町大字長田一帯であったと思われ、初見史料は觀応3年（1352）2月□日安樂寺領注進状案である（成立年代は不明）。

2) 近世以降の水田町

水田町は水田天満宮が所在する水田莊本村（南嶋）を中心とし、福島往還沿いに形成された在郷町であるが、開基成立については不明である。水田町の中央を福島往還が東西に貫通し、町筋の北に堀川が西流する。この堀川に沿って東より天満宮、社僧坊には東北院・延寿王院屋敷・退転した坊跡、松林寺が並び、その西には土師師屋敷があった。境内東側には神官屋敷と光運院が所在し、西側には二重の堀と蔵に囲まれた司務別當延寿王院大島氏と太宰府天

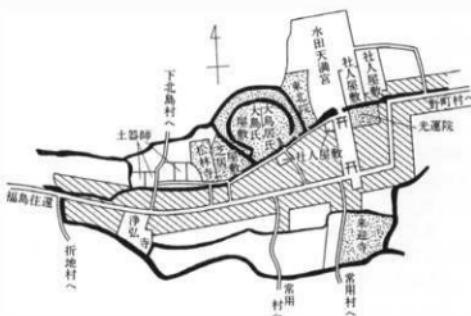


Fig.41 水田の町略図（明治八年地租改正字図から推定作成）
（「筑後市史第一巻」第204図より転写）

満宮目代大島氏の屋敷が所在した。町には水田天満宮に付属する宮大工職・鍛冶職・土師師・医師は給地、扶持米が給付されて、桶樽職・檜物職・野鍛冶職などができる。特に水田焼の前身となった土器はこの地の特産品となった。更に他の在郷町に見られる油屋・醤油屋・唐物・木綿衣料・穀物中買などの店が農家と混在し、軒を連ねていた。近代になると水田村・下妻村・二川村の合併（明治41年）により新たな水田村が誕生すると産業の発展に伴い、全国有数の和傘生産地として著名となつたが、戦後の急速な洋傘普及に伴って現在は途絶えてしまった。中世以降莊園制とともに発展してきた水田地区の町並みは現在もなおその面影を垣間見ることができる。

2.検出遺構について

今回検出した遺構は溝・掘立柱建物・井戸・土坑などがあり、中世後半から現代にかけての遺構と思われる。以下は主な遺構について今一度調査内容を振り返ってみることとする。

1) 溝

当調査区で最も古い溝はISD050・060と想定される。ISD050は調査区南部で確認した溝で平面プランはF字状を呈し、東西溝を軸に西側は南北方向へ屈曲する。北の東西溝は断面形は逆台形状、その南の東西溝は断面形V字状、連結した南北溝は緩やかなU字状を呈し、幅・深さ等の規模も異なることから用途にあわせて開削されたことが窺える。土層観察から水路として機能していたことが考えられるが、平面プランからは何らかの区画を有した溝であった可能性も考えられる。一方、ISD060は東西方向の溝を軸に途中から北方へはば垂直に分岐する溝で格子状に展開するものと思われ、当溝も先述したISD050と同様に水路及び区画溝として機能していたことが想定される溝である。先述したように当地が水田莊の中心地であったことから莊園に開闢した土地区画整備が行われた可能性も否定できない。今回出土した遺物からの埋没時期を想定するとISD050・060は共に16c後半～17c前半に比定されるが、資料の蓄積を待つて検討する必要がある。

さて、ISD060西側はISD040と切り合う部分が人為的に埋められていたことは本文中でも述べた。一般的にISD040を施工する際に不要となったISD060を人為的に埋没させる必要があったと推測できるが、意図的に石礫を混入させてまで堅固に施工させる必要があったのはなぜであろうか。その理由を探るべく、今一度関連する遺構について調査成果を振り返る。ISD040は調査区西端を南北に延びる溝であり、更にその西側では平行した南北溝ISD091・120を検出している。調査状況を振り返るとこれの溝もISD060と比較して狭小であったが溝底は極めて固くなった部分が多く、ほぼ全般的に硬化した状態で確認された。ISD040から17c後半に比定される遺物が出土しており、先述したISD060は16c後半～17c前半の埋没を比定していることから、概ね17c前半頃に施工されていることが想定される。ここで参考までに明治31年に発行された「福岡県名所図録図絵」に掲載されている水田天満神社古図(Fig.42)を紹介する。当地は古國の右下に見える二つの鳥居から挟まれた参道のほぼ中央右側にあたる場所(矢印)にあたり、建物が構築されている様子が詳細に描かれている。古図からは現在の景観により近い整備が行われていたことがわかり、この状況から推測するとISD040は建物に付設された雨落ち溝であった可能性が考えられる。

2) 建物

先に紹介した古図(Fig.42)には当地付近に数件の建物が描かれている。これに該当する建物か否かは定かではないが、今次調査で復原できた掘立柱建物はISB160の1棟のみである。東西2間(1.98~2.08m)×南北2間(2.08~2.10m)と小規模な建物であったが、柱穴からは柱痕・柱・礎盤と思われる石礫が認められるなど遺存状態が良好な状況で確認された。柱穴はISD050を切っており、また各柱穴の遺物出土状況から近世初期～中頃の建造であったと想定される。この他、ISB160以外で建物を復原することはできなかつたが、本文中でも触れたように調査区内からは柱穴と想定されるビットが多数検出された(Tab.2)。ビットからは柱痕・柱支えに使用されたと思われる礎石・柱などが認められており、その痕跡から使用されていた柱径は概ね15~20cm程度と推測される。柱穴群とともに検出された遺構に埋没され



Fig.42 水田天満宮古図
(「福岡県名所図録図絵」P18より転写し、一部改変した)

たトイレ造構4基や井戸3基がある。出土遺物においても多くの雑器や石製品が出土しており、何れも生活臭を窺うことのできるものである。この状況からもわかるように近世以降宅地として土地利用が行われていたことは確実である。更に今後の調査が待たれる。

3) 井戸

調査区内からは3基の井戸（ISE100・110・140）が検出された。何れも平面プランは円形若しくは梢円形状を呈した素掘の井戸である。このうちISE100・140について完掘したところ、井戸を形成する地山は標高5.0～5.8m位の中位層で5～10cm大の礫が混入する粘質土を認め、標高5.0m以下では5～10cm大の礫が混入する粘性砂の堆積層が認められた。このことから井戸は浅い掘削で一定の水量が得られていた状況が窺える。井戸の時期について、ISE100及びISE110ではあまり時期差のない遺物を認めていることから併存若しくは大差ない時期に埋没した可能性が考えられ、その時期を17c前葉と比定している。なお、ISE140については出土遺物が乏しいが遺物からは先の井戸とほぼ同一の年代を想定する。

3.出土遺物について

1) 出土遺物の概要

今次調査では中世後半以降を主体とする土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・金属製品・石製品・木製品など多種多量の遺物が認められた。土師器では灯明皿として使用された小皿・壺の他に生活雑器である火鉢・すり鉢・土鍋・茶釜など（瓦質土器を含む）、陶磁器では皿・碗を中心とした輸入品に加え、多種の国産品も散在的に認められた。更に金属製品では銭貨の寛永通寶や煙管・鑓・刀子など、石製品では砥石・ひき臼・五輪塔、木製品では柱・不明部材が出土した。

次に各種遺物について概要する。

灯明皿として使用された土師器小皿・皿・壺はISD040・050・060、ISE110から多く出土した。殆どが口クロ成型で水挽きされた製品で外底は糸切り痕が認められるところに共通点を見い出せたが、器形には各所で特徴が認められた。まず体部の状況であるが、①底部から口縁部にかけて若干内清気味に立ち上がるタイプと②底部から体部にかけては斜位方向へ立ち上がり、口縁部にかけては更に外反させたタイプが認められる。更に内面見込みの処理としては①平坦に仕上げたもの、②中央部が窪んだ凹面を呈し、内面の底部と体部境界で凹部を呈する2タイプが看取された。また、法量計測も試みようとしたが口クロ成型にもかかわらず水挽きされた製品であるためか、土器に大きな歪みが生じていたため今回は断念した。これとは別に出土した小皿には器形以外で口縁端部の一部を焼成後打ち抜いた痕跡も多く認められている。恐らく灯明に使用する際の芯置きとして焼成後施された痕跡であろう。

ISD060・ISE100・110からは土師器及び瓦質土器のすり鉢・火鉢・茶釜などが出土した。共伴遺物から16c以降17c前葉にかけての時期が比定される。この他、当地で開業された水田焼の一部も認められている（後述）。

輸入陶磁器には白磁（Fig.14-69）、龍泉窯系青磁（Fig.17-134・Fig.34-318・Fig.36-367）、染付（Fig.12-024）があり、国産陶磁器では関西系陶器（Fig.30-267・Fig.30-274）、高取系陶器（Fig.13-34）、現川系陶器（Fig.39-402）、朝妻系（Fig.40-415）の他に唐津系陶磁器が大半を占め、概ね17～18c代で構成される。

2) 土師質瓦と水田焼

当調査区からは土師質の瓦破片を出土した。一般的な瓦技法で製作されたものと異なる特徴を呈する瓦であり、まずはその特徴を以下に列記する。

①平瓦（Fig.15-116・Fig.28-252）

色調は淡乳茶色～灰茶褐色を呈し、端部断面形は台形状を呈する。凹面はナデまたは工具ナデ、凸面は粗い刷毛目またはナデと様々である。側面は表面からのヘラ切り込み後、工具にて面取を施す。

②平瓦（Fig.11-10・Fig.28-253・Fig.29-259・Fig.30-275・Fig.35-337・Fig.36-360）

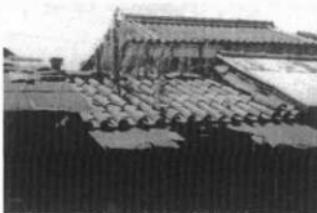
色調は淡乳橙色～赤褐色を呈し、器厚は1cm前後と通常の平瓦よりも薄手である。凹凸面はナデ、ヨコナデ、刷毛目などの調整を施し、側端部の切り離しは凸面からの切り込みの印を施した後、断面中程まで切り込みを入れる。残りは破断し、ヘラケズリで面取りを施す。

③丸瓦（Fig.33-314-315・Fig.34-319～321）

表面は淡黒茶色、芯は淡茶黄色を呈し、凸面は縱方向の粗い刷毛目、凹面は横方向の粗い刷毛目、端部はヨコナデを施す。

①はいわゆる中世雜器の土師器・大甕と類似した胎土を呈し、土器調整においても類似点を見出すことができる。また③の丸瓦においても同様の土器調整を認め、

①・③はまさに土器工人が製作した瓦であるといっても過言ではない。②については以前「若菜窯ノ本遺跡（註1）」で既に報告されているところであるが、その中で近世に繁栄した水田焼（開業については天正年間（1573～1591）に水田村に伝わったとされるが定かではない）である可能性を示唆している。筆者も今回出土した瓦を報告するにあたっては再度史料にあたってみたが、残念ながら新知見を得ることはなく現段階では未だ断定には至っていない。そこで水田焼窯元であった故人近藤竹影舎氏が「いろいろな水田焼」と題して関連深い内容を記しているので紹介しておく。



屋根の丸瓦は土管を半分にしたものである。

Fig.43 水田焼の瓦
（「水田の半田土鍋焼」P17より転写）

『(略) この水田人形と平行して生活上必要な、水田甕（肥だめ、大小便つぽ等）、ひばくちど、土鍋類、水田瓦（裏町瓦）、井戸側等が作られ、明治も年をたつにつれて土管・火消しつぼ・七輪・鉢等と、素焼きの種類もふえた。(略) 又水田瓦と称せられた赤土焼の大瓦なども頗る有名であったが、爾来時勢の推移に圧せられ今ではその瓦さへ容易に見かけることができないようになった。(略)』

水田焼は久留米藩の御用窯として幕府へ献上した半田土鍋が著名であるが、時代を経て上記のような各種土器も製作されていた様子が窺える。今回出土した遺物に先述した瓦はもとより、在地で製作されたと思われる雑器類が多く含まれていた。むろん水田焼であるか否かについては慎重に選別しなければならないが、近世に繁栄した水田焼を知る貴重な資料が得られたことは成果であった。

【参考・引用文献】

- 松崎英一 「中世」 『筑後市史第一巻』 筑後市（平成9年）
松崎英一 「下裏庄」 『福岡県百科事典上』 西日本新聞社（昭和57年）
忠良家 「水田庄」 『福岡県百科事典下』 西日本新聞社（昭和57年）
右田乙次郎 「久留米藩の成立と初期藩政」 『筑後市史第一巻』 筑後市（平成9年）
右田乙次郎 「水田の半田土鍋燒」 筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会（昭和46年）
大石昇 「三本松町道路」 『久留米市文化財調査報告書第74集』 久留米市教育委員会（1992）
大石昇 「久留米城下町 両替町道路」 『久留米市文化財調査報告書第116集』 久留米市教育委員会（1996）
山村信義 「太宰府出土の瓦質土器」 『中古世土器の基礎研究Ⅰ』 日本中世土器研究会（1990）
『別冊太陽 古伊万里』 平凡社（1988）
『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会（2000）
清水吉康・原田慈彦・紙上淳一 『福岡県名所図録図版』 大蔵出版会（昭和60年）

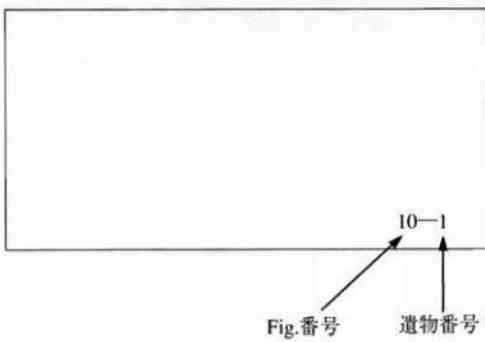
【注】

- 1.猪川真一 『筑後市内道路群V』 『筑後市文化財調査報告書第52集』 筑後市教育委員会（2003）

PLATE

凡 例

遺物の写真右下の番号は、以下のとおりである。





調査区南西部全景（反転前：西から）



調査区北部全景（反転後：西から）



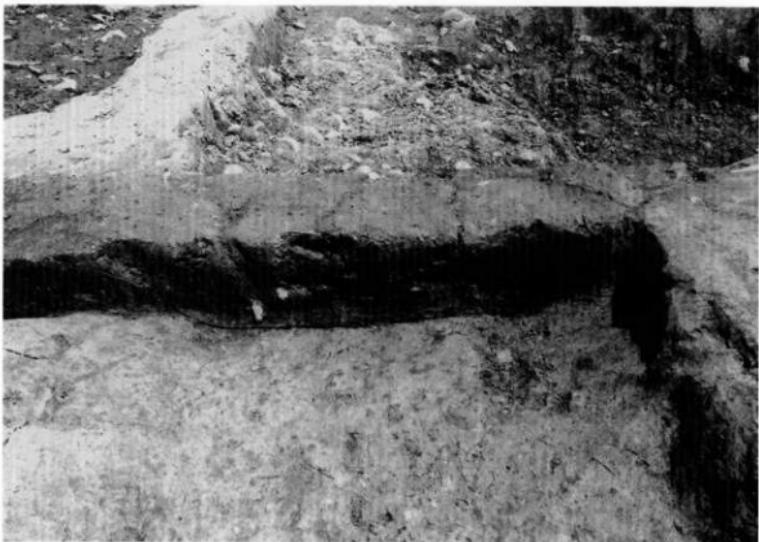
1SB160周辺完掘状況（西から）



1SD001・1SP002土層a—a'（南から）



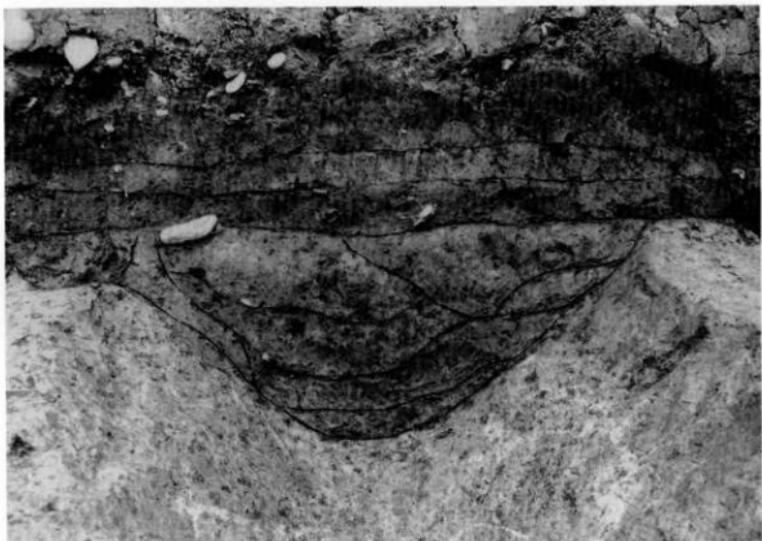
1SD040・060、1SX083土層b—b'（南から）



1SD040土層c—c'（南から）



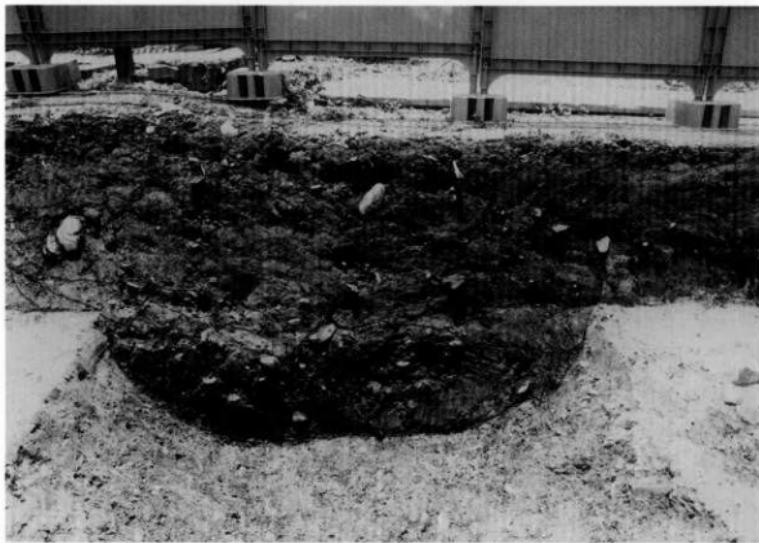
1SD040土層d—d'（南から）



1SD050土層e—e'（西から）

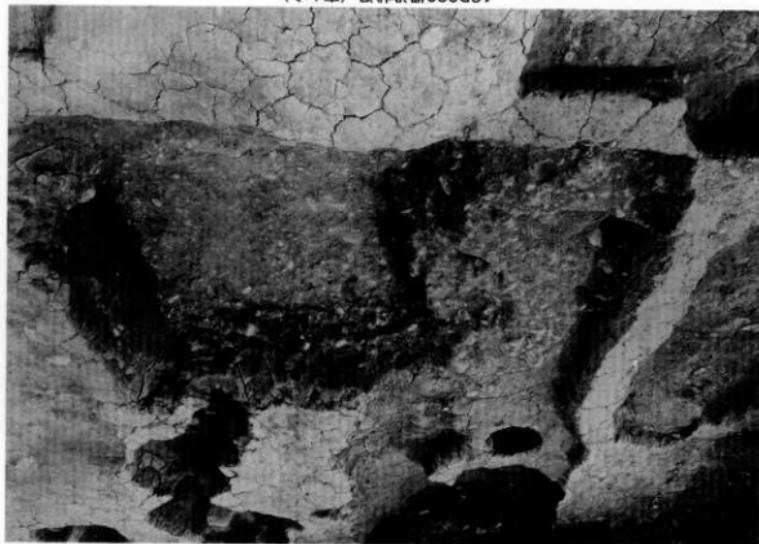


1SD050土層f-f' (西から)



1SD050土層g-g' (北から)

1SD060壁及块况(厚度5)



1SD060土壤h—h₁(厚度5)





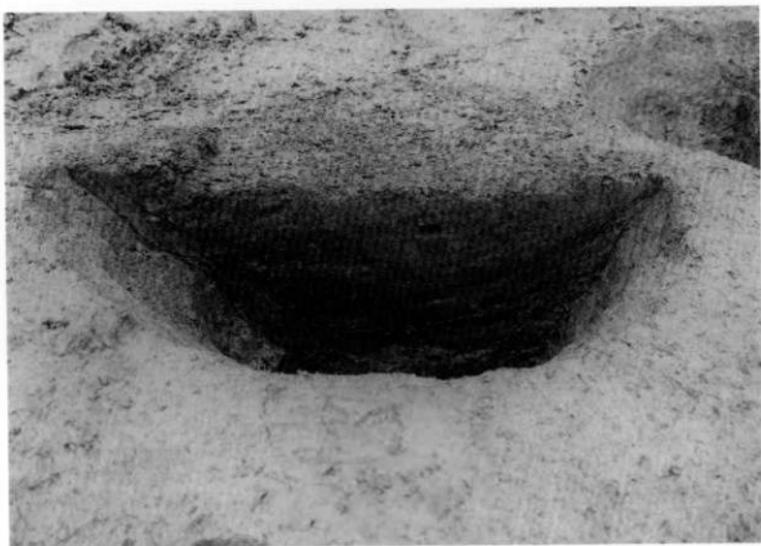
1SD091土層c—c'（南から）



1SD120土層d—d'（南から）



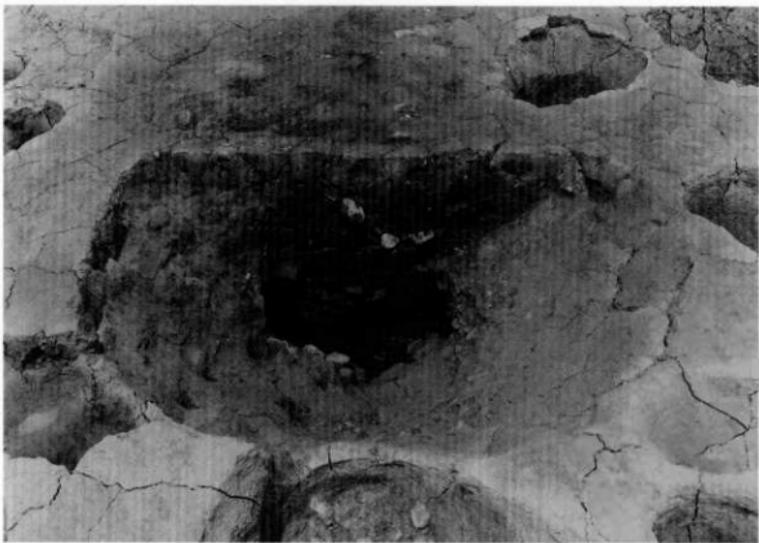
調査区北部1SD040・120完掘状況（北から）



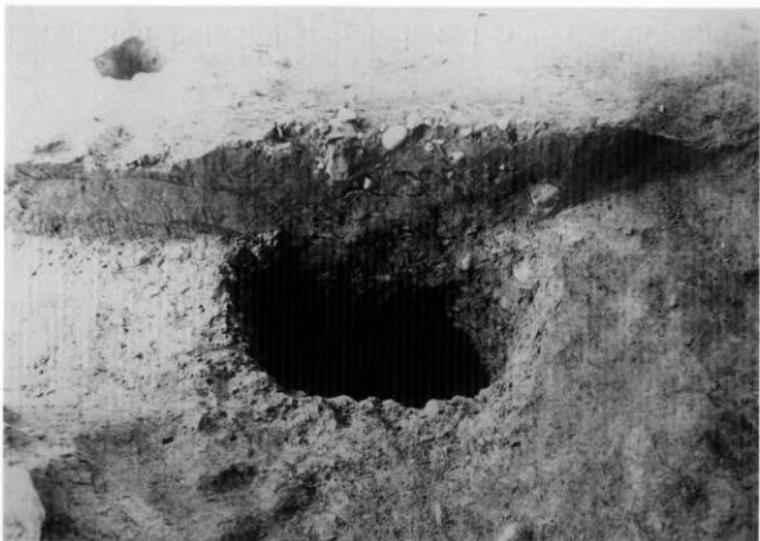
1SE100土層（東から）



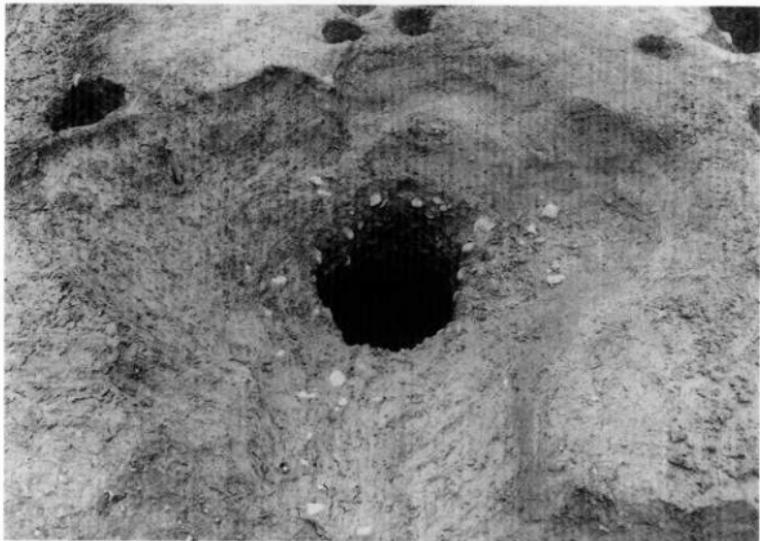
1SE100完掘状況（南西から）



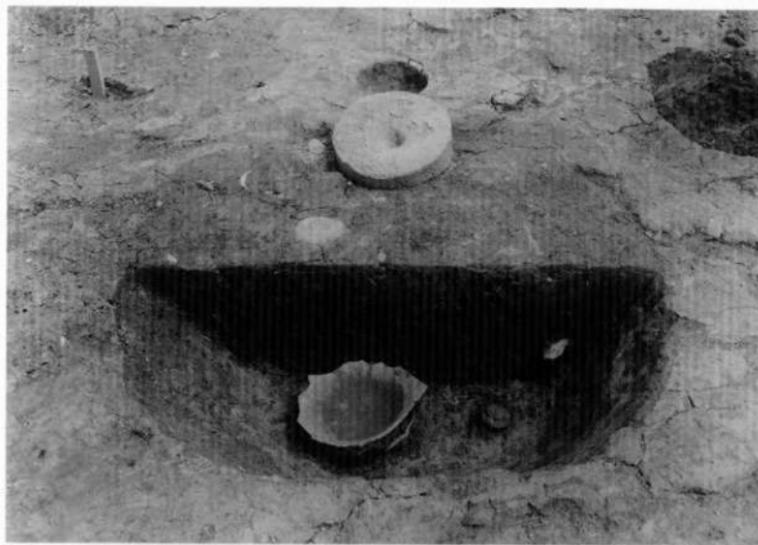
1SE110土層（東から）



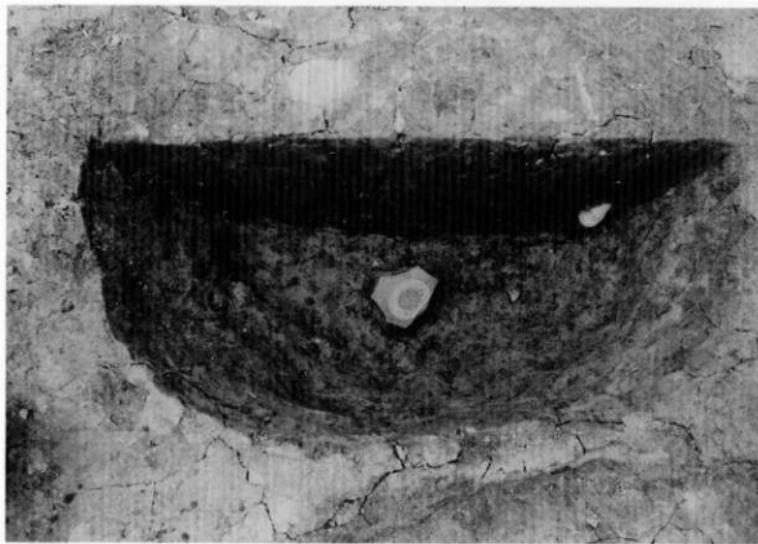
1SE140土層（東から）



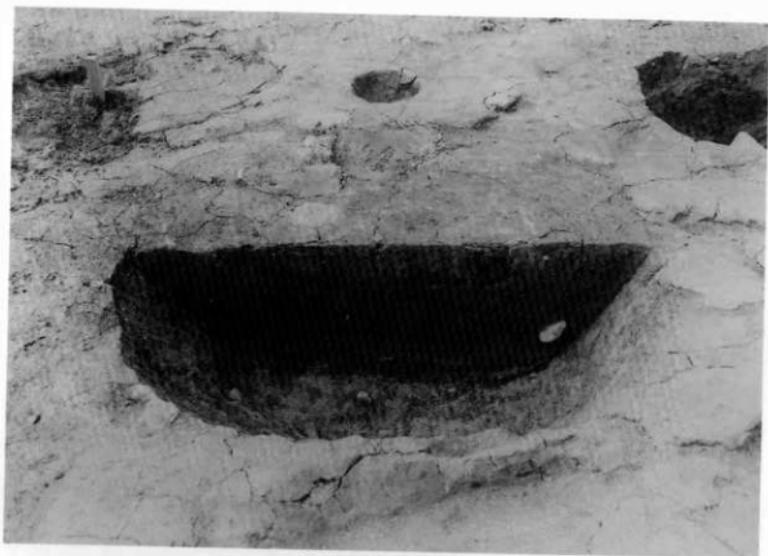
1SE140完掘状況（東から）



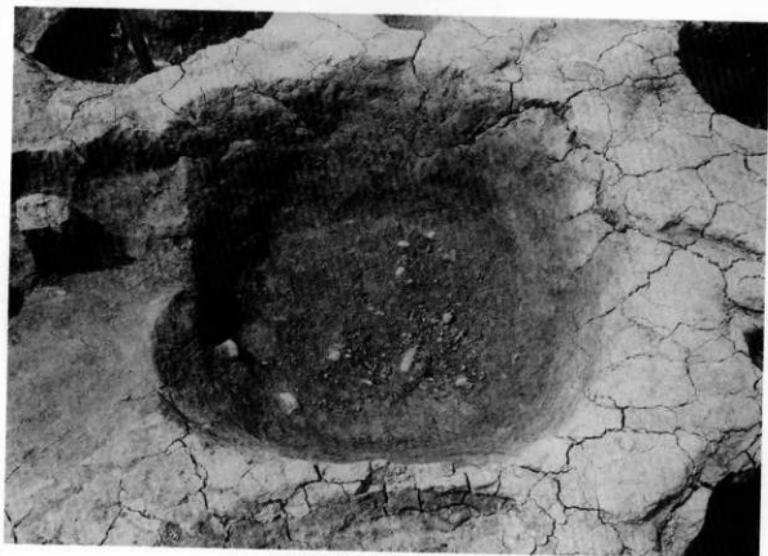
1SK010遺物出土状況①（南から）



1SK010遺物出土状況②（南から）



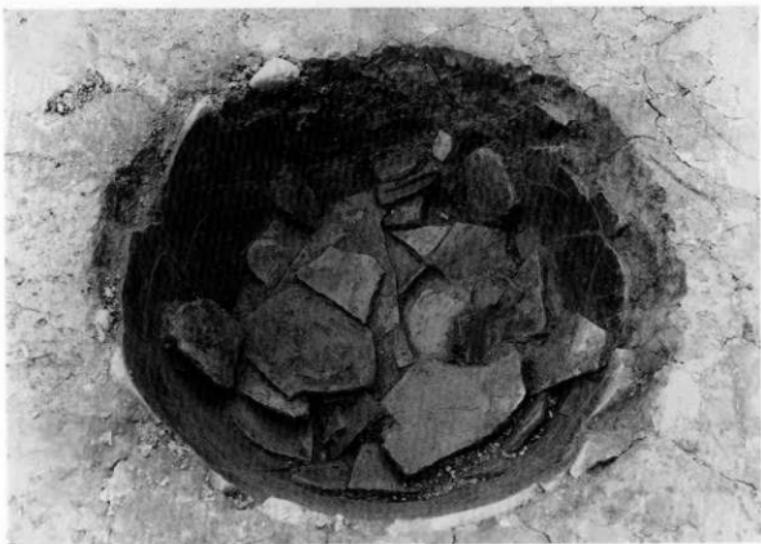
1SK010土層（南から）



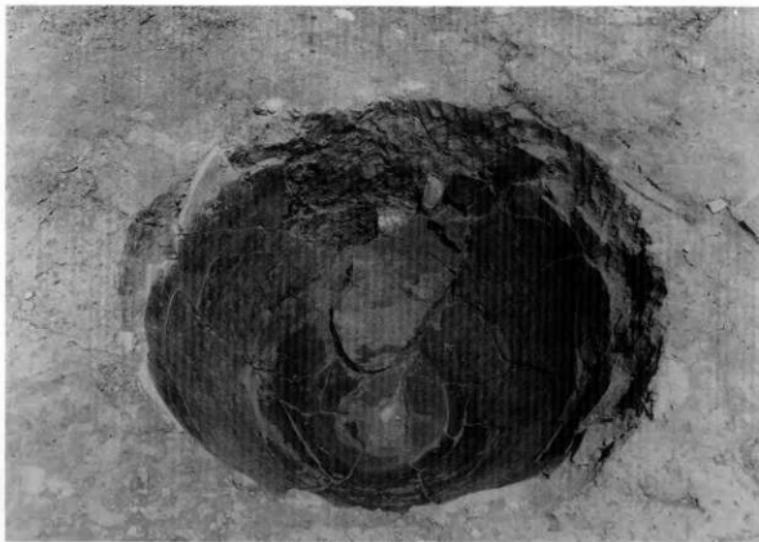
1SK010完掘状況（南から）



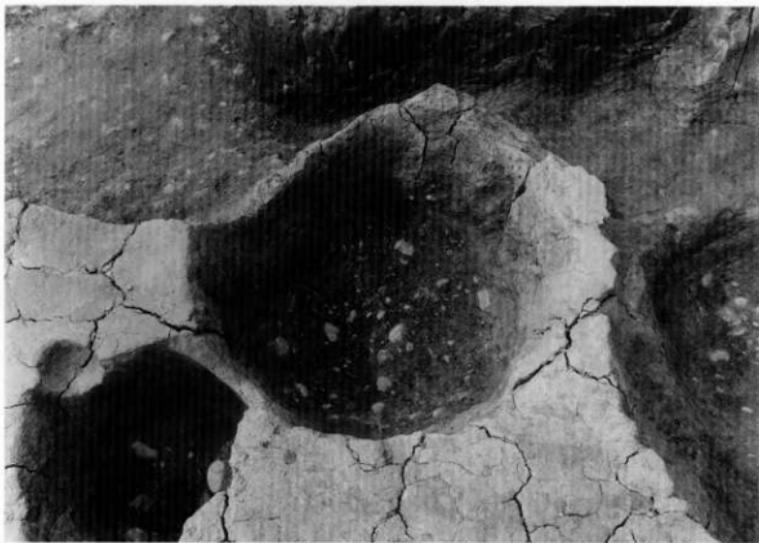
1SK015遺物出土状況①（南から）



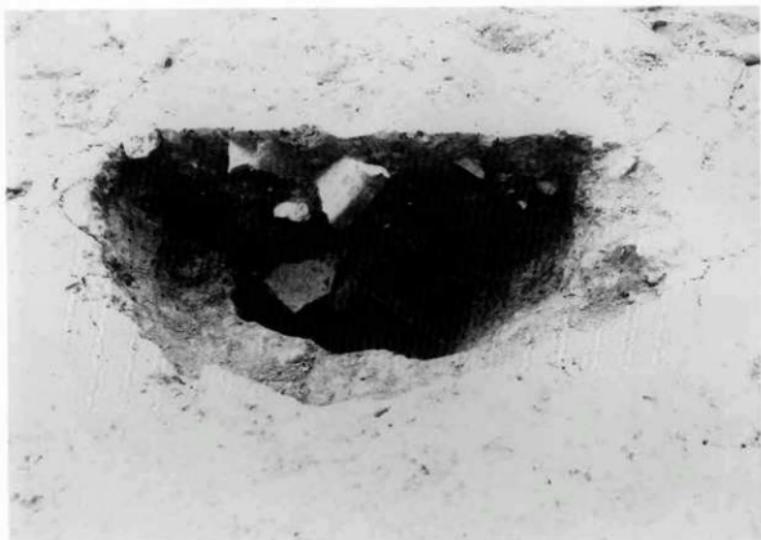
1SK015遺物出土状況②（南から）



1SK015遺物出土状況③（南から）



1SK015完掘状況（南から）



1SK020土層（東から）



1SK020遺物出土状況（北から）

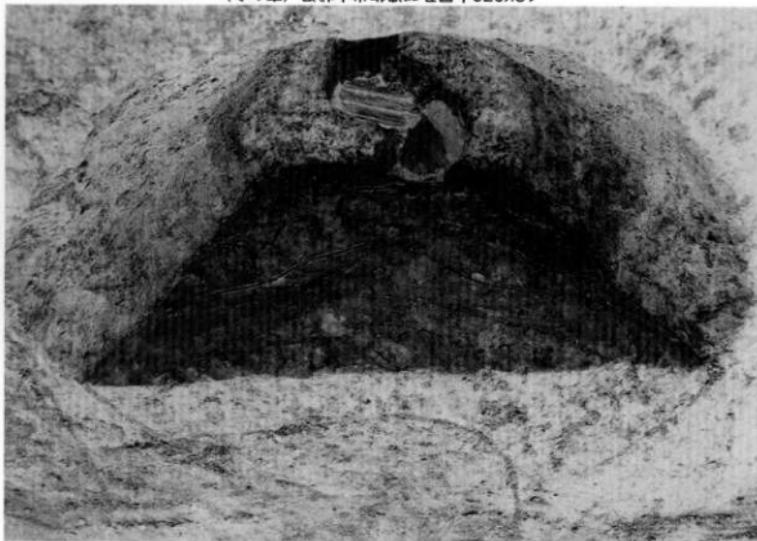


1SK025土層（東から）

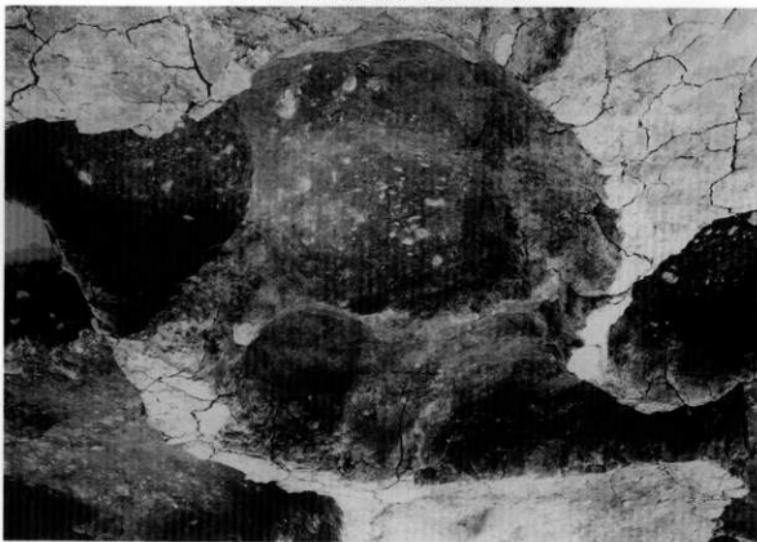


1SK030土層（東から）

1SK070土壤及可遺物出土情況 (兩面) 5



1SK020 · 025 · 030完畢狀況 (兩面) 5

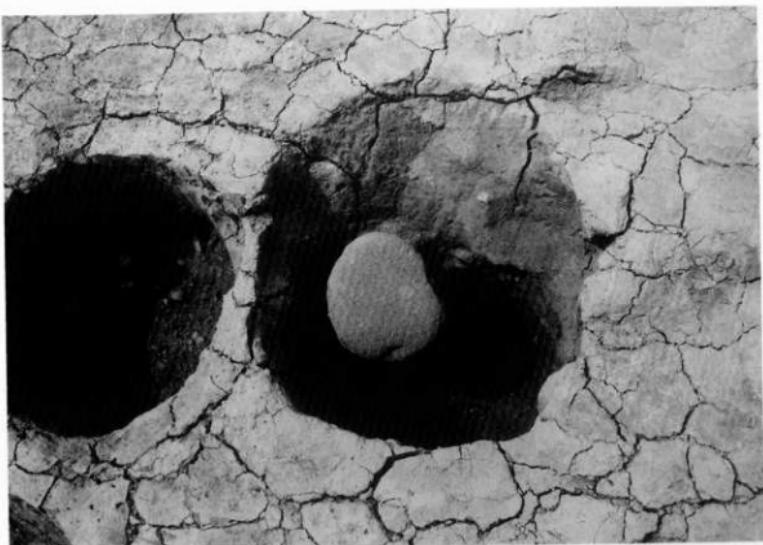




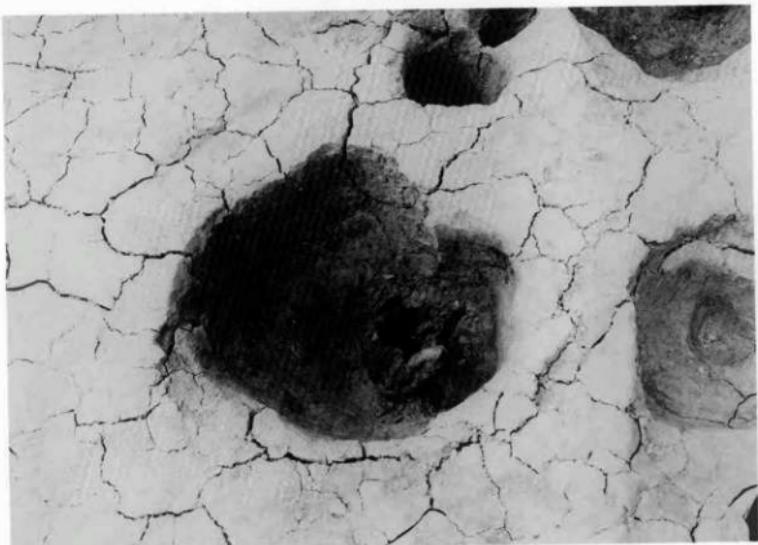
1SK070完掘状況（北西から）



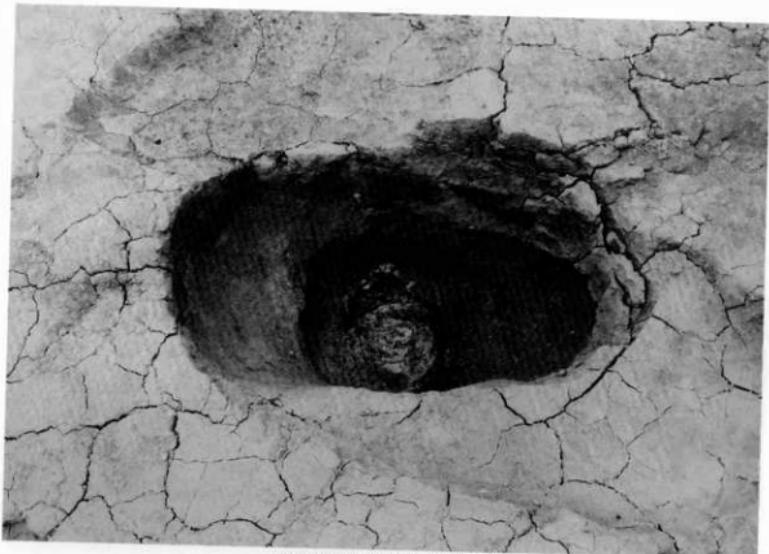
1SX150（東から）



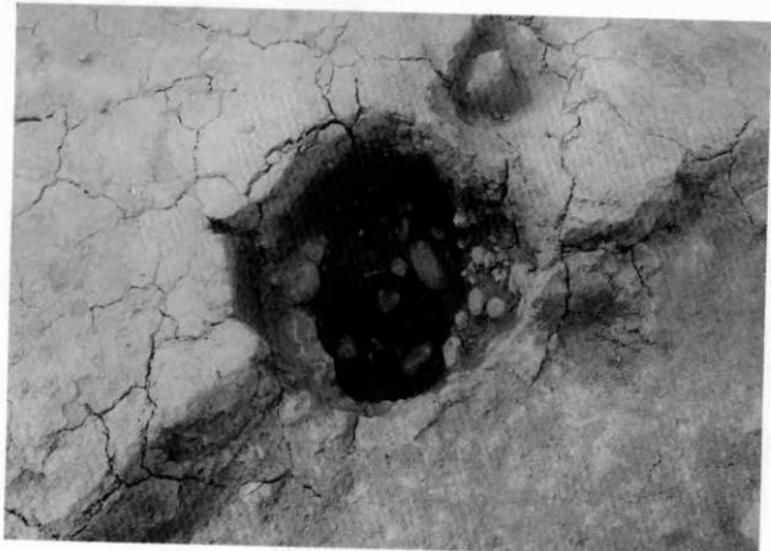
1SP005柱支え石出土状況（南から）



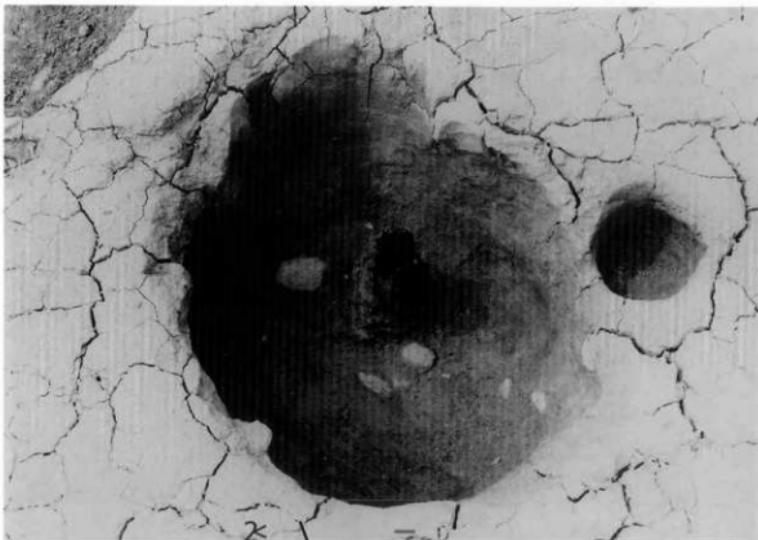
1SB160b (1SP019) 柱出土状況（南から）



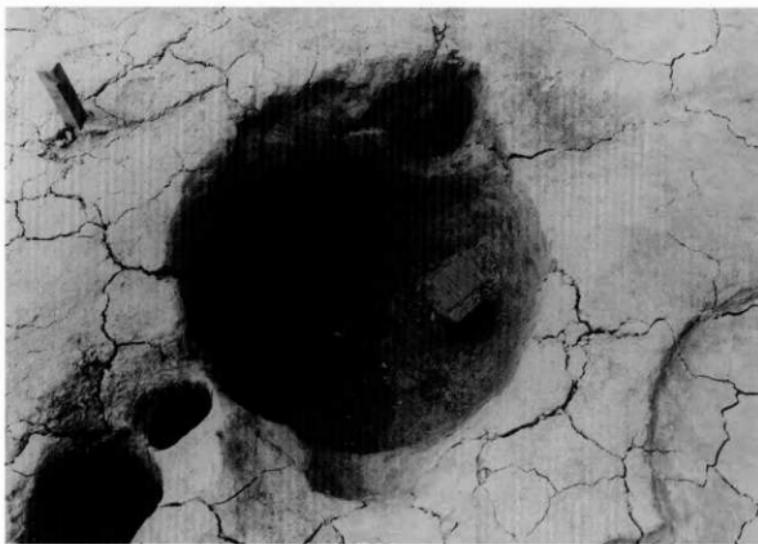
ISP022柱出土状況（南から）



ISP046完掘状況（南から）



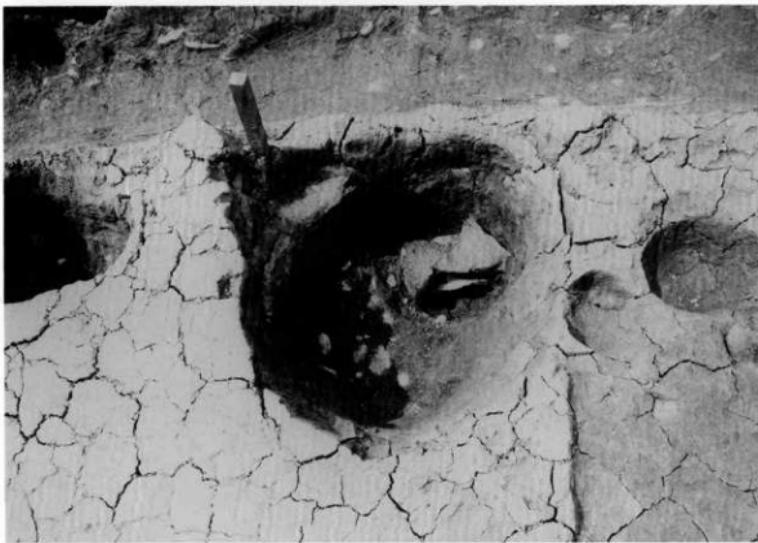
1SB160c (1SP066) 柱出土状況（南から）



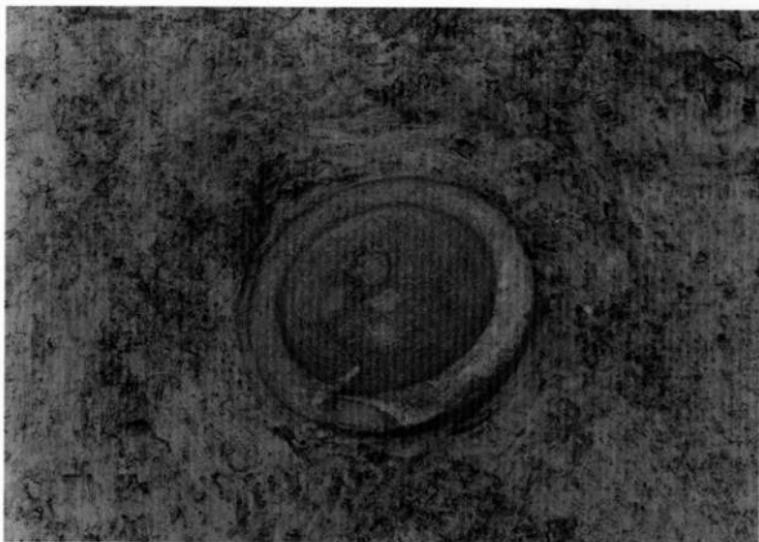
1SP068遺物出土状況（南から）



ISP080柱支え石？出土状況（南から）



ISP119（南から）



1SP130遺物出土状況（南から）



1SP133柱出土状況（南から）



11-1



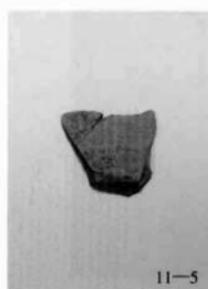
11-2



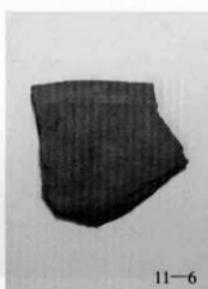
11-3



11-4



11-5



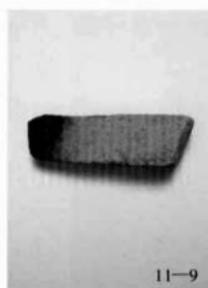
11-6



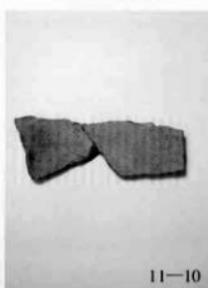
11-7



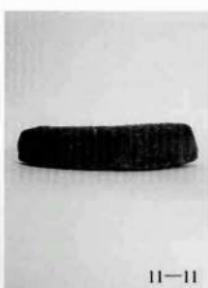
11-8



11-9



11-10



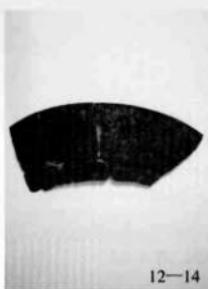
11-11



11-12



12-13



12-14



12-15



12-16



12-17



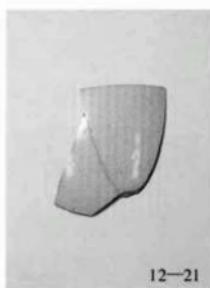
12-18



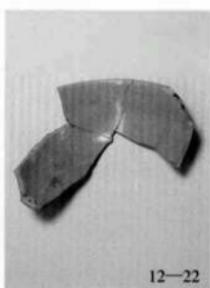
12-19



12-20



12-21



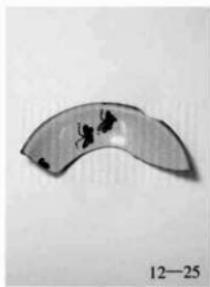
12-22



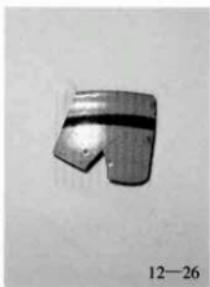
12-23



12-24



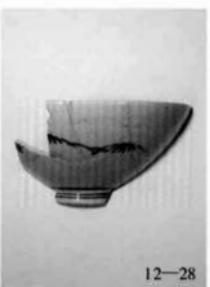
12-25



12-26



12-27



12-28



12-29



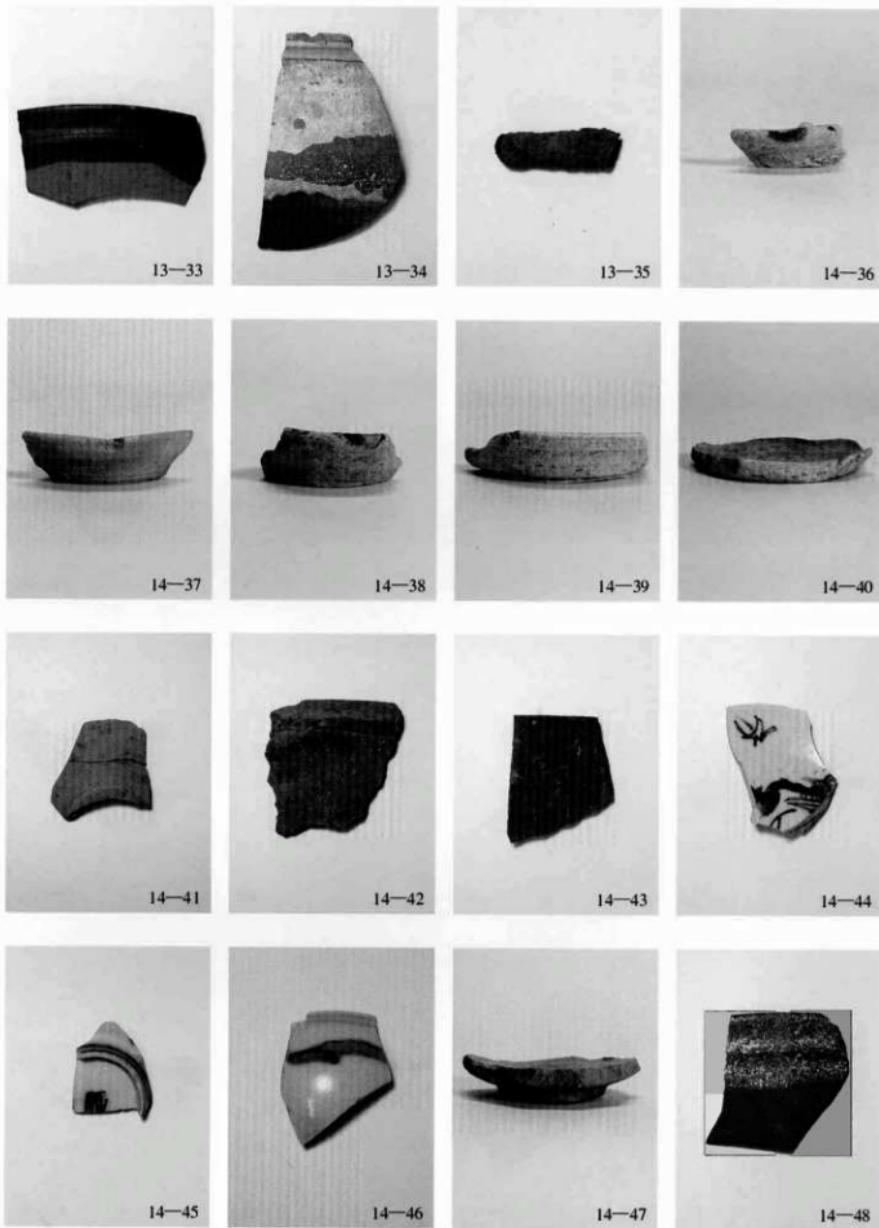
13-30

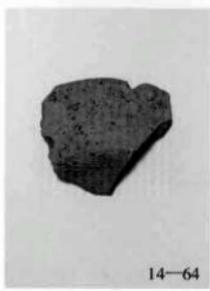
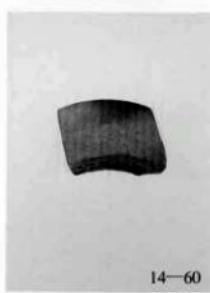
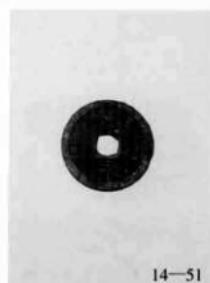
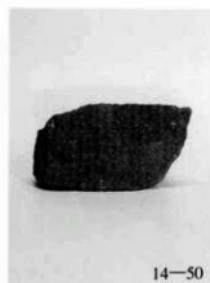


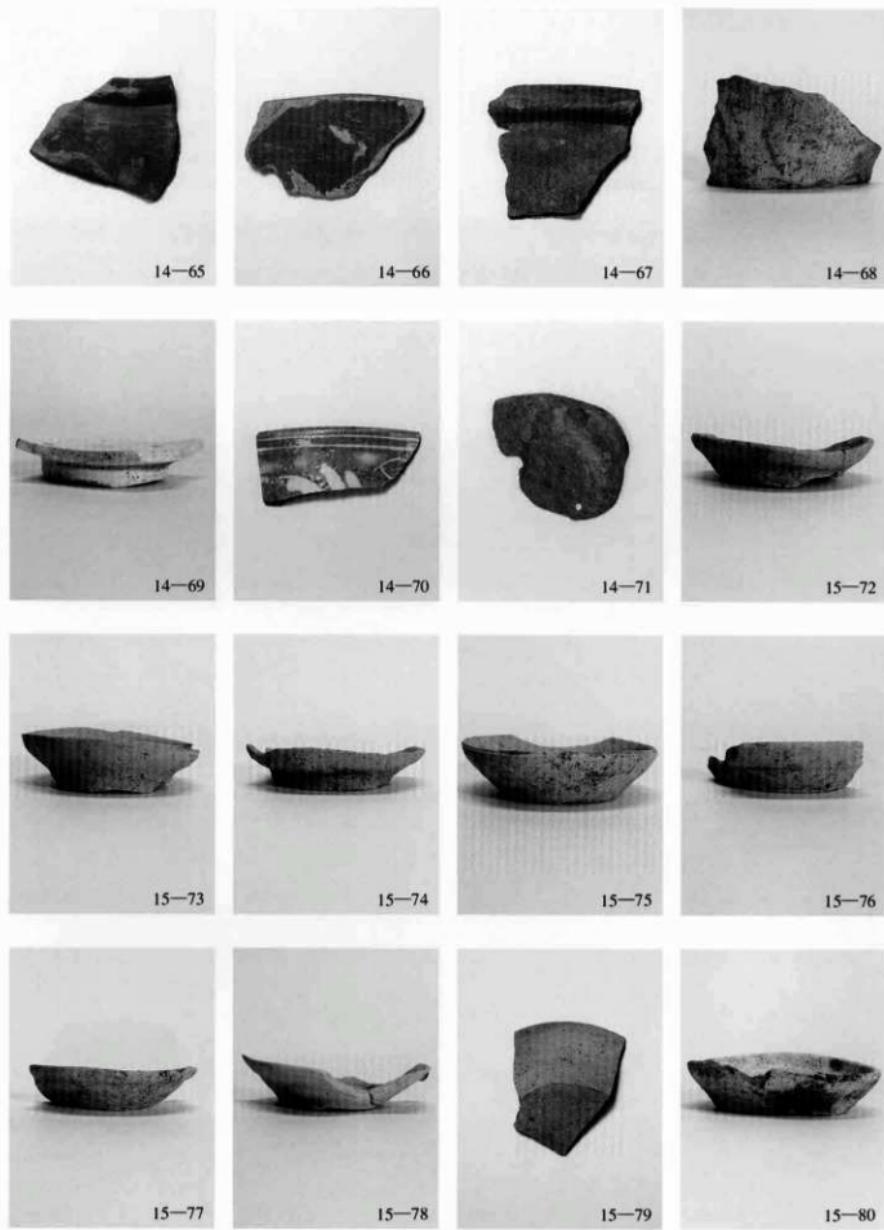
13-31



13-32









15-81



15-82



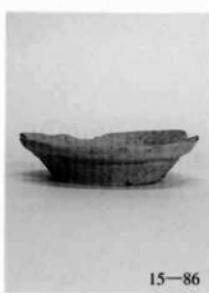
15-83



15-84



15-85



15-86



15-87



15-88



15-89



15-90



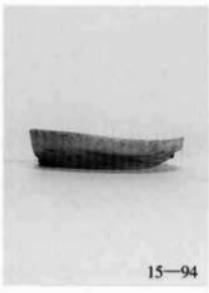
15-91



15-92



15-93



15-94



15-95



15-96



15-97



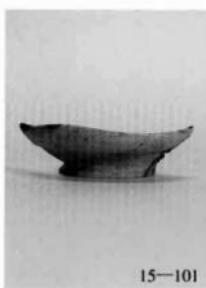
15-98



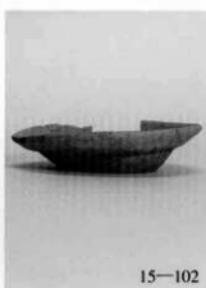
15-99



15-100



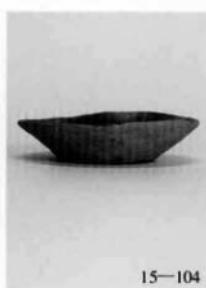
15-101



15-102



15-103



15-104



15-105



15-106



15-107



15-108



15-109



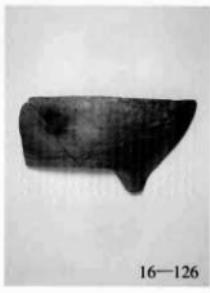
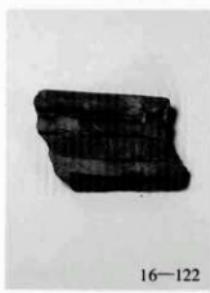
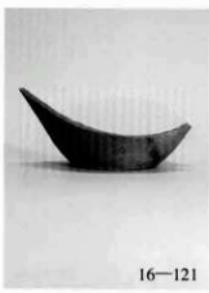
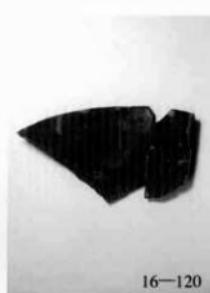
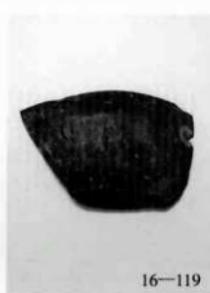
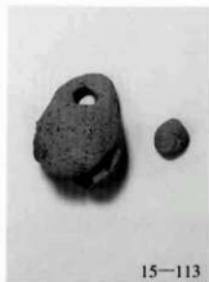
15-110

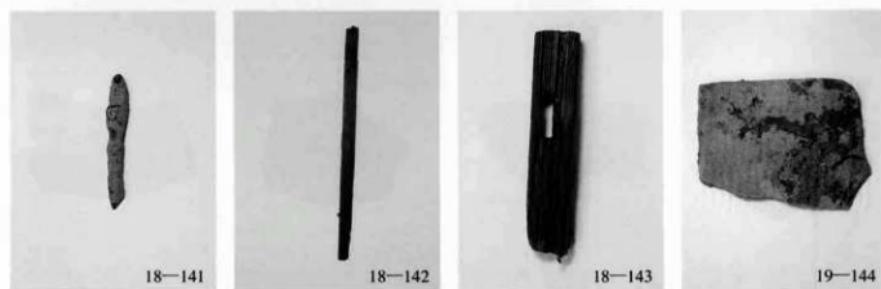
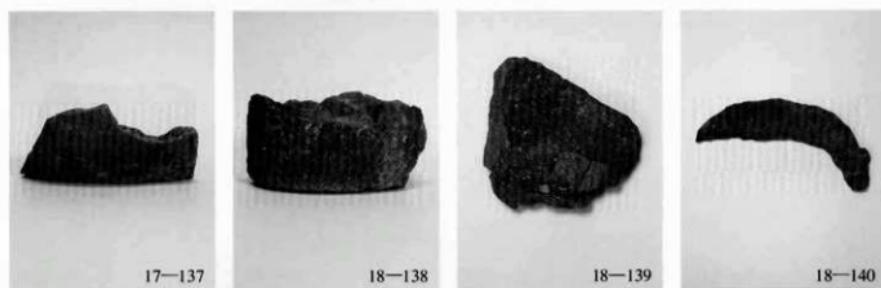
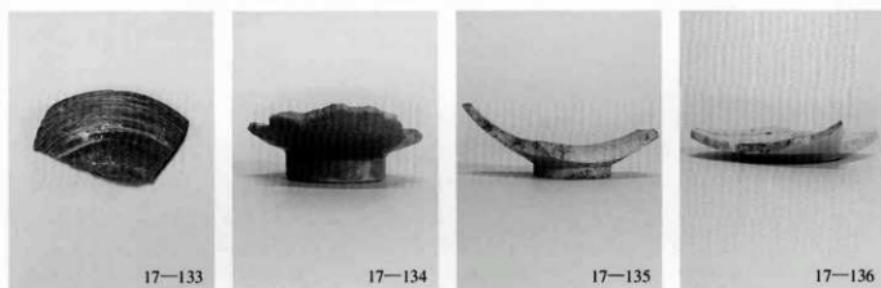
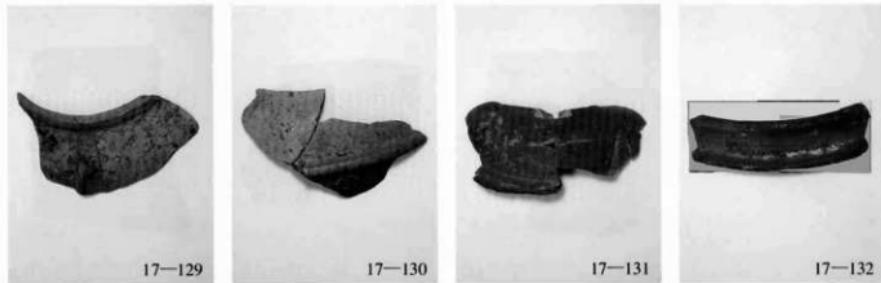


15-111



15-112







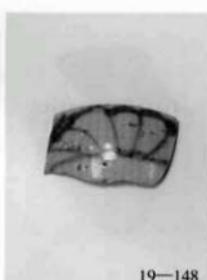
19—145



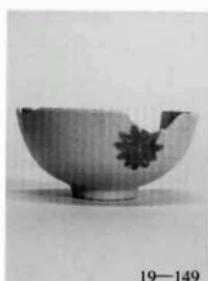
19—146



19—147



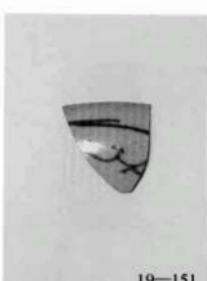
19—148



19—149



19—150



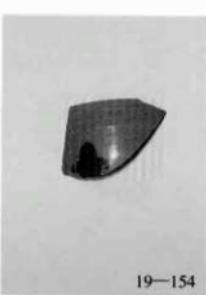
19—151



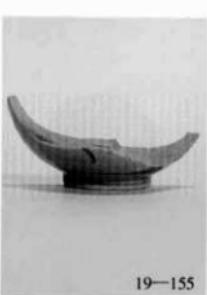
19—152



19—153



19—154



19—155



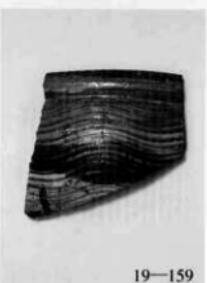
19—156



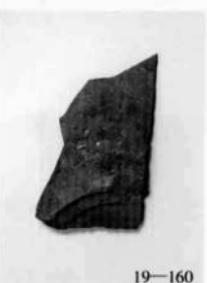
19—157



19—158



19—159



19—160



19—161



19—162



20—163



20—164



20—165



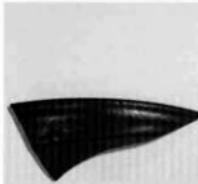
20—166



20—167



21—168



21—169



21—170



21—171



21—172



21—173



21—174



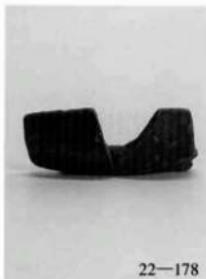
21—175



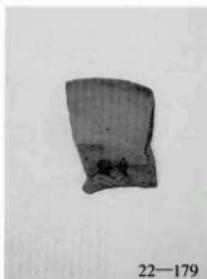
21—176



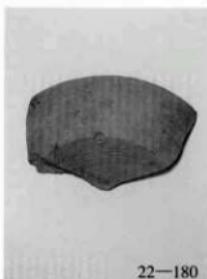
22-177



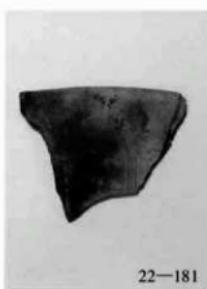
22-178



22-179



22-180



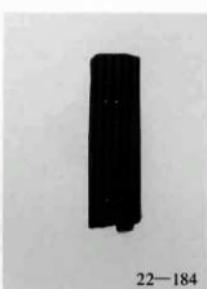
22-181



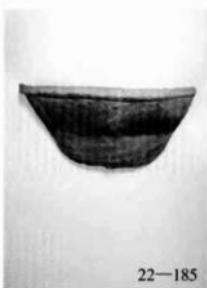
22-182



22-183



22-184



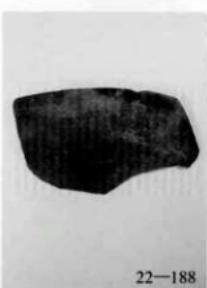
22-185



22-186



22-187



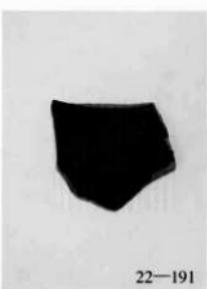
22-188



22-189



22-190



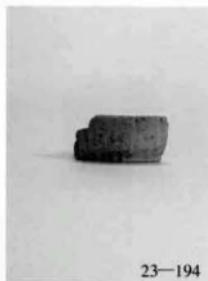
22-191



22-192



23—193



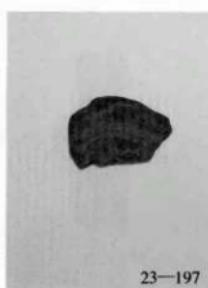
23—194



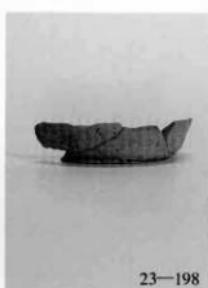
23—195



23—196



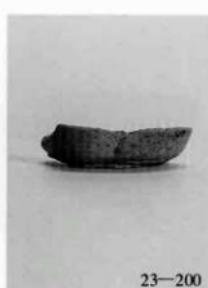
23—197



23—198



23—199



23—200



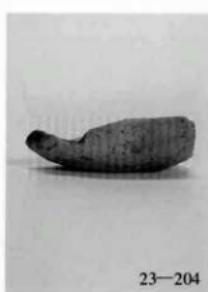
23—201



23—202



23—203



23—204



23—205



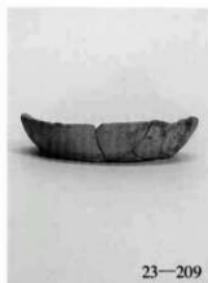
23—206



23—207



23—208



23-209



23-210



23-211



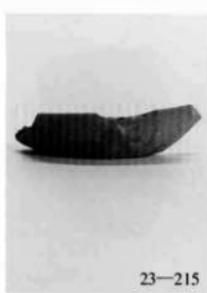
23-212



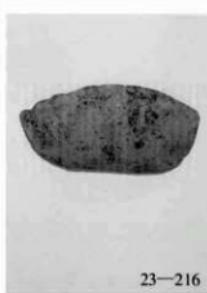
23-213



23-214



23-215



23-216



23-217



23-218



23-219



23-220



23-221



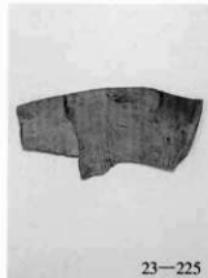
23-222



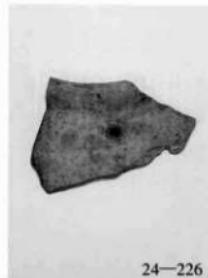
23-223



23-224



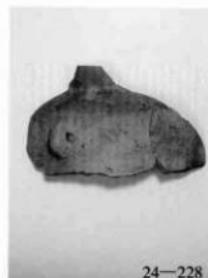
23—225



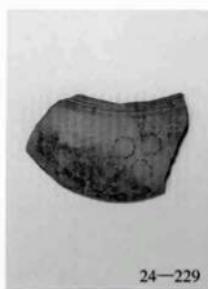
24—226



24—227



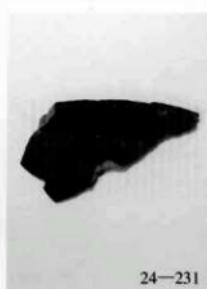
24—228



24—229



24—230



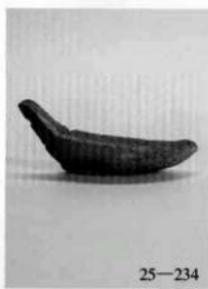
24—231



25—232



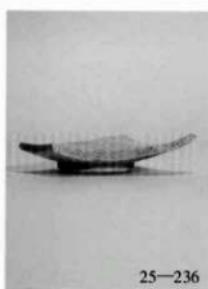
25—233



25—234



25—235



25—236



25—237



25—238



25—239



25—240



26—241



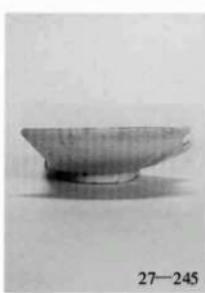
26—242



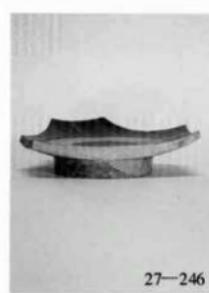
26—243



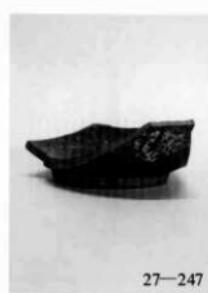
26—244



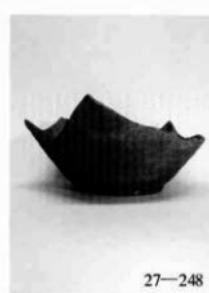
27—245



27—246



27—247



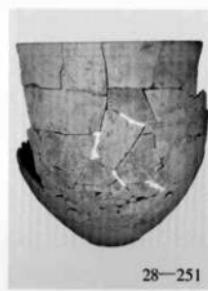
27—248



27—249



27—250



28—251



28—252



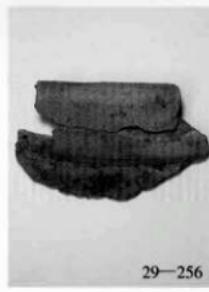
28—253



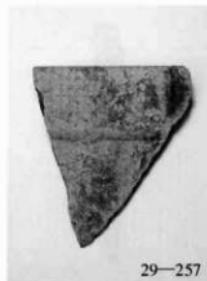
28—254



28—255



29—256



29—257



29—258



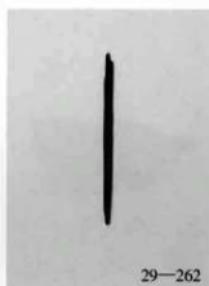
29—259



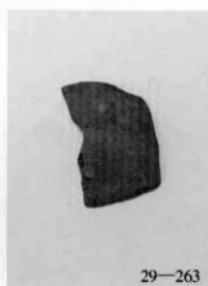
29—260



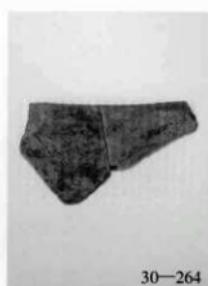
29—261



29—262



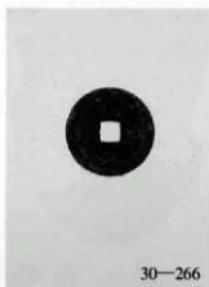
29—263



30—264



30—265



30—266



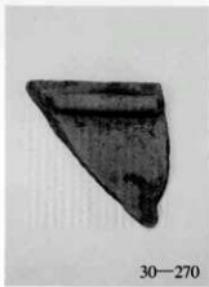
30—267



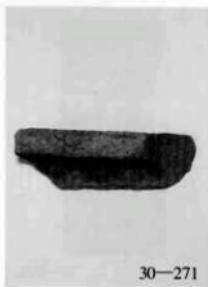
30—268



30—269



30—270



30—271



30—272



30-273



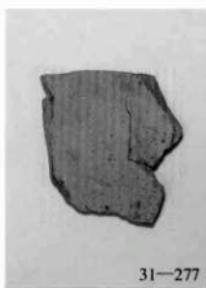
30-274



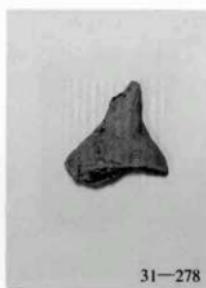
30-275



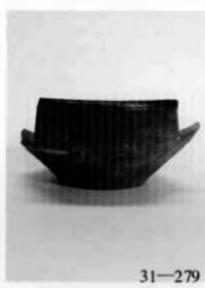
30-276



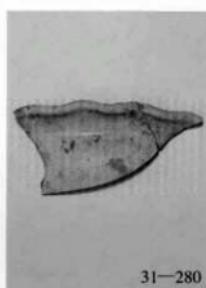
31-277



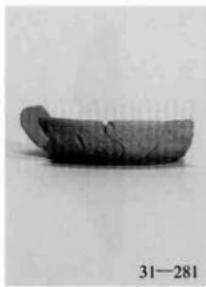
31-278



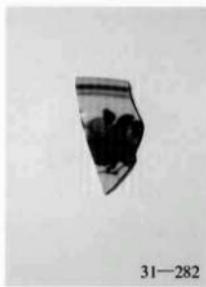
31-279



31-280



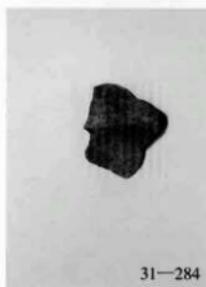
31-281



31-282



31-283



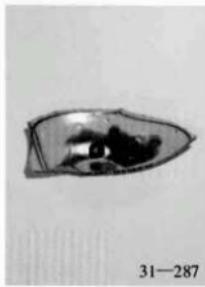
31-284



31-285



31-286



31-287

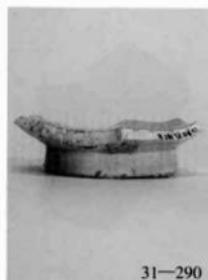


31-288

Pla.42



31—289



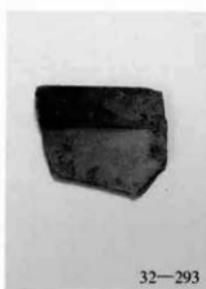
31—290



31—291



32—292



32—293



32—294



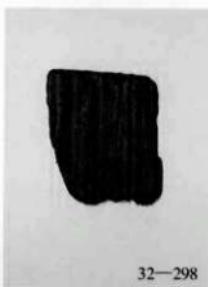
32—295



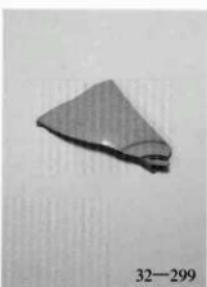
32—296



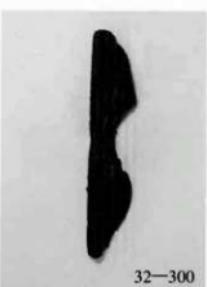
32—297



32—298



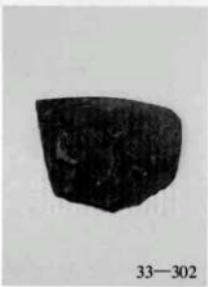
32—299



32—300



33—301



33—302



33—303



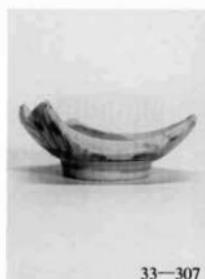
33—304



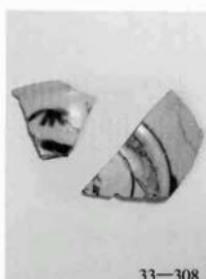
33—305



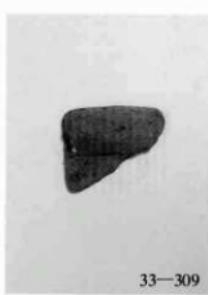
33—306



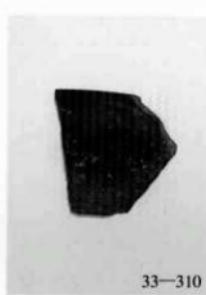
33—307



33—308



33—309



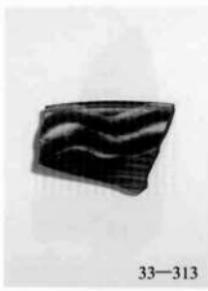
33—310



33—311



33—312



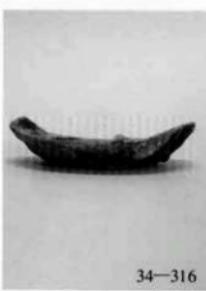
33—313



33—314



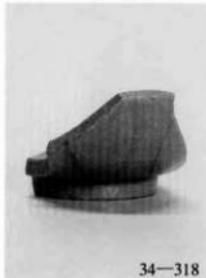
33—315



34—316



34—317



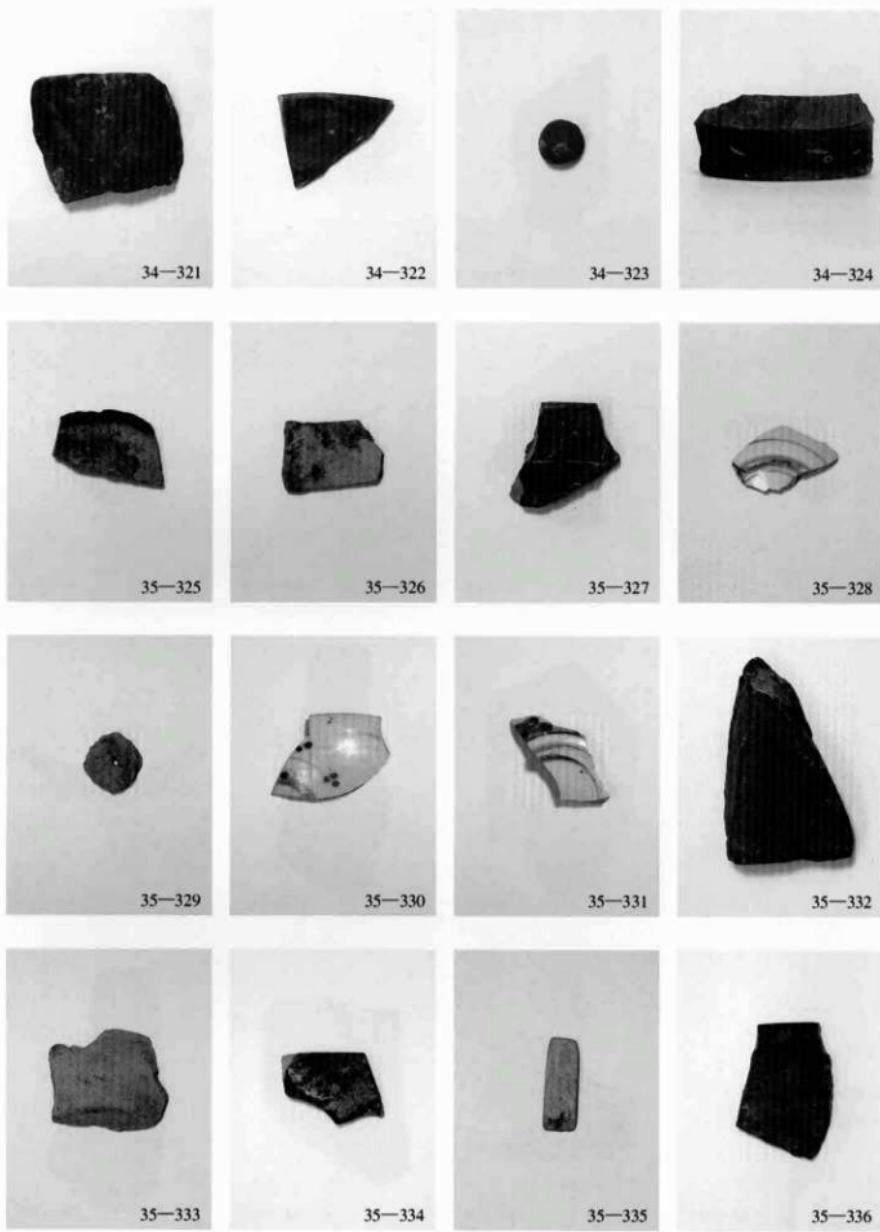
34—318

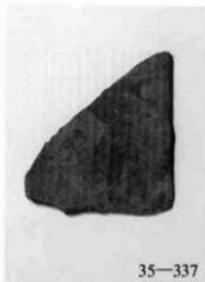


34—319



34—320





35—337



35—338



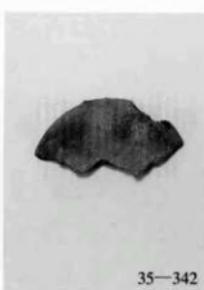
35—339



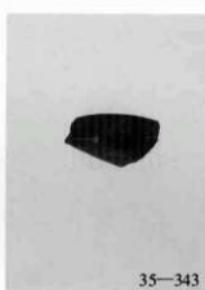
35—340



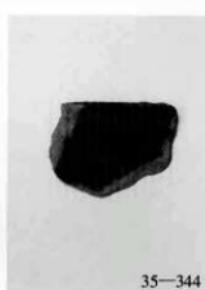
35—341



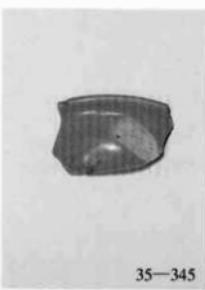
35—342



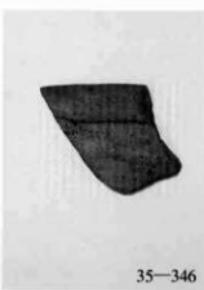
35—343



35—344



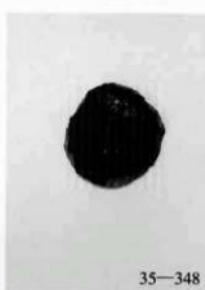
35—345



35—346



35—347



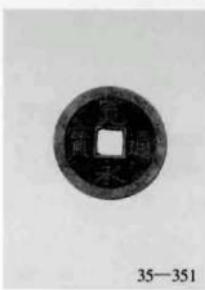
35—348



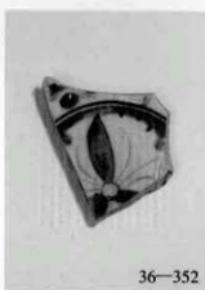
35—349



35—350



35—351



36—352



36—353



36—354



36—355



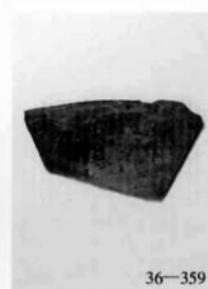
36—356



36—357



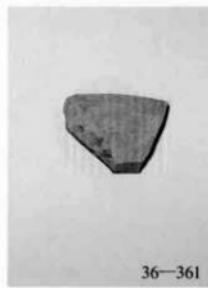
36—358



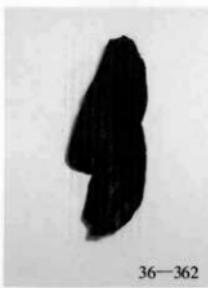
36—359



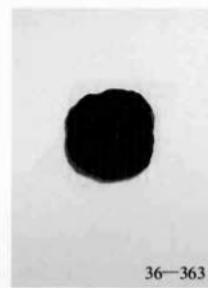
36—360



36—361



36—362



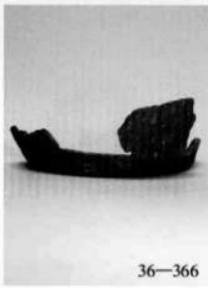
36—363



36—364



36—365



36—366



36—367



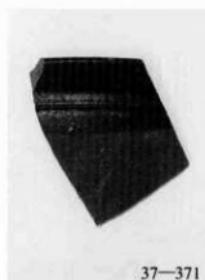
37—368



37-369



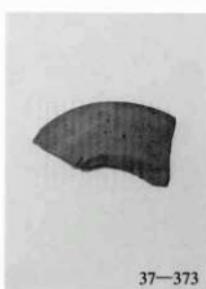
37-370



37-371



37-372



37-373



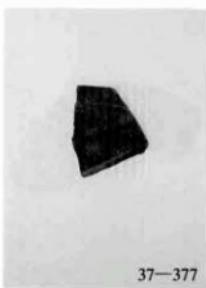
37-374



37-375



37-376



37-377



37-378



37-379



37-380



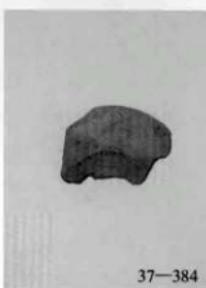
37-381



37-382



37-383



37-384



37—385



37—386



37—387



38—388



38—389



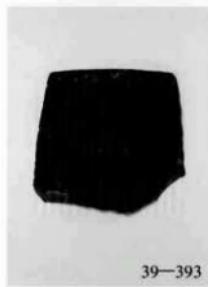
39—390



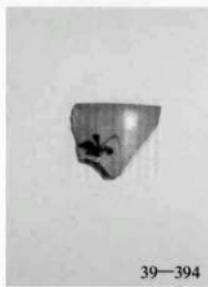
39—391



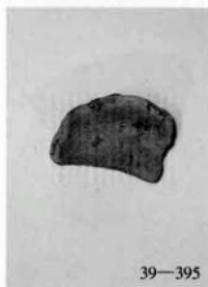
39—392



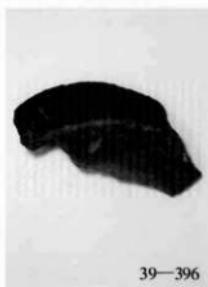
39—393



39—394



39—395



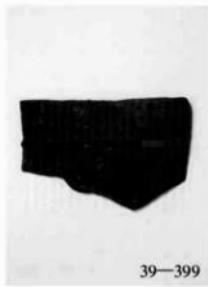
39—396



39—397



39—398



39—399



39—400



39—401



39—402



39—403



39—404



39—405



39—406



39—407



39—408



39—409



39—410



40—411



40—412



40—413



40—414



40—415



40—416

水田上町遺跡

筑後市文化財調査報告書

第63集

平成17年3月31日

発 行 筑後市教育委員会

福岡県筑後市大字山ノ井898

印 刷 (資)四ヶ所印刷

福岡県甘木市大字馬田336